

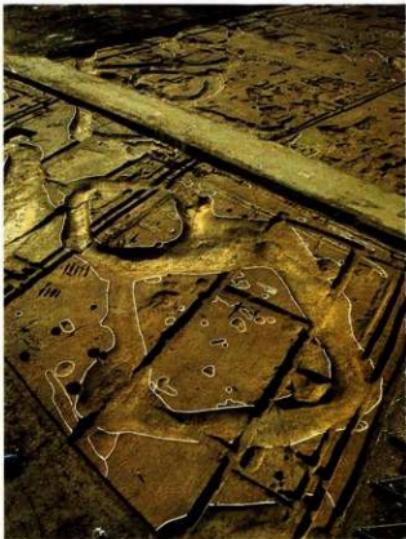
招提中町遺跡

-府営枚方牧野東住宅建て替えに伴う弥生時代墓域の調査-

(本文編)

2002年3月

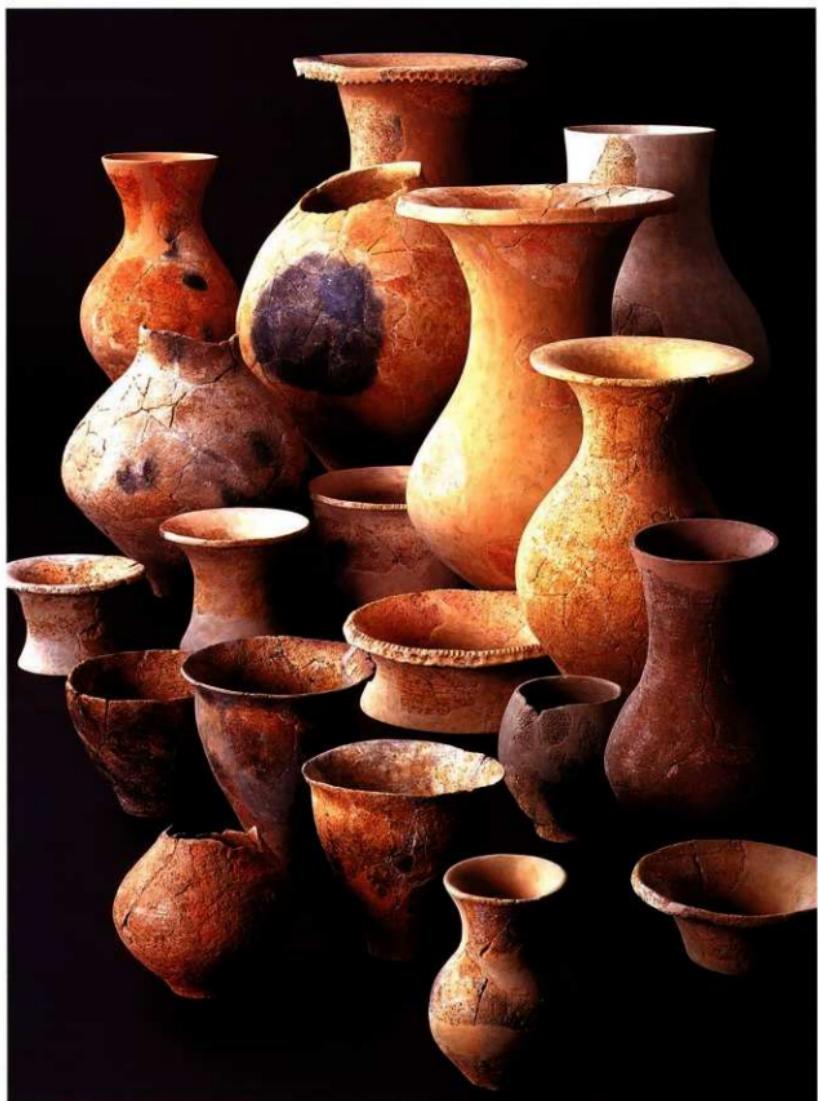
大阪府教育委員会



舜生時代中期方形周溝墓



古墳時代前期竪穴住居跡



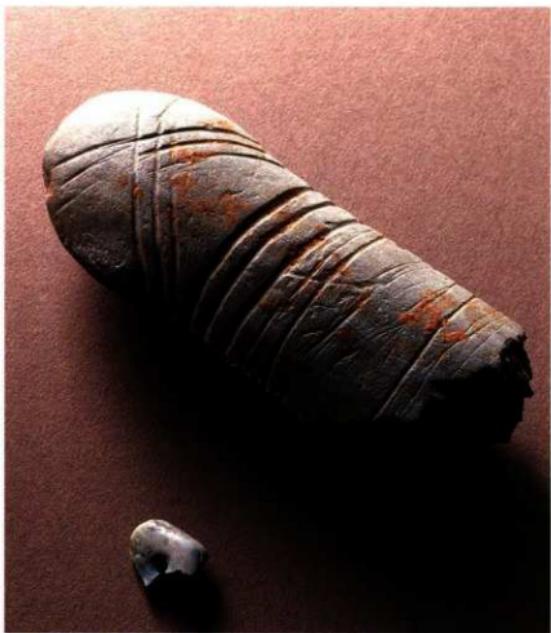
前期・中期弥生土器



石斧 石庖丁



石鏃 石劍



石棒 勾玉

招 提 中 町 遺 跡

-府営枚方牧野東住宅建て替えに伴う弥生時代墓域の調査-

(本文編)

2002年3月

大阪府教育委員会

は
し
が
き

招提中町遺跡の所在する枚方市は、大阪府東北部に位置する中核都市で、淀川の水運を利用して、古くから京阪間の要衝として発展してきました。

招提中町遺跡は、交野ヶ原と呼ばれた枚方台地の中央を流れる穂谷川下流の右岸に位置しています。このたびの府営枚方牧野東住宅建て替え工事に伴い、初めて本格的な発掘調査が実施されることとなりました。

今回の発掘調査では、弥生時代から中世にかかる遺構、遺物が数多く見つかりました。なかでも弥生時代の成果としては、前期から中期にかけての人々の住居の跡が見つかっただけでなく、中期前半の方形周溝墓が30基も見つかり、ここに暮らした有力者達の墓地が営まれていたことがわかりました。これまで知られていなかった弥生時代のムラの跡が姿を現してきました。北河内の弥生時代を復元する上で重要な資料を提供することとなりました。

最後に、調査に際してご協力、ご指導いただきました関係各位に深く感謝するとともに、今後とも文化財保護行政に関して一層のご理解、ご協力をお願い申し上げます。

平成14年3月

大阪府教育委員会

文化財保護課長 小林 栄

例　言

1. 本書は、府営枚方牧野東住宅建て替え工事に伴い実施した、枚方市東牧野町に所在する招提中町遺跡の発掘調査報告書である。
2. 本調査は、大阪府建築都市部住宅整備課から依頼を受け、大阪府教育委員会が実施した。平成10・11年度は、文化財保護課調査第二係技師山上弘を担当者として現地調査を実施し、資料係技師井西貴子を担当者として遺物整理を調査と併行して実施した。平成12・13年度は、調査第一グループ技師山上及び調査管理グループ技師小浜成を担当者として本報告書刊行までの整理作業を行なった。
3. 本調査の写真測量は、平成10年度国際航業株式会社、平成11年度株式会社パスコに委託した。
なお撮影フィルムについては各社において保管している。
4. 本調査で出土した石器、石材および玉片の非破壊分析を遺物分析研究所、赤色顔料の分析を川崎地質株式会社に委託した。
5. 本書に掲載した石器実測図の一部を株式会社アルカに委託した。
6. 本書に掲載した遺物写真的撮影を有限会社阿南写真工房に委託した。
7. 調査に際しては、大阪府建築都市部、枚方市教育委員会、(財)枚方市文化財研究調査会、地元自治会をはじめ、下記の諸氏にご指導、ご助言をいただいた。ここに厚く感謝する次第である。
平川清式 大竹弘之 西田敏秀 濱田延光 宇治原靖泰 大庭重信 森岡秀人 喜谷美宣
奥田 尚 【順不同、敬称略】
8. 本書に用いた標高はすべてT.P.(東京湾標準潮位)による。また座標は国土座標を使用し、挿図中に示す方位は座標北である。
9. 調査・遺物整理・報告書作成に要した経費は、全額を大阪府建築都市部が負担した。
10. 本書の執筆・編集は山上が行ない、古墳時代前期の遺物については調査管理グループ技師山田隆一が執筆した。

目 次

はしがき 比
例　　目 iv

第1部	第I章	
調査成果 1	調査の経過	3
	1. 調査に至る経緯 3	
	2. 調査の方法 3	
第II章		7
周辺の環境		
	1. 地理的環境 7	
	2. 歴史的環境 7	
第III章		11
調査の成果		
	1. 基本層序 11	
	2. 検出遺構の概要 12	
	3. 弥生時代の遺構と遺物 16	
	4. 古墳時代の遺構と遺物 108	
	5. 歴史時代の遺構と遺物 148	
第IV章		202
まとめ		
	1. 弥生時代前期の遺構について 202	
	2. 方形周溝墓の群構造と埋没過程 203	
	3. 弥生時代の集落址と出土遺物 205	
	4. 古墳時代の集落について 206	
	5. 飛鳥時代以降の招提中町遺跡 207	
第2部	第V章	211
分析成果 209	石器の石材とその採石地　奥田 尚	
	1. はじめに 211	
	2. 石種の特徴と採石地について 211	
	3. 石種の使用傾向と採石地 217	
第VI章		218
招提中町遺跡出土石器、石片の原産地分析　薦科 哲男		
	1. はじめに 218	
	2. サスカイト、ガラス質安山岩原石の分析 219	
	3. 結果と考察 221	
第VII章		245
招提中町遺跡出土の玉片の非破壊		
による蛍光X線分析結果　薦科 哲男		
	1. はじめに 245	
	2. 結果と考察 246	
第VIII章		249
14号方形周溝墓出土赤色顔料分析結果　川崎地質株式会社		
	1. 分析の目的と方法 249	
	2. 分析結果 250	
	3. 考察 250	
報告書抄録		253

挿図目次

図 1 府営枚方牧野東住宅と調査地の位置	4
図 2 地区割の方法	6
図 3 調査区の配置	6
図 4 枚方市の位置	7
図 5 周辺遺跡分布図(1:50,000)	8
図 6 基本層序	11
図 7 検出遺構平面図	13~14
図 8 包含層等出土遺物1	15
図 9 S K3519遺物出土状況・断面図	16
図10 S K3519・3526出土遺物	16
図11 弥生時代前期遺構平面図1	17~18
図12 S K3019遺物出土状況・断面図	19
図13 S K3019出土遺物	19
図14 S K2255遺物出土状況・断面図	20
図15 S K2255出土遺物1	20
図16 S K2255出土遺物2	21
図17 S D2925平面図・断面図・遺物出土状況	22
図18 S D2925出土遺物	23
図19 弥生時代前期遺構平面図2	24
図20 弥生時代前期遺構出土遺物1	25
図21 弥生時代前期遺構出土遺物2	26
図22 弥生時代前期遺構出土遺物3	27
図23 弥生時代前期遺構出土遺物4	28
図24 包含層等出土遺物2	29
図25 方形周溝墓平面図	30
図26 11号方形周溝墓平面図・断面図	31
図27 11号方形周溝墓出土遺物	31
図28 1・12・13・14号方形周溝墓断面図	32
図29 1・12・13・14号方形周溝墓平面図	33~34
図30 12・13号方形周溝墓遺物出土状況・立面図	35
図31 12・13・14号方形周溝墓出土遺物	36
図32 2・3号方形周溝墓平面図	37
図33 2・3号方形周溝墓出土遺物	38
図34 2・3号方形周溝墓断面図	38
図35 1・2・4・8・10・14・21号方形周溝墓出土遺物	39
図36 4号方形周溝墓断面図	40
図37 4号方形周溝墓平面図	41
図38 5・7・29号方形周溝墓断面図	42
図39 5・7・29号方形周溝墓平面図	43
図40 5・15・16・17号方形周溝墓他出土遺物	44
図41 15・16号方形周溝墓平面図・断面図	45
図42 6・17号方形周溝墓断面図	46
図43 6・17号方形周溝墓平面図	47
図44 9・21号方形周溝墓出土遺物	48
図45 8・9・10・21・27号方形周溝墓平面図	49~50
図46 8・9・10・21・27号方形周溝墓断面図	51
図47 22号方形周溝墓断面図	52
図48 22号方形周溝墓平面図	53
図49 22・23号方形周溝墓出土遺物	54
図50 22号方形周溝墓出土遺物	55

图51	23号方形周溝墓断面图	55
图52	23号方形周溝墓平面图	56
图53	23号方形周溝墓遗物出土状况·立面图	57
图54	23号方形周溝墓出土遗物	58
图55	24·25号方形周溝墓平面图·断面图·遗物出土状况·出土遗物	60
图56	26·28号方形周溝墓平面图·断面图·遗物出土状况·出土遗物	61
图57	18号方形周溝墓断面图	62
图58	18号方形周溝墓平面图	63~64
图59	18号方形周溝墓出土遗物1	65
图60	18号方形周溝墓出土遗物2	66
图61	18号方形周溝墓出土遗物3	67
图62	19号方形周溝墓平面图·断面图·遗物出土状况	68
图63	19号方形周溝墓出土遗物1	69
图64	19号方形周溝墓出土遗物2	70
图65	20号方形周溝墓平面图·断面图	71~72
图66	20号方形周溝墓出土遗物1	74
图67	20号方形周溝墓出土遗物2	75
图68	20号方形周溝墓出土遗物3	76
图69	20号方形周溝墓出土遗物4	77
图70	20号方形周溝墓出土遗物5	78
图71	20号方形周溝墓出土遗物6	79
图72	20号方形周溝墓出土遗物7	80
图73	20号方形周溝墓出土遗物8	81
图74	20号方形周溝墓出土遗物9	82
图75	20号方形周溝墓出土遗物10	83
图76	30号方形周溝墓平面图·断面图	85
图77	30号方形周溝墓出土遗物	86
图78	S K1550遗物出土状况·断面图	87
图79	S K2015遗物出土状况·断面图	87
图80	S K1550出土遗物	88
图81	S K2015出土遗物	89
图82	9·10号竖穴住居跡出土遗物	90
图83	9·10号竖穴住居跡平面图·断面图	91
图84	弥生時代中期遺構平面圖	93~94
图85	弥生時代中期遺構出土遗物1	95
图86	弥生時代中期遺構出土遗物2	96
图87	弥生時代中期遺構出土遗物3	97
图88	包含層等出土遗物3	98
图89	包含層等出土遗物4	99
图90	包含層等出土遗物5	100
图91	包含層等出土遗物6	101
图92	包含層等出土遗物7	102
图93	包含層等出土遗物8	103
图94	包含層等出土遗物9	104
图95	包含層等出土遗物10	106
图96	包含層等出土遗物11	107
图97	古墳時代前期遺構平面圖1	109~110
图98	1号竖穴住居跡遗物出土状况·立面图	111
图99	1号竖穴住居跡平面图·断面图	111
图100	1号竖穴住居跡出土遗物	112
图101	2号竖穴住居跡平面图·断面图	113
图102	3号竖穴住居跡出土遗物	114

図103	3号竪穴住居跡平面図・断面図	114
図104	4・5号竪穴住居跡平面図・断面図	115
図105	5号竪穴住居跡炭化材出土状況	116
図106	4・5号竪穴住居跡出土遺物	116
図107	6号竪穴住居跡平面図・断面図	117
図108	6号竪穴住居跡出土遺物	118
図109	7号竪穴住居跡平面図・断面図	118
図110	7号竪穴住居跡遺物出土状況・断面図	119
図111	7号竪穴住居跡出土遺物1	119
図112	7号竪穴住居跡出土遺物2	120
図113	8号竪穴住居跡平面図・断面図	121
図114	8号竪穴住居跡出土遺物	122
図115	S K582遺物出土状況・断面図	122
図116	S K582出土遺物	122
図117	S K1080出土遺物	123
図118	S K1079・1080遺物出土状況・立面図	123
図119	S K495出土遺物	124
図120	S K495平面図・断面図・遺物出土状況	124
図121	S K4646遺物出土状況・断面図	125
図122	S K4646出土遺物	125
図123	古墳時代前期遺構出土遺物1	126
図124	12号竪穴住居跡遺物出土状況・立面図	126
図125	古墳時代前期遺構平面図2	127～128
図126	12号竪穴住居跡平面図・断面図	129
図127	12号竪穴住居跡出土遺物	130
図128	11・13号竪穴住居跡出土遺物	130
図129	11・13号竪穴住居跡平面図・断面図	131
図130	15号竪穴住居跡平面図・断面図	132
図131	18号竪穴住居跡平面図・断面図	133
図132	18号竪穴住居跡出土遺物	134
図133	19号竪穴住居跡平面図・断面図	134
図134	S K4945平面図・断面図	135
図135	S K4945出土遺物	135
図136	S D4888(23号方形周溝墓)遺物出土状況	137
図137	S D4888出土遺物1	138
図138	S D4888出土遺物2	139
図139	S D4888出土遺物3	141
図140	S D4553出土遺物	143
図141	S D3424・2925・3430・2395出土遺物	144
図142	古墳時代前期遺構・包含層出土遺物2	146
図143	S K2874遺物出土状況・断面図	146
図144	S K2874出土遺物	147
図145	古墳時代中期遺構出土遺物	147
図146	歴史時代遺構平面図1	149～150
図147	1・2号掘立柱建物跡平面図・断面図	151
図148	3・4・6・7号掘立柱建物跡平面図・断面図	152
図149	1・5・20・24号掘立柱建物跡出土遺物	153
図150	5・24号掘立柱建物跡平面図・断面図	154
図151	19・20号掘立柱建物跡平面図・断面図	155
図152	S K420出土遺物	157
図153	S K177・420・5565・4675平面図・断面図	157
図154	S K984遺物出土状況・断面図	158

図155	S K984出土遺物	158
図156	歴史時代遺構・包含層出土遺物1	159
図157	歴史時代遺構平面図2	161~162
図158	10号掘立柱建物跡平面図・断面図	163
図159	8・9号掘立柱建物跡平面図・断面図	164
図160	S K1103・1508・1339平面図・断面図	165
図161	S K1508・1339出土遺物	166
図162	S K260遺物出土状況・断面図	167
図163	S K260出土遺物	167
図164	P 1568遺物出土状況・立面図	168
図165	P 1568出土遺物	168
図166	S D1596平面図・断面図	168
図167	S D1596出土遺物	168
図168	歴史時代遺構・包含層出土遺物2	170
図169	立会調査出土遺物	171
図170	歴史時代遺構平面図3	173~174
図171	17号竪穴住居跡出土遺物	175
図172	17号竪穴住居跡平面図・断面図・遺物出土状況	175
図173	20号竪穴住居跡平面図・断面図	176
図174	20号竪穴住居跡遺物出土状況・立面図	176
図175	20・16号竪穴住居跡出土遺物	177
図176	16号竪穴住居跡平面図・断面図	178
図177	16号竪穴住居跡遺物出土状況・立面図	178
図178	21・22号掘立柱建物跡平面図・断面図	179
図179	11号掘立柱建物跡平面図・断面図	180
図180	11号掘立柱建物跡出土遺物	181
図181	17号掘立柱建物跡平面図・断面図	181
図182	12号掘立柱建物跡平面図・断面図	182
図183	13号掘立柱建物跡平面図・断面図	183
図184	15・16号掘立柱建物跡平面図・断面図	184
図185	歴史時代遺構・包含層出土遺物3	185
図186	歴史時代遺構平面図4	187
図187	14号掘立柱建物跡平面図・断面図	188
図188	14号掘立柱建物跡出土遺物	189
図189	S K1625出土遺物	189
図190	歴史時代遺構平面図5	190
図191	23号掘立柱建物跡平面図・断面図	191
図192	S K1712出土遺物1	192
図193	S K1712出土遺物2	193
図194	S K4011出土遺物	194
図195	歴史時代遺構出土遺物5	195
図196	歴史時代遺構平面図6	196
図197	14号竪穴住居跡出土遺物	197
図198	14号竪穴住居跡平面図・断面図	197
図199	18号掘立柱建物跡平面図・断面図	198
図200	99-2区遺構・包含層出土遺物1	199
図201	99-2区遺構・包含層出土遺物2	200
図202	サヌカイト及びサヌカイト様岩石の原産地	220
図203	招提中町遺跡出土玉片(苔瑪瑙)(70410)の蛍光X線スペクトル	248
図204	松界里産天河石原石(70411)の蛍光X線スペクトル	248
図205	外坊里産天河石原石(70412)の蛍光X線スペクトル	248
図206	温井里産天河石原石(70413)の蛍光X線スペクトル	248

表 目 次

表1-1	各サヌカイトの原産地における原石群の元素比の平均値と標準偏差値	225
表1-2	各サヌカイトの原産地における原石群の元素比の平均値と標準偏差値	226
表1-3	原産地不明の組成の似た遺物で作られた遺物群の元素比の平均値と標準偏差値	227
表2	岩屋原産地からのサヌカイト原石66個の分類結果	228
表3	和泉・岸和田原産地からのサヌカイト原石72個の分類結果	228
表4	和歌山市梅原原産地からのサヌカイト原石21個の分類結果	228
表5-1-1	招提中町遺跡出土サヌカイト製石片の元素比分析結果	229
表5-1-2	招提中町遺跡出土サヌカイト製石片の元素比分析結果	230
表5-1-3	招提中町遺跡出土サヌカイト製石片の元素比分析結果	231
表5-1-4	招提中町遺跡出土サヌカイト製石片の元素比分析結果	232
表5-2	美園遺跡出土サヌカイト製石片の元素比分析結果	233
表5-3	田井中遺跡出土サヌカイト製石片の元素比分析結果	233
表5-4	倉垣遺跡出土サヌカイト製石片の元素比分析結果	234
表5-5	東奈良遺跡出土サヌカイト製石片の元素比分析結果	234
表5-6	神田北遺跡出土サヌカイト製石片の元素比分析結果	234
表5-7	八雲遺跡出土サヌカイト製石片の元素比分析結果	235
表6-1-1	招提中町遺跡出土のサヌカイト製石器・剥片の原材产地推定結果	236
表6-1-2	招提中町遺跡出土のサヌカイト製石器・剥片の原材产地推定結果	237
表6-1-3	招提中町遺跡出土のサヌカイト製石器・剥片の原材产地推定結果	238
表6-1-4	招提中町遺跡出土のサヌカイト製石器・剥片の原材产地推定結果	239
表6-1-5	招提中町遺跡出土のサヌカイト製石器・剥片の原材产地推定結果	240
表6-2	美園遺跡出土のサヌカイト製石器・剥片の原材产地推定結果	241
表6-3	田井中遺跡出土のサヌカイト製石器・剥片の原材产地推定結果	241
表6-4	倉垣遺跡出土のサヌカイト製石器・剥片の原材产地推定結果	242
表6-5	東奈良遺跡出土のサヌカイト製石器・剥片の原材产地推定結果	242
表6-6	神田北遺跡出土のサヌカイト製石器・剥片の原材产地推定結果	242
表6-7	八雲遺跡出土のサヌカイト製石器・剥片の原材产地推定結果	243
表7-1	招提中町遺跡出土遺物原材の各産地における採取確率の一例	244
表7-2	美園遺跡出土遺物原材の各産地における採取確率の一例	244
表7-3	田井中遺跡出土遺物原材の各産地における採取確率の一例	244
表7-4	倉垣遺跡出土遺物原材の各産地における採取確率の一例	244
表7-5	東奈良遺跡出土遺物原材の各産地における採取確率の一例	244
表7-6	八雲遺跡出土遺物原材の各産地における採取確率の一例	244
表8	招提中町遺跡出土玉片および天河石原石の元素比および比重の分析結果	247
表9	螢光X線分析結果	250

卷頭図版目次

卷頭図版1	弥生時代中期方形周溝墓	古墳時代前期竪穴住居跡
卷頭図版2	前期・中期弥生土器	
卷頭図版3	石斧 石庖丁	
卷頭図版4	石鐵 石劍	
卷頭図版5	石棒 勾玉	

第 1 部 調 査 成 果

- 第 I 章 調査の経過
- 第 II 章 周辺の環境
- 第 III 章 調査の成果
- 第 IV 章 ま と め



第Ⅰ章 調査の経過

1. 調査に至る経緯

府営枚方牧野東住宅が所在する枚方市東牧野町は、招提中町遺跡の東南に一角を占めている。本府建築都市部住宅整備課では、老朽化した府営住宅を耐火構造の建物に建て替えを推進しているところであり、府営枚方牧野東住宅においても木造住宅及び簡易耐火住宅の建て替え工事が実施されることとなった。

当該地は、招提中町遺跡として周知されているため、平成7年度から本府教育委員会事務局文化財保護課は、建築部住宅建設課（当時）と建て替え工事に先立つ発掘調査の実施について協議を行なってきた。招提中町遺跡は、既往の調査例が少ないため、府営住宅建て替え予定地の遺構・遺物の有無、及び調査深度の確認を目的として、建築部長から依頼を受け、試掘調査を実施することとなった。

試掘調査は、文化財保護課調査第二係主査松村隆文（当時・故人）を担当として平成8年3月に行なった。牧野東住宅の敷地は、約88,000m²の範囲に及ぶため、数期にわたる建て替え工事の工程が計画されている。その計画の第1期建て替え工事予定地は住宅用地の南東部の約18,000m²が対象である。調査は一辺2mの試掘坑を6ヶ所設定し、4ヶ所の試掘坑から遺物包含層が、また包含層が認められなかった2ヶ所の試掘坑から遺構を検出した。包含層・遺構は、弥生時代中期、奈良時代・鎌倉・室町時代の各時代にわたるものであると判明した。この調査成果を踏まえ、工事の実施にあたっては、発掘調査について文化財保護課と事前に協議することを建築部長あてに回答した。

住宅建設課は、仮設道路整備、予定地の仮囲い、住宅の撤去工事を平成8年度に行なう予定であったが、地元調整の遅れから、平成9年度中に着手し平成10年4月に完了予定となった。これに基づき、平成10年4月に建築都市部長から教育委員会教育長あて埋蔵文化財調査の実施について依頼があった。

現地調査は、平成10年8月7日に着手し平成12年3月24日に終了した。

出土遺物の整理は、建築都市部長の依頼により平成12・13年度招提中町遺跡出土遺物整理事業として文化財調査事務所において行なった。

2. 調査の方法

調査の範囲は、府営住宅第1期建て替え工事予定地約15,000m²を全面発掘することとなった。2年度にまたがる期間と掘削土を場外へ搬出しないこと、道路・ガス・水道・下水道切り替え工

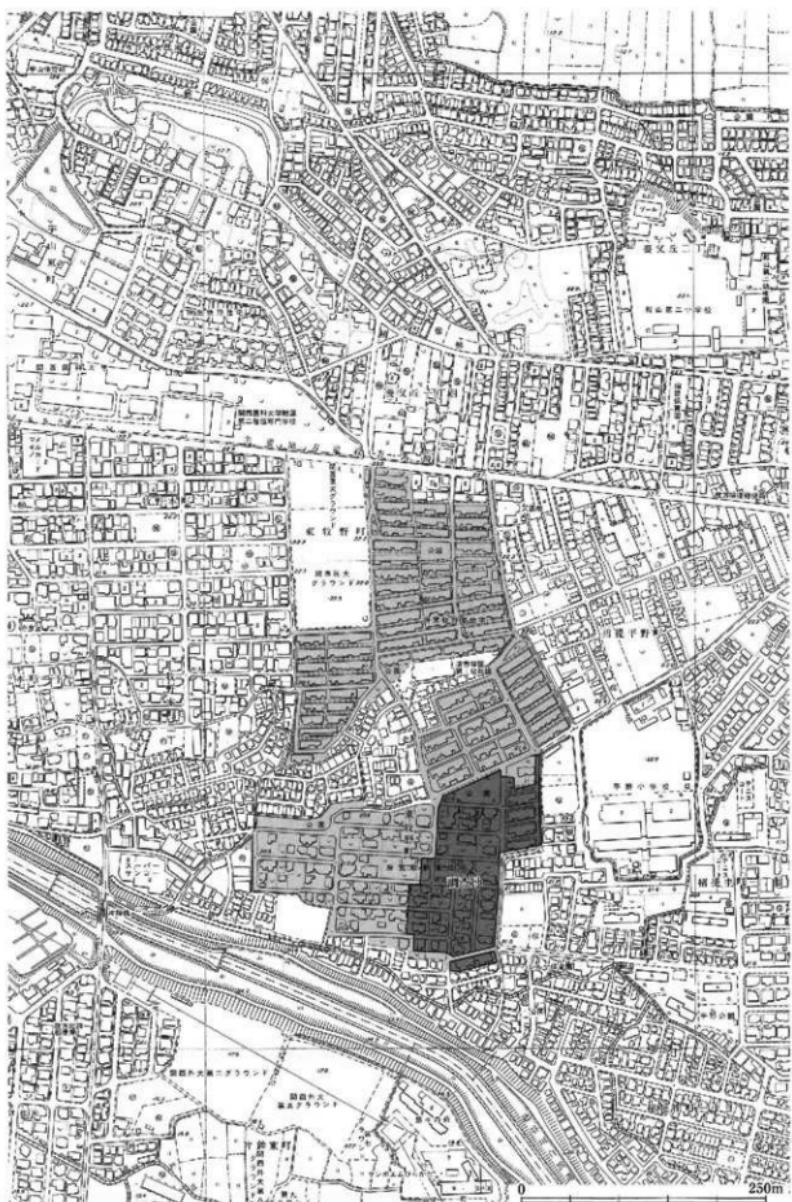


図1 府営牧方牧野東住宅と調査地の位置

事等の理由により、全体を8地区の調査区に分割して調査を行なった。

掘削は、府営住宅建設時に持ち込まれた盛土及び旧耕土を重機により除去し、それ以下を人力で行なった。包含層掘削及び遺構検出後、航空写真測量で遺構面の図化を行ない、調査終了後掘削土を流用して重機で埋め戻した。

調査区の設定については、年度ごとに調査番号と調査区名を与えた。調査番号は、本府教育委員会文化財保護課が行なう発掘調査すべてに年度を通じて与えられる。府営住宅建て替えに伴う招提中町遺跡の発掘調査は、平成10年度-98027・平成11年度-99001であり、本調査及び整理作業すべてに用いている。調査区は年度内の着手の早いものから順に98-1調査区・98-2調査区と与えた。平成10年度は3ヶ所の調査区で98-1調査区～98-3調査区、平成11年度は5ヶ所の調査区で99-1調査区～99-5調査区とした。

各調査区内では、本府教育委員会で共通した地区割りを用いて地区名を表示しており、遺構の所在、遺物の取り上げ等に用い、本報告の記述でも使用している。地区割りの基準は以下のとおりである。

地区割りの基準線は国土座標軸（第IV座標系）を使用し、大から小へ6段階に区分することが可能である。今回の調査では、第I区画から第IV区画までを用いて表示した。

第I区画は、大阪府が独自に設定した1万分の1地形図の地区割りを用い、区画の最南端を起点とし、南北軸をA～O、東西軸を0～8で表示する。

第II区画は、第I区画を縦横各4分割の16分割にし、2,500分の1地形図1枚の大きさとなる。区画の表示は南北端を1とし東へ進み北東端が16となる。

第III区画は、第II区画内を100m単位で区画する。南北15、東西20の区画になる。表示方法はこの区画からラインについて与えられ、北東端を基点に、南北をA～O、東西を1～20とし、区画名はラインの北東交点名（ex.A 1）を使う。

第IV区画は、第III区画内を10m単位で区画する。南北、東西各10区画となる。表示方法は第III区画と同様である。北東端を基点に南北をa～j、東西を1～10で表す。

遺構番号は、遺構個々に対して1から順に番号を付した。複数のビットで構成される建物、土坑・溝・ビット等で構成される竪穴住居跡には個々に遺構番号を与えた上で、○○号櫛立柱建物跡、○○号竪穴住居跡と名称を与えている。また、方形周溝墓については、複数の遺構で構成されたり、他の方形周溝墓と溝を共有したりするがあるため、本来墳丘が築かれたと推定できるものについて○○号方形周溝墓と名称を与えた。

例えば、遺構番号2015は、平成11年度（99001）99-1調査区のK7-6-D13-h9で検出した遺構である。このように第IV区画まで表示しておけば、10m四方の区画内で遺構を認識することができる。

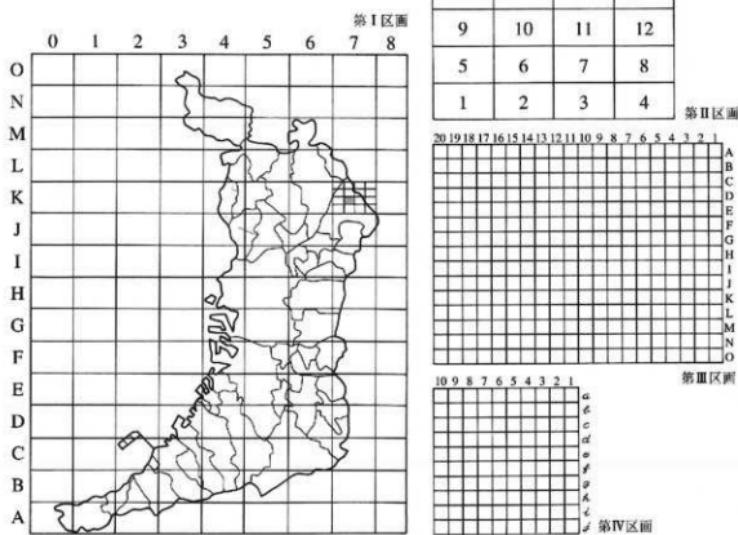


図2 地区割の方法

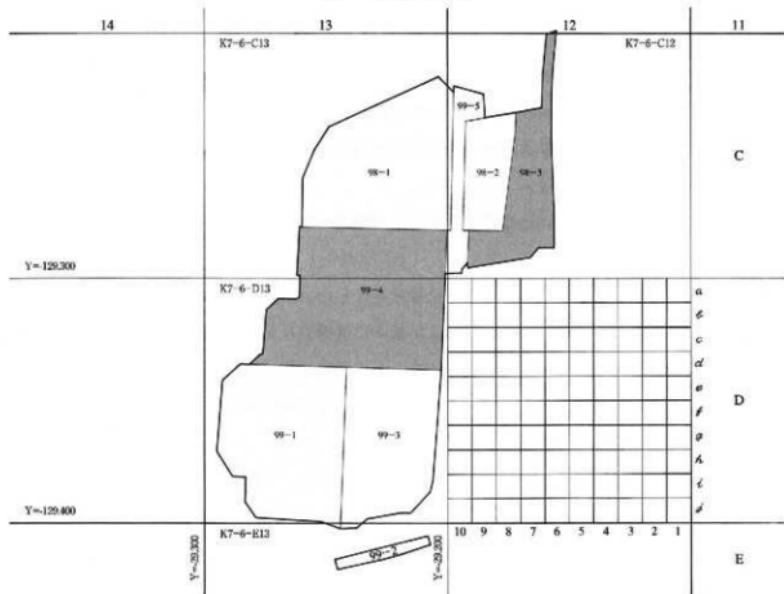


図3 調査区の配置

第Ⅱ章 周辺の環境

1. 地理的環境

招提中町（しょだいなかまち）遺跡は、大阪府枚方市東牧野町・招提中町・招提平野町に所在する弥生時代から中世にかけての複合遺跡である。

枚方市は、大阪府東北部に位置する北河内地域の中核都市で、北は淀川を境に高槻市・三島郡島本町と、東は京都府八幡市・京田辺市と、南は交野市・奈良県生駒市と、西は寝屋川市と接している。市内を流れる河川は、北から船橋川・穂谷川・天野川が主たる川で、いずれも北流して淀川に合流する。河川の長さは短く急傾斜で、日頃は渴れ川の様相を示しているが、大雨時には、一度に多量の水を押し流し、洪水を引き起こすこともある。



図4 枚方市の位置

地形的には、山地・丘陵・台地・低地の4つに大きく区分される。

山地地形は、南の東大阪市に主峰を置く生駒山地の北縁が枚方市に達する。

この山地によって隆起した大阪層群を主体とする丘陵地形があり、穂谷川以北を男山丘陵、天野川下流西方を枚方丘陵と呼称する。

この両丘陵の間に台地があり、高位・中位・低位の段丘面から構成されている。高位段丘は長尾面と呼ばれ、風化が進み赤土化を強く受けている。標高30m～70mを測る。中位段丘は枚方面と呼ばれ穂谷川と天野川・津田川に挟まれた台地面で、標高30m前後である。土壤の風化は弱く、褐色化している程度である。招提中町遺跡は穂谷川右岸の中位段丘上に立地する。低位段丘はほとんど見られない。

低地は、天野川以北で淀川左岸及び淀川の支流である船橋川・穂谷川・天野川の両岸に並行して小規模に見られる。一方天野川以南では、寝屋川市・門真市・守口市・四條畷市・大東市にかけての広範囲に広がり、淀川の堆積作用によって形成された沖積地である。

2. 歴史的環境

旧石器時代 枚方市域では、山地の山麓部と丘陵・台地の縁辺部から石器が出土することが多い。しかし旧石器時代の堆積層である洪積層からの石器の出土は、市内では楠葉東遺跡と藤阪宮山遺跡の2例に限られる。楠葉東遺跡からはナイフ型石器、翼状剥片、石核等800点の資料が出土し、藤阪宮山遺跡では100点以上の資料が2ヶ所に集中して見つかり、付近では楕円形の焼土が検出されている。後の時代の包含層や採取品を含めると10ヶ所以上の地点から旧石器時代の資



- | | | | | | | |
|------------|-----------|-----------------|-------------|------------|------------|------------|
| 1 恵美須遺跡 | 2 合合遺跡 | 3 安満山古墳群 | 4 安満山出土物叢石地 | 5 紅葉山古墳群 | 6 乾燥山遺跡 | 7 鮎田山遺跡 |
| 8 佐野山遺跡 | 9 金澤山古墳 | 10 伊豆山古墳群 | 11 伊豆山古墳群 | 12 木津川遺跡 | 13 木津川遺跡 | 14 朝日山遺跡 |
| 5 桐原山遺跡 | 16 鹿谷寺跡 | 17 鹿谷山遺跡 | 18 上牧遺跡 | 19 神奈遺跡 | 20 鹿谷山遺跡 | 21 井ノ内山遺跡 |
| 22 佐野山小野尻墓 | 23 鹿谷上寺跡 | 24 鹿谷山遺跡 | 25 鹿谷山丸塚 | 26 木津川河床遺跡 | 27 稲葉中之芝遺跡 | 28 佐野東遺跡 |
| 29 佐野山小野尻墓 | 30 猪塚山山遺跡 | 31 鶴鳴丘遺跡 | 32 墓堂丘山遺跡 | 33 女郎山遺跡 | 34 夜吹山遺跡 | 35 志水寺跡 |
| 36 石城跡 | 37 中ノ山遺跡 | 38 木山遺跡 | 39 保坂遺跡 | 40 西ノ口遺跡 | 41 鶴鳴山遺跡 | 42 佐野東遺跡 |
| 43 和紙遺跡 | 44 雷父遺跡 | 45 滝ノ山河岸道路(その1) | 46 宇治山遺跡 | 47 牧野山遺跡 | 48 久須神遺跡 | 49 要父庄遺跡 |
| 50 丹波内村遺跡 | 51 抱擁中町遺跡 | 52 丹波今地遺跡 | 53 長尾西山遺跡 | 54 長尾山遺跡 | 55 丹波東山遺跡 | 56 丹波東遺跡 |
| 57 鹿坂南遺跡 | 58 市屋板山遺跡 | 59 朝日山山遺跡 | 60 共鳴谷山遺跡 | 61 交北城/山遺跡 | 62 丹口山島遺跡 | 63 甲斐田新町遺跡 |

図5 周辺遺跡分布図(1:50,000)

料が見つかり、今後の調査による資料の検出例が増加することが待たれる。招提中町遺跡においてもナイフ形石器等5点の旧石器が出土している。

縄紋時代 縄紋時代の遺跡の検出例は、枚方市内では穂谷川流域に限られる。穂谷遺跡は、交野市の神宮寺遺跡と同じ早期の押型文土器が出土し、前期の爪形文土器も出土している。前期の遺跡と称される津田三ツ池遺跡は石器が採取されたのみで詳細は不明である。交北城ノ山遺跡では晩期の埋甕等遺構に伴う資料が多数出土し、石鎌・石棒や黒曜石も出土する後・晩期の遺跡である。招提中町遺跡でも縄紋時代と推測させる土器片が2点出土している。

弥生時代 枚方市域における弥生時代集落の始まりは、招提中町遺跡からである。前期後半の土器が遺構に伴い出土し、包含層に含まれた同時期の資料数も多いことから前期後半にはこの地で生活を始めていたことがわかる。これ以外の前期資料は、淀川河床の磯島先遺跡から土器片が採取されているのみである。中期前半には、招提中町遺跡の南約600mの穂谷川対岸に交北城ノ山遺跡が成立する。穂谷川を挟んで大きな弥生集落が対峙することとなる。招提中町遺跡では堅穴住居跡2棟、方形周溝墓30基、交北城ノ山遺跡では堅穴住居跡9棟、方形周溝墓42基が見つかっているが、両遺跡ともに中期中頃をもって断絶し、中期後半には続かない。両遺跡から穂谷川を上流に2km遙れた丘陵上で、中期後半に田口山遺跡が成立する。隣接する長尾谷町遺跡も同じ集落跡と考えられ、後期まで存続する。周辺の丘陵には後期後半に成立する長尾西遺跡、藤阪東遺跡、出屋敷遺跡、ごんばう山遺跡等がある。

穂谷川流域以外では、楠葉野田西遺跡で中期の方形周溝墓6基、星丘西遺跡でも方形周溝墓群が検出されている。集落としては、中期中頃に始まる星丘西遺跡や藤田山遺跡で、多数の堅穴住居跡と併にV字溝が検出された。村野西遺跡においても多数の堅穴住居跡が検出された。また後期に始まる遺跡として、鷹塚山遺跡、山之上天堂遺跡、渚遺跡等がある。鷹塚山遺跡では、分銅形土製品、異形土器（皮袋形土製品）、仿製重圓文鏡が出土し、山之上天堂遺跡では、六角形の堅穴住居跡が検出されている。多角形住居跡は、藤阪東遺跡、星丘西遺跡でも検出例がある。

古墳時代 市内の古墳は、前期に万年寺山古墳、藤田山古墳が天野川流域に築造され、いずれの古墳の内部主体は粘土構である。万年寺山古墳は、淀川を望む枚方丘陵の突端部に立地し、8面の鏡が出土した。内6面は三角縁神獸鏡、1面は三角縁竜虎鏡であり、他の1面は平縁の獸帶鏡である。藤田山古墳から粘土構が3基見つかり、その内1つの粘土構からに画文帶神獸鏡1面、銅鏡、鉄鑿、鉄斧、鐵形石製品が出土した。中期には、天野川右岸に禁野車塚古墳が前方部を西に向か築造されている。全長110mを測る。穂谷川左岸に全長107.5mを測る牧野車塚古墳が前方部を東に向か築造されている。周辺の調査では二重にめぐらす空濠が検出され、出土した円筒埴輪

- | | | | | | | |
|-------------|-----------|--------------|---------------|-------------|---------------|-------------|
| 94 牧野車塚古墳群 | 95 佐瀬原 | 96 須坂山遺跡 | 97 淀川東遺跡 | 98 菊島遺跡 | 99 淀川東遺跡(その他) | 100 天元遺跡 |
| 71 中守丘山 | 72 大冢西遺跡 | 73 小坂東遺跡 | 74 淀川東遺跡(その他) | 75 児童山内町遺跡 | 76 東方公園遺跡 | 77 伊賀賀遺跡 |
| 78 枚方古墳 | 79 同東遺跡 | 80 枚方上町遺跡 | 81 日宮遺跡 | 82 山ノ下遺跡 | 83 丘庄西遺跡 | 84 百舌寺遺跡 |
| 85 禁野車塚古墳 | 86 中守尼山古墳 | 87 中守尼山古墳群 | 88 星丘遺跡 | 89 春日淀川東遺跡 | 90 春日城遺跡 | 91 乗吉古墳 |
| 92 金剛山遺跡 | 93 金剛山遺跡 | 94 金剛山遺跡 | 95 金剛山遺跡 | 96 金剛山遺跡 | 97 金野原遺跡 | 98 雷門古墳 |
| 99 田口山遺跡 | 100 藤田山古墳 | 101 藤田山古墳 | 102 中守山古墳 | 103 中守山古墳 | 104 富士山古墳 | 105 山之上天元遺跡 |
| 106 稽王山遺跡 | 107 藤田西遺跡 | 108 淀川エヌサキ遺跡 | 109 淀川三ツ池遺跡 | 110 淀川トヨケ遺跡 | 111 墓院宮山遺跡 | 112 長尾西遺跡 |
| 113 ごんばう山遺跡 | 114 須坂東遺跡 | 115 稲荷北代遺跡 | 116 牧野車塚古墳 | 117 禁野車塚古墳 | | |

から5世紀前半の前方後円墳と考えられる。横穴式石室を主体部とする後期古墳は数が少なく、すでに消滅した6世紀前半の白雉塚古墳等をあげるにとどまる。招提中町遺跡近くの宇山1号墳は、6世紀後半の横穴式木室を主体とする後期古墳で、須恵器、土師器の他に銀象嵌銅付太刀、鎧、鐵鎌、刀子が出土した。

古墳時代の集落は、前期から始まる招提中町遺跡、津田トッパナ遺跡、藤阪南遺跡、田口中島遺跡、藤田土井山遺跡等がある。藤田土井山遺跡では、前期の竪穴住居跡が8棟見つかり、住居内から皮袋形土器が出土している。藤阪南遺跡は、穂谷川の旧河道右岸の自然堤防と氾濫原に営まれ、前期の集落が洪水で廃絶した後、後期に再び集落が営まれている。また弥生時代後期に始まる茄子作遺跡は古墳時代中期まで続き、多数の韓式系土器が出土したことで注目される。後期には、九頭神遺跡、星丘遺跡、藤田町遺跡等から掘立柱建物が検出されている。

歴史時代 律令制下の枚方市域は、河内国交野郡、茨田郡に編成された。倭名類聚抄によれば、交野郡には三宅・田宮・園田・岡本・山田・葛葉の6郷、茨田郡には、幡多・佐太・三井・池田・茨田・伊香・大庭・高瀬の8郷が知られる。招提中町遺跡が所在する東牧野町は交野郡に当たるが郷名は判明していない。平城京を基点にした古代官道は、山陽道と南海道が木津川を北進し、八幡、楠葉周辺で南転して山陽道は楠葉周辺で淀川を渡る。これに対して南海道は、生駒山西麓を北河内から南河内へと南下する。

生産遺跡として、飛鳥時代の瓦を焼いた楠葉・平野山瓦窯跡がある。素弁八葉蓮華紋軒丸瓦は四天王寺に供給されたことが判明している。楠葉瓦窯跡では西山廃寺の軒丸・軒平瓦が、粟倉瓦窯跡では鎌倉時代の瓦が焼かれている。須恵器生産は、楠葉・平野山瓦窯跡で、瓦と兼業で焼成されたのに始まる。山田池や藤阪地区で窯跡が検出され、7世紀前半に枚方窯跡群として成立した。淀川対岸の千里古窯跡群の終息に呼応して枚方窯跡群が成立したと考えることができる。

飛鳥時代創建にかかる古代寺院は知られていないが、白鳳期に西山廃寺・九頭神廃寺、奈良時代に中山觀音寺跡、百濟寺跡が創建された。百濟寺跡は特別史跡に指定され、奈良時代後半から平安時代初期に活躍した百濟王氏の氏寺で、2塔1金堂の伽藍配置が判明している。

集落跡としては、飛鳥時代の竪穴住居跡が楠葉野田西遺跡・九頭神遺跡・招提中町遺跡・藤阪遺跡で検出されている。奈良時代では、楠葉野田西遺跡・船橋遺跡・アゼクラ遺跡・禁野本町遺跡等があり、船橋遺跡で南北に整然と配置された建物群や石帶・墨書き土器が検出され、官衙に関連する遺跡と考えられる。平安時代は、枚方市と交野市の大部分は交野ヶ原と呼ばれる貴族の獵遊地として禁野にされた。招提中町遺跡・交北城ノ山遺跡・禁野本町遺跡等で掘立柱建物跡が検出され、施釉陶器類も出土している。また楠葉東遺跡は黒色土器・瓦器を生産し、楠葉野田遺跡での瓦器生産に継続する。中世集落は交北城ノ山遺跡や津田トッパナ遺跡で居館跡、藤田町遺跡で建物群が検出され、市内各所に遺跡分布が広がる。

近世、大阪京都間の京街道に、枚方宿が設置され、調査により江戸時代の宿場町の様子が復元されつつある。

第Ⅲ章 調査の成果

1. 基本層序

府営住宅建設以前の当該地の様子は、昭和20年代の航空写真から見れば、水田として利用されていたことが看取される(P.L.1)。調査着手直前までは、木造住宅、簡易耐火住宅が建ち並び、その間を道路が繋っていた。調査地は、北端の標高約21m、南端の標高約20mを示す。200mあまり離れたこの2点の比高は1mを測り、北から南に向かって僅かに傾斜する平坦な土地である。調査区の南側100mに徳谷川が西北流し、天井川を形成している。

調査にあたり、堆積層の観察は各調査区の断面で行なった。南北方向では、98-1・99-4・1・2調査区西側の壁面で、東西方向では、98-1・2調査区南側の壁面で断面図を作成した。いずれの断面図も長大になるため、堆積層の変化が読み取れる部位を柱状図にして南北方向に並べ下図に示した。

調査区全体を通じて、府営住宅建設時に運び込まれた盛土（整地土）が認められるが、部分的には建物解体時に削平を受け旧地表面が現れている部分もある。現地表の標高は前述したとおり北から南に向かって緩やかに傾斜し低くなる。以下、基本的な層序について詳述する。

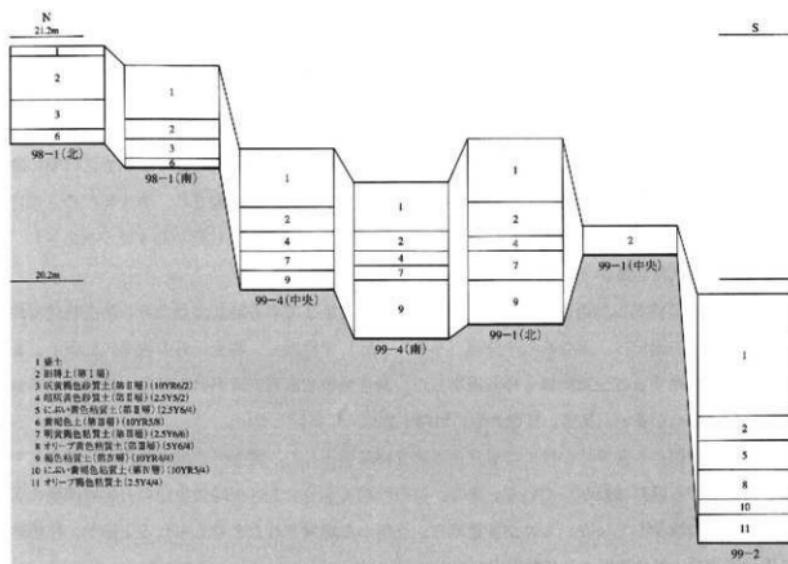


図6 基本層序

第Ⅰ層（図6-2） 調査区全体で、盛土下に観察され、部分的には地表面に現れている。府営住宅建設以前の耕作土と考えられ、層厚20cm前後を測る。

第Ⅱ層（図6-3・4・5） 98-1調査区では灰黄褐色砂質土、99-4・1調査区では暗灰黄色砂質土、99-2調査区ではにぶい黄色粘質土と、調査区によって変化するが、耕作土に伴う床土と考えられる。近世以前の遺物をわずかに包含する。

第Ⅲ層（図6-6・7・8） 第Ⅱ層同様調査区のはば全体で検出される。98-1調査区では地山直上で検出され、99-4・2調査区では第Ⅳ層の上位に堆積して検出される。中世以前の遺物を包含する。

第Ⅳ層（図6-9・10） 99-4・1調査区および99-2調査区で検出される褐色粘質土で、平安時代以前の遺物を包含する。

調査地の堆積を知る上での基本層は上述のとおり、地山である洪積層の上に、古代・中世の包含層が堆積し、その上位に旧水田が作られていたことがわかる。北から南に標高を低減させる地形であるが、調査地中央部に南西から北東に開析された浅い谷が存在する。開析谷には古代の包含層が残存している。また、99-1調査区の南側に設定した99-2調査区では、北側と比べて地山が1.1m低く検出され、両調査区の間に穂谷川が形成した段丘崖が存在する。

2. 検出遺構の概要

招提中町遺跡では、これまで枚方市教育委員会・枚方市文化財調査研究会の手によって50次余りの発掘調査が実施されてきた。今回の調査地の100m東側に位置する平野小学校の建設にかかる調査では、弥生時代末から古墳時代初頭の竪穴住居跡5棟、奈良時代の墨書き器、線刻土器、平安時代の掘立柱建物跡、鋳造関連遺構・遺物が出土している。また、99-3調査区の東に隣接する民間マンション用地では、建設に先立ち発掘調査が96年度に実施され、弥生時代の方形周溝墓1基、上器棺、飛鳥時代の竪穴住居跡2棟、奈良～平安時代の掘立柱建物跡4棟が検出され、飛鳥時代の竪穴住居跡からは円面鏡の破片が出土している。

今回の調査で検出した遺構の時期は、弥生時代から近世までの各時代にわたる。弥生時代前期後半に始まる集落域は、調査地の中央部（99-1区）で検出し、調査区外の西側に拡がる。また中期前半に始まる方形周溝墓を30基検出した。調査地の北東部では列状を成し、南部では単独で存在するものが多い。集落、墓域とともに中期中葉以降に継続しない。

古墳時代初頭から前半にかけての竪穴住居跡を13基検出した。調査区全域で検出し、北東部で数基が集中する以外は散在している。また、この時期に至っても弥生時代中期の方形周溝墓の周溝には完全に埋没していないものが多數残り、住居から廃棄されたと考えられる土器が、住居跡に近い周溝の上層や中層から多数出土した。

古墳時代中期は、僅かにピットを数基検出しただけで、遺物の出土量も極めて少なかった。こ

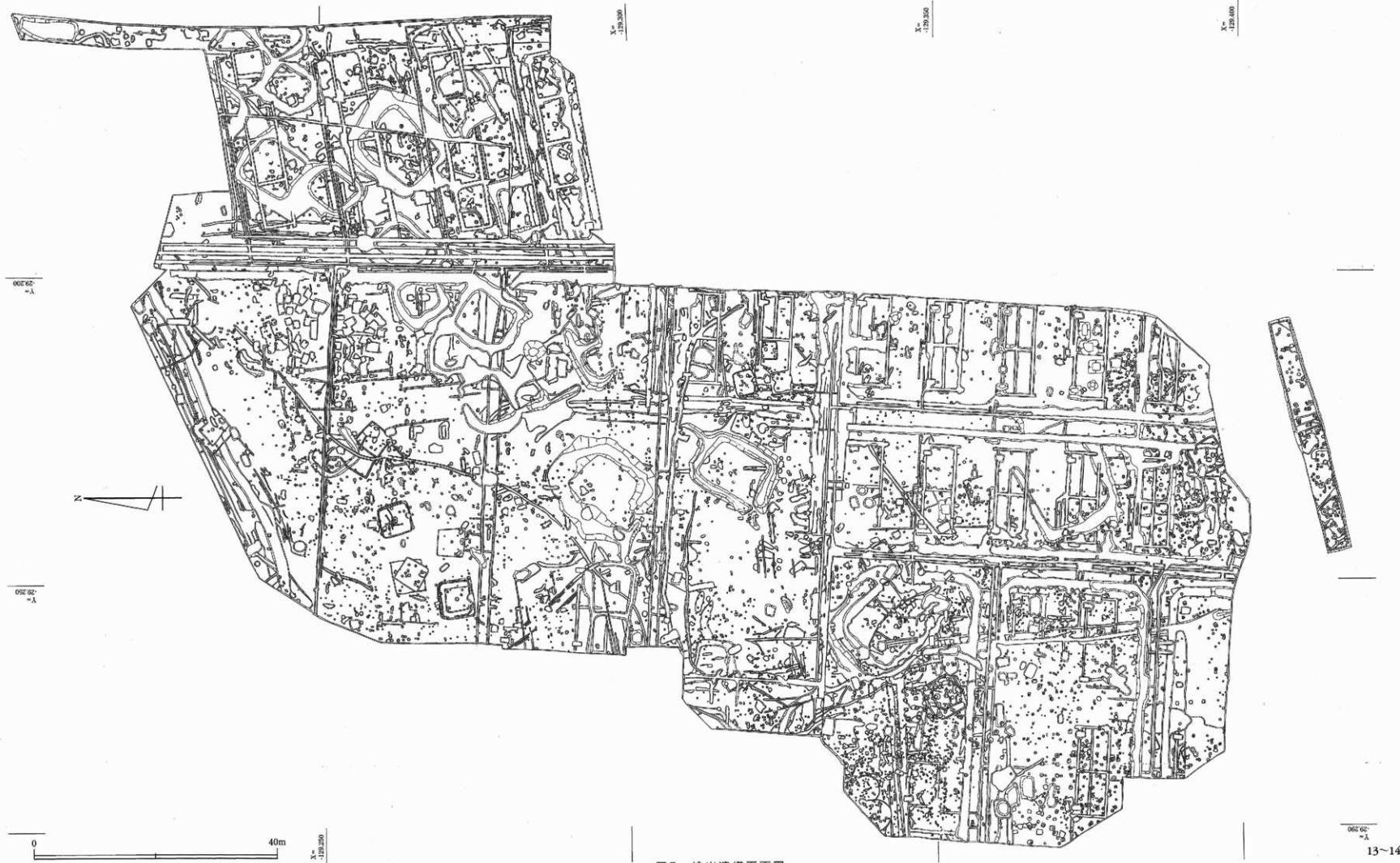


図7 検出遺構平面図

の時期から古墳時代後期にかけては、本遺跡では空白に近い時期である。

歴史時代以降については、7世紀中葉の堅穴住居跡を4基検出したことから、飛鳥時代から再度集落が形成されはじめたことがわかる。堅穴住居跡は調査地中央部以南に散在し、土器等が大量に出土する遺構は99-1・3調査区の南端に集中する。

奈良時代の遺構・遺物はほとんど出土しなかった。平安時代に入ると、掘立柱建物跡、区画溝等が検出され、調査区の東に位置する平野小学校で検出された同時期の掘立柱建物跡群と併せてこの時代の遺構が広範囲に拡がっているものと考えられる。

中世の遺構は、これまでの周辺の調査では検出されていなかった。今回の調査地では、掘立柱建物跡、土坑墓等を検出し、集落域の一端であったことが判明した。

中世以降の遺構はほとんど検出できず、少数の溝が調査地を縦横断していたのみであり、耕地化していったものと考えられる。

検出された遺構は、弥生時代以降のものであり、出土遺物についても、後述の調査成果のなかで順次報告する。弥生時代以前の遺物として、5点の旧石器が、包含層および後世の各時期の遺構から出土した（図8）。

1はSK4011から出土したナイフ型石器である。横長剥片を素材とし、長さ27.4mm・幅12.4mm・厚さ4.5mmを測る。2は99-4調査区第IV層（包含層）から出土した瀬戸内技法のナイフ型石器である。長さ42.0mm・幅18.1mm・厚さ6.6mmを測る。3は18号方形周溝墓から出土した縦長剥片素材のナイフ型石器である。長さ30.9mm・幅14.9mm・厚さ5.7mmを測る。4はSK3017から出土した縦長剥片素材のナイフ型石器である。長さ35.8mm・幅16.7mm・厚さ8.1mmを測る。5は20号方形周溝墓から出土した横長剥片素材の削器である。長さ66.1mm・幅39.7mm・厚さ9.9mmを測る。石器の素材はすべてサヌカイトである。

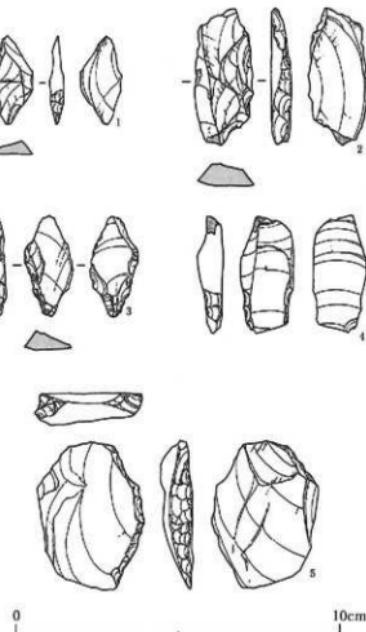


図8 包含層等出土遺物1

3. 弥生時代の遺構と遺物

今回の調査地で、検出した弥生時代の遺構は、前期後半から始まり、中期前半に盛期を迎えた後、中期中葉にはほとんど消滅し、中期後半以降には継続せず途絶する。前期にかかる遺構は、ピット、土坑、溝であり、集落の一端を構成するものと考えられる。I期末の壺・鉢・甕、流紋岩製の石庖丁・大型蛤刃石斧未製品・石鎌等が出土し、この時期からの安定した定住を知ることができる。

中期前半には2棟以上の竪穴住居跡、多数のピット、土坑等集落域の遺構と30基の方形周溝墓が検出され、前期末に定着した集落の大規模な発展を墓域からうかがい知ることができる。ピット・竪穴住居跡の検出状況から集落の中心部は調査地の西側に拡がることが明らかであり、今後の調査に期待がかかる。中期の遺物は、多数の土器・石器とともに、大型蛤刃石斧・石鎌の未製品、素材、剥片等も出土し、石器製作を行なっていたことを示す資料が含まれている。II期の土器がほとんどを占め、III期の土器は激減し、それ以後の土器は出土しておらず、集落は移住等の理由により途絶えたと考えられる状況である。

■弥生時代前期 この時期の遺構は、南北方向でX=129.300km～129.400kmの間約100m、東西方向ではY=29.230kmから西側の範囲で検出される（図11）。前期の土器が単独で出土した遺構を赤色で示している。

SK3159（図9・11・PL7） 99-1調査区、K7-6-D13-e6で検出した土坑である。平面形は長楕円形であるが西側が擾乱で破壊され、全体の形状は不明である。短軸約0.8mを測るが西側で少し拡がり1.0mを測る。長

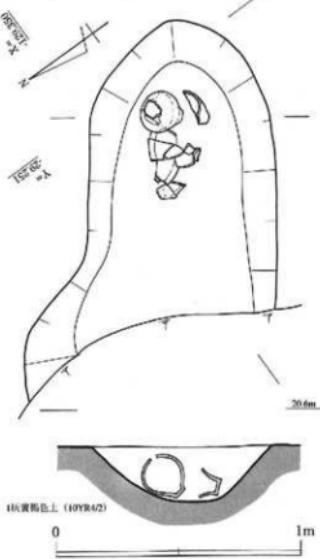


図9 SK3519遺物出土状況・断面図



図10 SK3519・3526出土遺物



図11 弥生時代前期遺構平面図1

軸は現状で最大約1.5m、深さ約0.2mを測り、断面の形状はU字状を呈する。検出面の標高は20.45mである。遺構の埋土は、灰黄褐色土の単層である。土坑の東側から土器が2点出土した。壺底部の下に壺の口縁部が入り込み、壺に載せられた壺が倒れ、土圧で破碎した状況を示すかのようである。

出土遺物（図10-6・7） 壺6は、頸部以上の口縁を欠損している。平底の底部から、体部は球形に立ち上がり、胴部最大径のやや上位に5条のヘラ描沈線紋を施す。器面の剥離が著しく内外面とも調査は不明。壺7は、倒鐘形の体部に短く外反する口縁を持つ。口縁端部はやや立ち上がり、面を持たない。口縁部・体部ともに紋様を施さない。体部外面には下から上へのハケ調整。内面は不明。

SK3526（図11） S K 3 5 1 9 の南東1.5m

で検出した長方形の土坑である。長辺1.6m、短辺0.85m、深さ0.1mを測り、SK3519と主軸を揃える。埋土は黒褐色土で、図10-8・9の土器と図22-54の凹基式石鎌が出土した。壺8は、倒鐘形の体部に短く外反する口縁部を持つ。口縁端部は面を持ち、刻目を入れる。頸部下に条のヘラ描沈線紋を密に施す。剥離のため調整は不明。壺9は体部の破片で、7条以上のヘラ描沈線紋を施し、調整は横方向のヘラミガキ。

SK3019（図11・12・PL7） 99-1調査区、K7-6-D13-d8で検出した土坑である。平面形は略長方形で、長軸約1.9m、短軸約1.1m、深さ約0.1mを測り、検出面の標高20.2mである。断面は浅いU字状を呈し、埋土は褐色土である。土坑の中央部で壺・壺が4個体以上集中して出土し、またサヌカイト片も出土した。

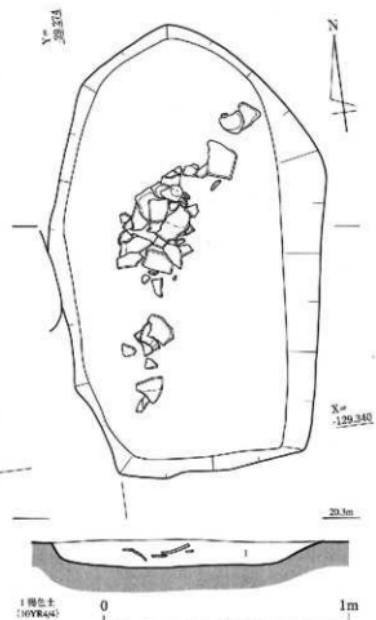


図12 SK3019遺物出土状況・断面図

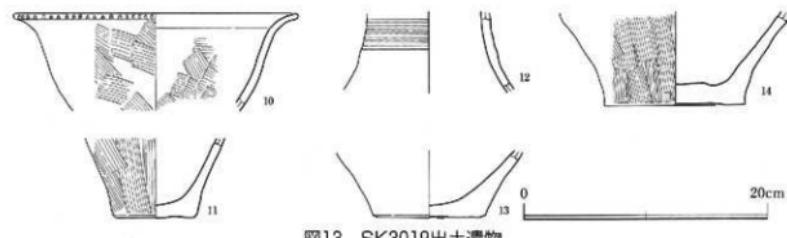


図13 SK3019出土遺物

出土遺物（図13）壺10は倒錐形の体部に、短く外反する口縁を持つ。口縁端部は丸く仕上げ、刻目を施すが、体部には紋様を施さない。内外面ともに斜め方向のハケ調整。壺11は下から上へのハケ調整を施す底部である。10の壺口縁部と同一個体の可能性が高い。壺12は伸張した形態の口頸部を持ち、11条のヘラ彫沈線紋を密に施す。調整は不明。壺底部13は内外面とも剥離により調整は不明。壺底部14の外面は下から上へ縱方向のハケ調整、内面はナデ調整。

SK2255（図11・14・PL7） 99-1調査区、K7-6-D13-g7で検出した土坑である。平

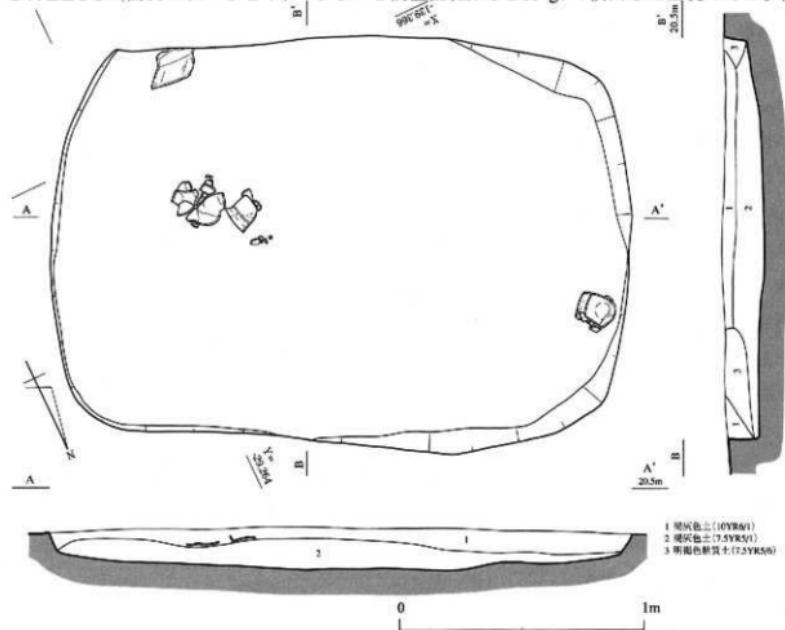


図14 SK2255遺物出土状況・断面図

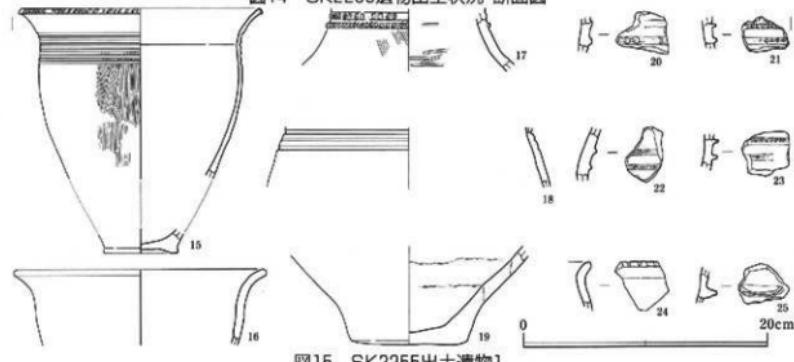


図15 SK2255出土遺物1

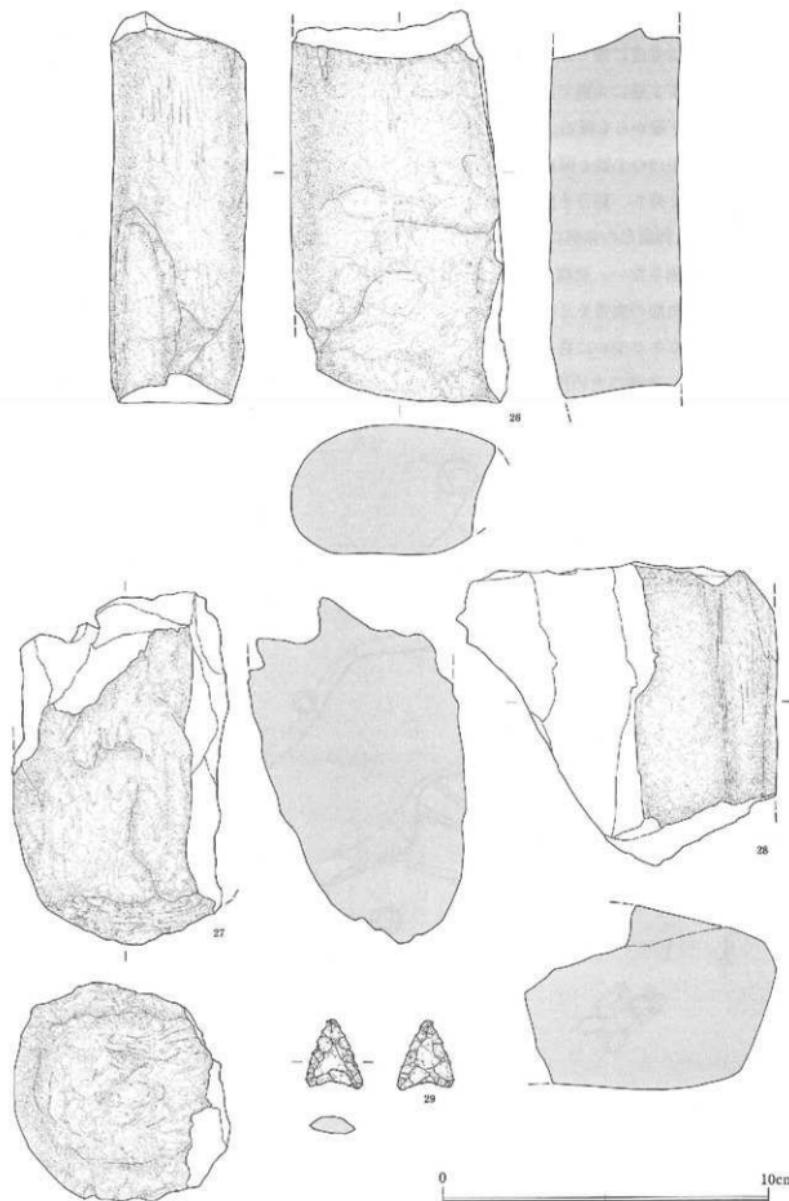


图16 SK2255出土遗物2

面形は隅丸の長方形で、長辺約2.4m、短辺約1.7m、深さ約0.2mを測り、検出面の標高は20.2mである。壁面は垂直に掘り込んでいるが、南側壁は抉り込んで掘られている。底はほぼ平坦である。埋土は上下2層に大別でき、上層から壺の底部とほぼ完形に復元できる壺1個体、砂岩が出土した。また下層からも砥石、大型蛤刃石斧の未製品が土器とともに出土した。

出土遺物は図15の土器と図16の石器である。壺15は倒鐘形の体部に短く外反する口縁部を持つ。口縁端部は面を持ち、刻目を施す。頸部下に6条のヘラ彫沈線紋を施す。体部外面は縦方向のハケ調整。壺16は倒鐘形の体部に、短く外反する口縁部を持ち、端部は丸く仕上げる。口縁部・体部ともに装飾を施さない。剥離により調整は不明であるが、外面に僅かにハケ調整の痕跡が残る。壺17は断面三角形の突帯を2条以上貼り付け、刻目を施す口頸部の破片である。外面にハケ調整、内面にヘラミガキが僅かに見られる。壺18は3条以上のヘラ彫沈線紋を施す体部片である。壺19は底部である。剥離のため内外面とも調整は不明。20~22は壺の口頸部の破片で、刻目のある

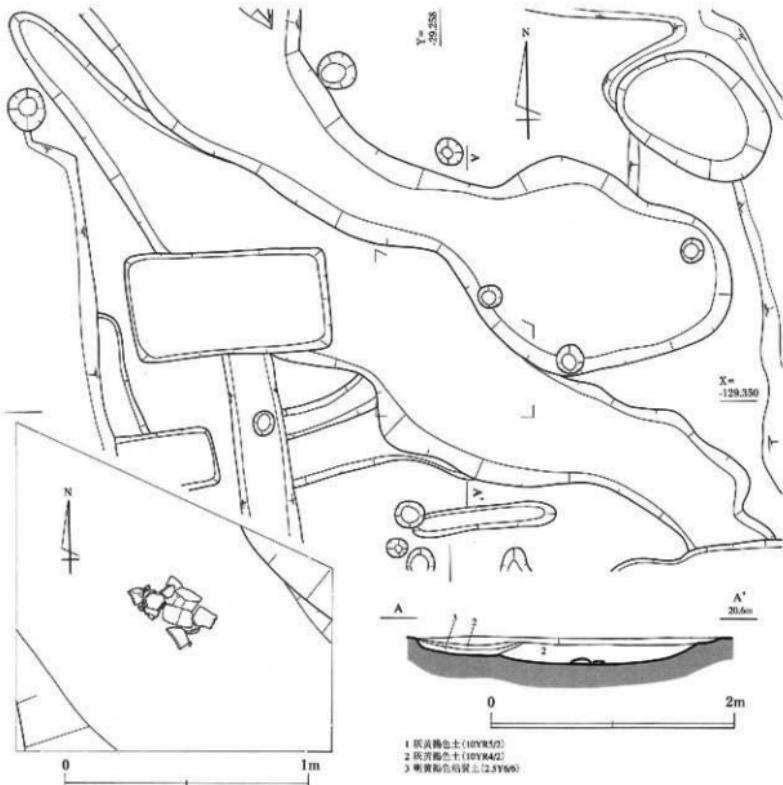


図17 SD2925平面図・断面図・遺物出土状況

貼付突帯紋を複数施す。壺23は体部の破片で、刻目のある貼付突帯紋を2条以上施す。壺24は短く外反する口縁部の破片で、端部に刻目を施す。体部には施紋されない。鉢25は瘤状把手を持つ体部の破片である。

26は大型蛤刃石斧の木製品である。表面を敲打整形し、磨き上げる直前に折損等で廃棄されたものと考えられる。転用された後の二次的な使用痕は認められない。厚さ4.1cmを測る。ホルンフルス。27は叩石である。端面に使用痕が認められる。断面径約6.7cm。28は砥石である。図示した表面側だけが使用され、平滑である。厚さ5.6cmを測る。29は凹基式石鎌で、長さ2.13cm、幅1.72cm、厚さ0.49cmを測る。

SD2925 [A・B区] (図11・17) 99-1 調査区、K7-6-D13-e6で検出した溝である。調査時点では18号方形周溝墓の周溝として造構番号を付したが、整理作業において方形周溝墓とは時期の違う溝であると判明したため、SD2925のA・B区として報告する。溝の延長約7m、幅約1~1.5m、深さ約0.2mを測り、南西側の肩は不定形に乱れる。また北東側はSD3424に切られる。検出面の標高は20.45mである。溝延長方向の中央部から鉢33が底で押し潰された状況で出土した。溝の埋土である灰黄褐色土から出土した土器はすべてI期である。また、サヌカイト片も多数出土した。

出土遺物(図18) 壺30は球形の体部に伸張した口縁部を持ち、口縁端部は丸く仕上げる。装飾は施さない。各部の破片は直接接合しないが同一個体である。鉢31は台状に厚く仕上げた底部である。壺32は底部外面から焼成後に穿孔を施そうとしているが貫通していない。剥離により内外面とも調整不明。鉢33は口縁部が直立し、上端部に面を持つ中型品である。内面はナデ調整、口縁部はヨコナデ調整、外面は剥離により調整不明。紋様は施さない。鉢34は大型品で、外反する口縁部を持つ。口縁端部は明瞭な面を持つ。舌状に突出する瘤状把手を貼り付ける。口縁部内外面はヨコナデ調整。35~38は刻目のある貼付突帯紋を有する壺の体部片である。内面はナデ調整。壺39は胴部最大径下にヘラ描沈線紋を複数入れ、その下にヘラによる刺突紋を並べる。内面ナデ調整。剥離により外面不明。

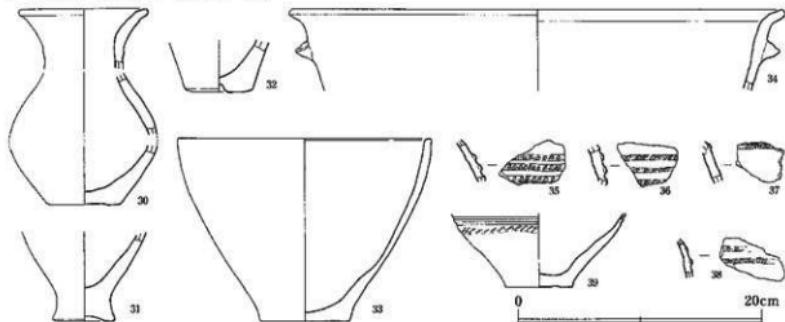


図18 SD2925出土遺物

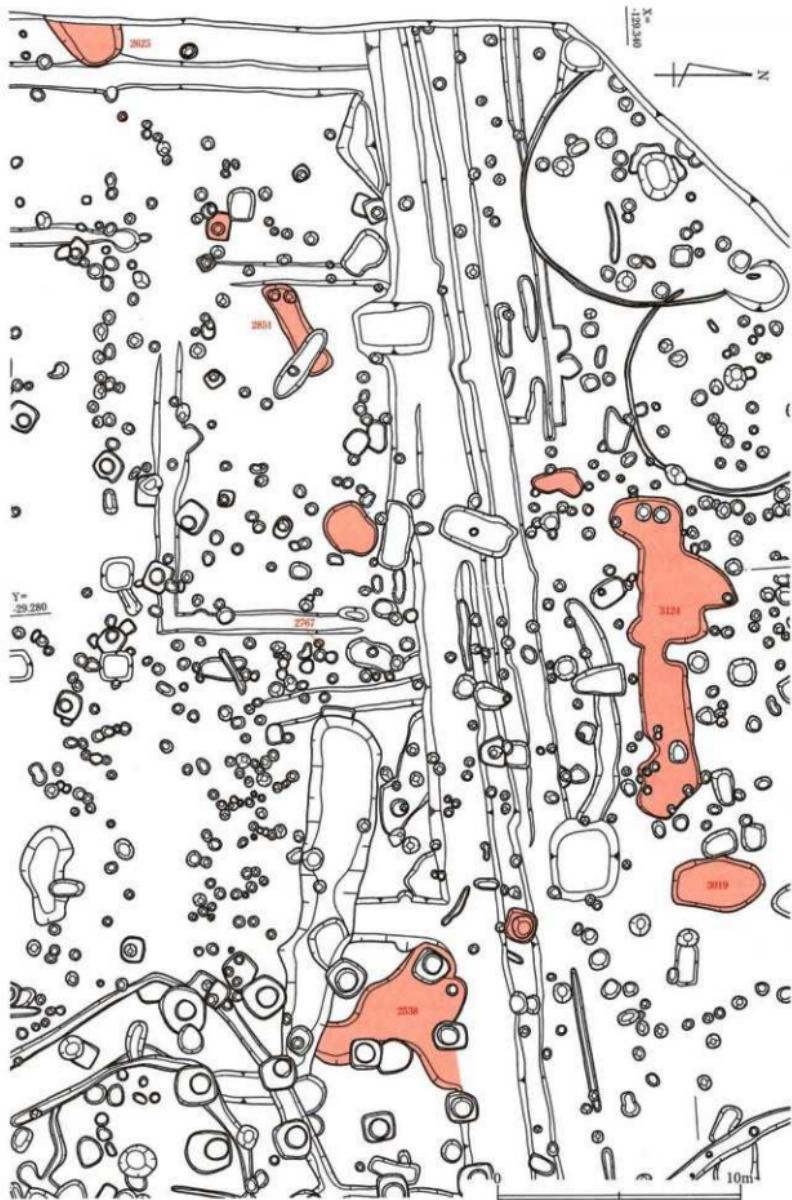


図19 弥生時代前期遺構平面図2

図19は、99-1調査区の北西部を拡大したものである。この地区からは比較的多くの弥生時代前期の土器が出土した。この中から前期の遺物だけを出土した遺構を赤色で示した。

SK2538 K7-6-D13-e8で検出した不定形土坑である。南側を中期前半の19号方形周溝墓で切られている。検出面の標高20.4m。埋土は上下2層に分かれ、上層は黒褐色土、下層は地山の混じった灰黄褐色土で、両層から前期の遺物が出土した。

出土遺物 (図20-40~44) 壺40は断面三角形の貼付突帯紋を3条残す伸張した口頭部である。突帯の間隔は広く刻目の間隔は粗い。剥離により内外面とも調整は不明。41・42・44は、壺の底部である。41は底部径13.6cmを測る大型品である。44は外間に縱方向の丁寧なヘラミガキ調整を施す。壺43は球形の体部を持ち、腹部と口頭部の2箇所に9条のヘラ描沈線紋を密に施す。内面はユビオサエの後ハケメ調整を施す。

SK3124 K7-6-D13-d-e8・9で検出した土坑である。長さ約13m、幅約2.0m、深さ0.2mを測る長方形の土坑に、いくつかの土坑が重なっているものと考えられる平面形である。埋土は暗褐色土で、他の時期の遺物を含まない。検出面の標高は20.2m。

出土遺物 (図20-45~48、図21) 壺45は発達した口縁部を持つ広口壺である。口縁端部に面を持ち、1条のヘラ描沈線を入れた後、刻目を施す。口縁内側に突帯を貼付け刻目を施す。46は底部で内外面とも調整不明。壺47は広口壺で、口縁端部をやや肥厚させ強いヨコナデ後、口縁端部下半に刻目を施す。壺48は伸張した口頭部で間隔を開け3条の突帯を貼付ける。刻目は施さ

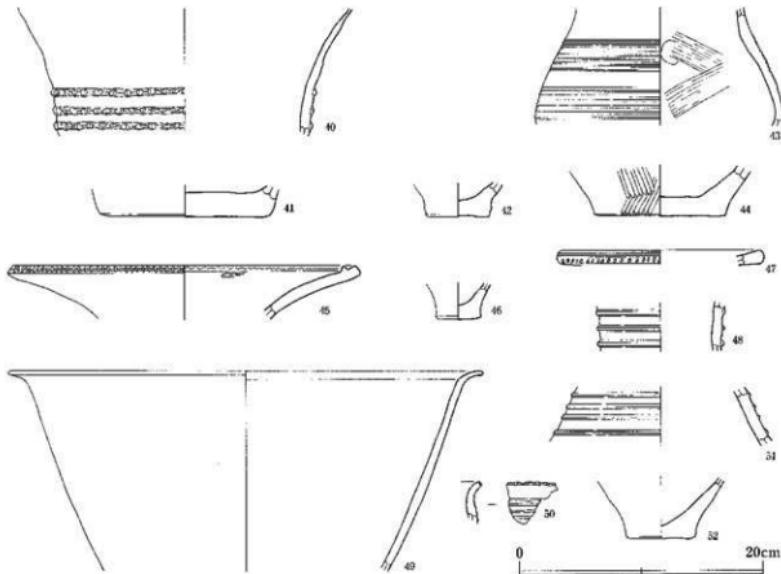


図20 弥生時代前期遺構出土遺物

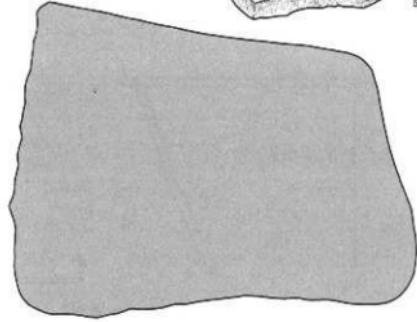
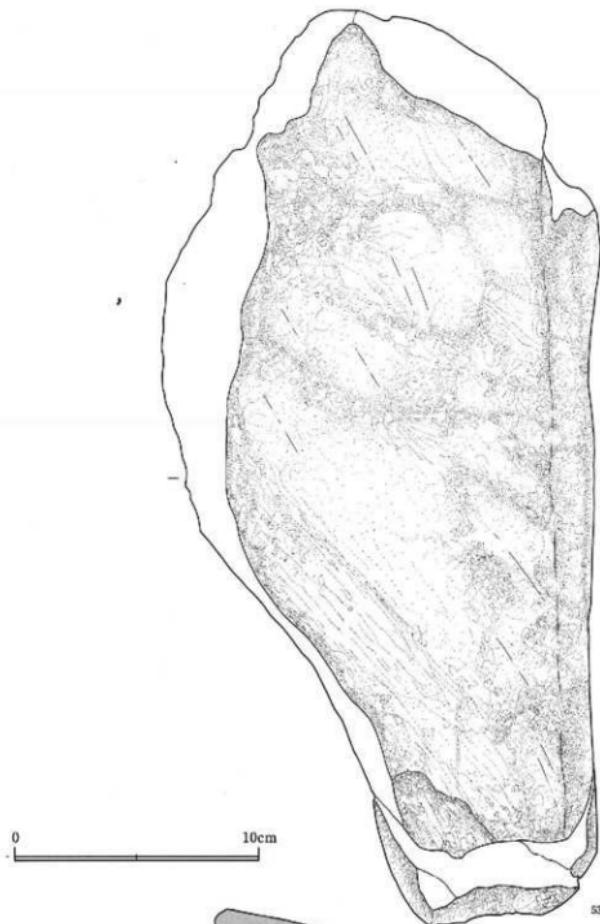


図21 弥生時代前期
遺構出土遺物2

ない。砥石53は37.6×17.6cmの自然石を利用し、図示した面を使用している。断面の形状は方形で厚さ13.8cmを測る。

SK2625 K7-6-D13-f10で検出した隅丸方形の土坑である。幅約3mを測り、調査区外に拡がる。埋土は灰黄褐色土である。鉢49(図20)は外反する口縁を持つ大型品である。

P2767 K7-6-D13-e8で検出した径0.3mのピットである。壺50(図20)が出土した。口縁部を短く外反させ、口縁端部に面を持たせ、刻目を入れる。頸部下には4条以上のヘラ描沈線紋を施す。

SK2851 K7-6-D13-e9で検出した長方形の土坑である。長さ約4.1m、幅約1.0mを測り、埋土は黒褐色土である。刻目を入れない4条の貼付突帯紋を体部に施した壺51、壺底部52(図20)と石錐56(図22)が出土した。

P2957 K7-6-D13-e8で検出した方形のピットである。中央部に円形の柱痕が認められる。壺底部66(図23)が出土した。

また図19の遺構図に示す前期の遺構から出土した遺物を図22・23に示す。

SK4044 K7-6-D13-i4で検出した隅丸方形の土坑である。壺57(図23)が正置した状態で埋められていた。球形の体部を持つ壺であるが、表面剥離が著しく施紋、調整は不明である。

SK3288 K7-6-D13-h-i7で検出したが、そのほとんどが搅乱を受けており、形状等は不明である。埋土は黒褐色土。倒鐘形の体部に短く外反する口縁部を持つ壺58(図23)が出土した。

P2182 K7-6-D13-h7で検出した径0.2mのピットである。埋土は黒褐色土。図23の59・60が出土した。鉢59は楕状の体部に口縁端部は上に面を作る。口縁部上端に1列、間隔を開けて2列、合計3列の列点紋が施され、器壁外面は条痕、内面はナデ調整である。壺60は体部の破片で、横方向に廻る突帯が1条とそれに直交して取りつく継の突帯が2条が貼り付けられている。胎土は褐灰色である。

SK3634 K7-6-D13-e6で検出した楕円形の土坑である。長軸約1.3m、短軸約0.9mを測り、SK3526・3519と軸を揃えて並ぶかのようである。出土遺物の壺61は体部の破片で、上下2条の紋様帯を施紋する。上位はヘラ描沈線紋を4条以上施し、下位はヘラ描沈線を4条以上入れた後、刻目を入れるように沈線の間を充填する。

SK5050 K7-6-D13-a5・6で検出した長方形の土坑である。長さ2.6m、幅1.4mを測り、埋土は黒褐色土である。出土遺物である壺62・63は倒鐘形の体部に短く外反する口縁部を持つ。口縁端部に面を作る。

SK5051 K7-6-D13-a6で検出した長方形の土坑である。長さ1.3m、幅0.8m、埋土は黒褐色土である。出土遺物の壺64は体部から短く外反する口縁部持つ広口壺である。口縁端部に面を作る。外面は継方向のハケ調整、内面にはユ

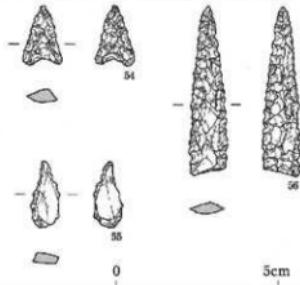


図22 弥生時代前期遺構出土遺物3

ピオサエが見られる。

SD4450 K7-6-D13-j4で検出した溝である。弥生時代前期の土器とともに石鎚55（図22）が出土した。

前期の遺構から出土した遺物は、前述の通りであるが、時期の違う遺構あるいは上層の包含層からも多数の前期の土器が出土しており、図24に示す。

鉢67は楕状の体部に口縁端部は上に面を作る。口縁部上端と体部中央・下端に3列列点紋が施される。器壁外側は条痕、内面はナデ調整である。胎土は2mm角の石英粒を多量に含む。図23-59の鉢と酷似するが出土地点は20m以上離れた18号方形周溝墓の周溝である。壺68は広口の口縁端部に粘土紐を貼り付け端面を広くし、2条にヘラ描沈線紋の間に縱長の刻目を入れる。壺69は広口の口縁端部を肥厚させずに面を作る。端部中央に1条のヘラ描沈線紋を入れ、刻目を施す。口縁部内面に竹管紋を2列並べる。

70~80はヘラ描沈線紋を施す壺の体部から口頭部の破片である。壺79は密に施された沈線の間に径1.5mmの棒状工具で刺突紋を並べる。壺80は3条以上ヘラ描沈線紋の下に竹管紋を並べる。胎土は明赤褐色を示す。壺71以外はヘラ描沈線紋の多条化が著しく進み密に施す。

81~88は貼付突帯紋を有する壺の体部片である。壺81は下から刻目のある貼付突帯紋、ヘラ

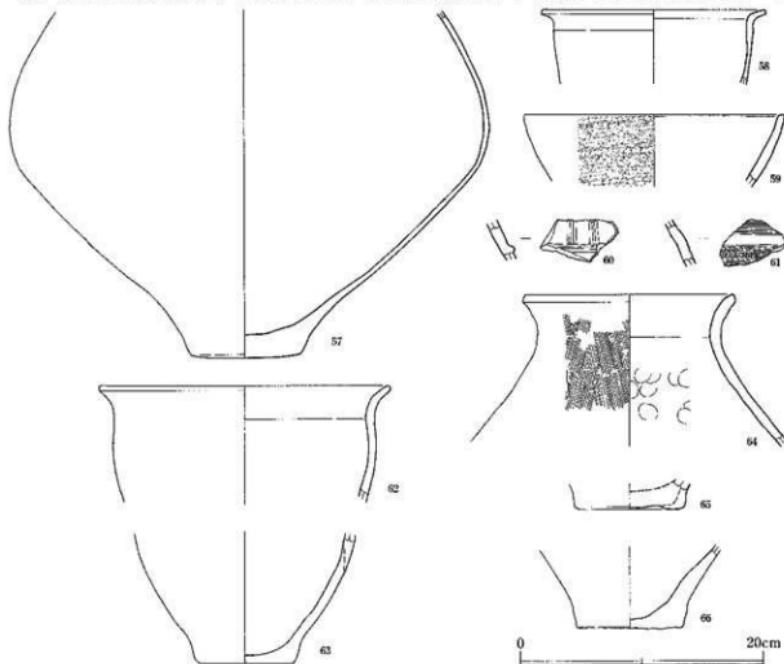


図23 弥生時代前期遺構出土遺物4

描沈線紋、列点紋を3段に並べる。列点紋は径4mmの棒状工具を使用している。赤色顔料がわずかに残る。壺87は刻日のある貼付突帯紋とヘラ描沈線紋の組合せ。壺82~85は刻日のある貼付突帯紋。壺86は低い断面三角形の突帯を貼付ける。壺88は断面形状が台形の高さのある突帯を8条以上貼付ける。頸部が細頸化した壺である。

89~92は頭部下にヘラ描沈線紋を入れる壺である。壺89~90は倒錐形の体部に短く外反する口縁部を持ち、口縁端部に刻目を施す。89は密に6条のヘラ描沈線紋を、90は疎らに4条のヘラ描沈線紋を施す。

鉢93は短く外反する口縁部と頭部下に3条のヘラ描沈線紋を施す。94~99は舌状に突出する瘤状把手を貼り付ける鉢である。

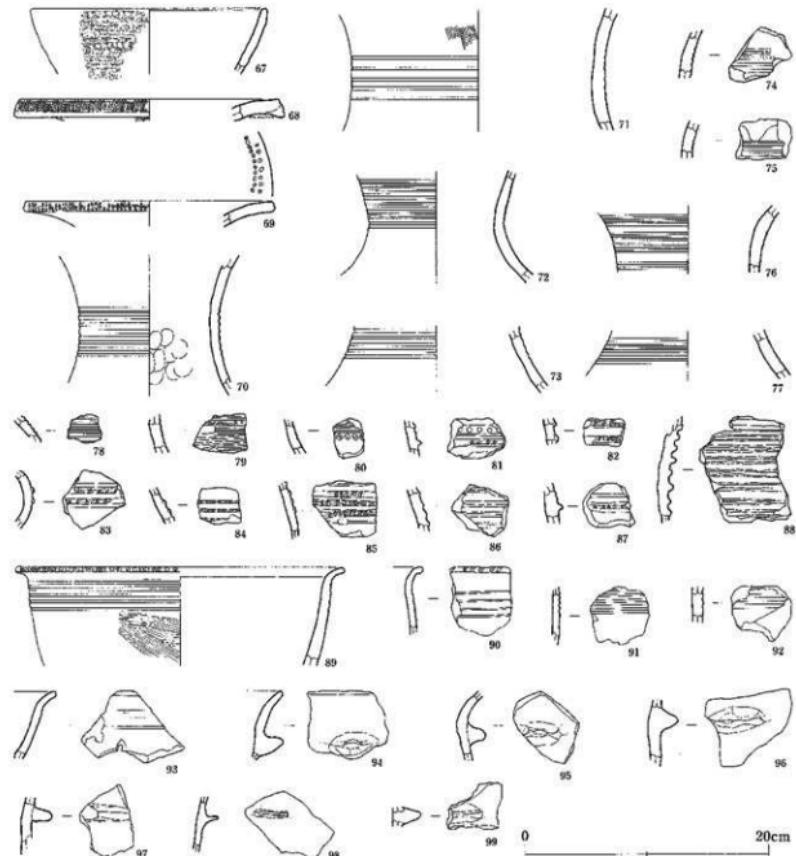


図24 包含層等出土遺物2

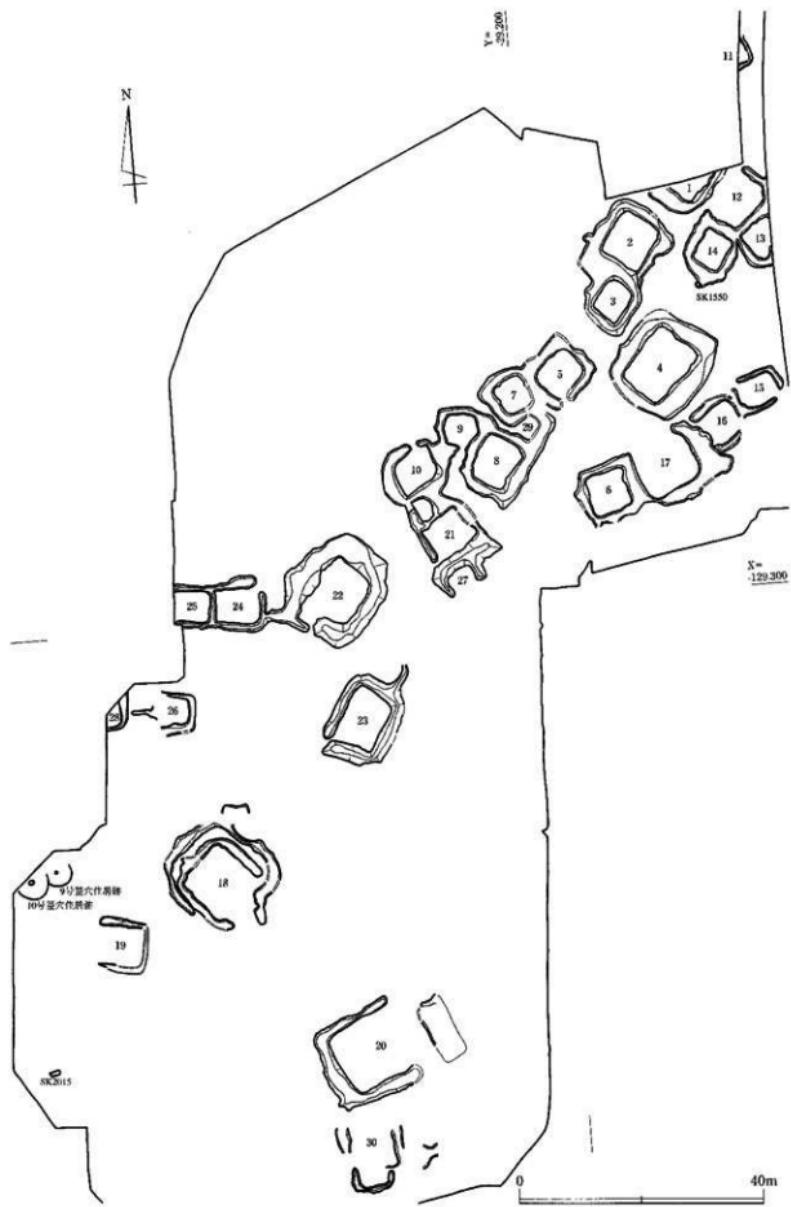


图25 方形周溝墓平面图

■弥生時代中期 この時期の遺構は、98-1調査区の北西部にやや空白域が見られるが、調査区の全域で検出された。主な遺構として、方形周溝墓・竪穴住居跡がある。

方形周溝墓（図25） 総数30基を数える方形周溝墓を検出した。検出した順に1号・2号…と名称を与えたため、番号順に並んでいない。方形周溝墓の平面図は100分の1で統一した。

方形周溝墓は、調査区を北東から南西に横切る方向で検出された。調査区北東側の1~17・21・27・29号方形周溝墓の一群は、周溝を共有しない単独墓（4号方形周溝墓）を中心にして置き、その南北に、2~4基で周溝を共有するグループが列を形成して並ぶ。一方、調査区中央部から南側で検出した18~20・22~26・28号方形周溝墓の一群は、単独で造られていくものが多く見受けられる。規模については、 $15.5 \times 11.0\text{m}$ を測る20号方形周溝墓が群中で最も大きく、 $4.0 \times 3.5\text{m}$ を測る29号方形周溝墓まで平面規模に格差がある。

また、方形周溝墓の検出状況は、周溝は検出できるものの、墳丘部の盛土は後世の開発によつてすべて削平を受けており、一切検出できなかった。主体部も同様検出していない。周溝の堆積は、最下層に地山と酷似した土層が堆積し弥生土器が少量出土する。中位から上位にかけては有機物を多く含む褐色土が堆積し、庄内期の遺物を包含する場合と、平安期の遺物を包含する場合との二者がある。庄内期の遺物が出土する場合その上位に平安期の遺物を包含する土層が堆積することが多い。いずれの場合にも、多くの方形周溝墓の周溝が平安時代まで完全に埋没しないで浅く窪んでいたことが推察される。

方形周溝墓の築造時期を考える遺物は、20号方形周溝墓を除いて極端に少なく、1基の方形周溝墓の周溝から数十片の土器が出土する程度である。

11号方形周溝墓（図26・PL10） 98-3調査区、K7-6-C12-c7で検出した方形周溝墓である。

検出面の標高は20.8mである。周溝の南東側コーナーを1ヶ所検出しただけで、平面形・規模等は不明である。主軸が他の方形周溝墓と同じ「東北-南西軸」であると推定すると、主軸はN-73°-Eである。

墳丘規模は2.0m以上×4.5m以上を測る。周溝の幅はほぼ一定で幅約0.8m、深さ約0.25cmを測る。埋土は上下2層に分かれ、下層から中期の弥生土器が出土した。

出土遺物（図27） 高杯100は中実の脚柱部のみ残存す

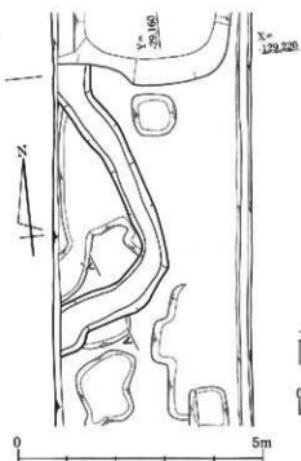


図26 11号方形周溝墓平面図・断面図

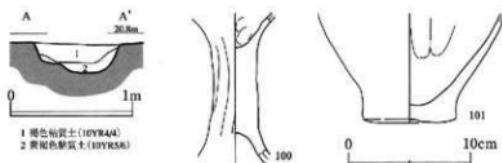


図27 11号方形周溝墓出土遺物

る。小さく開く脚部と、深い杯部を持つようである。外面は縦方向のヘラケズリの後、ナデ調整。杯部内面にユビオサエが見られる。101は壺あるいは甕の底部である。

1号方形周溝墓（図28・29・P L10） 9-8-2-3調査区、K7-6-C12-d8で検出した方形周溝墓。検出面の標高は20.8mを測る。1号方形周溝墓と同様南東コーナー部1ヶ所を検出しただけで、平面形、規模等は不明である。主軸はN-37°Eである。周溝の共有から見れば、1号・12号・13号・14号の4基の方形周溝墓で1群を形成する。

墳丘規模は7.0×4.5m以上を測る。周溝の幅は、南東側が深く狭く、南西側が浅く広い。南東周溝の幅約2.0m、深さはB断面のあたりで最も深く0.9mを測り、両側に向かって浅くなる。南西周溝の幅約3.0m、深さ0.3mを測る。南東コーナー部北側で急激に深くなる部分があり、周溝内埋葬も考えられたが、B断面の観察の結果、最下層に堆積するにぶい黄橙色土は、地山とよく似ており、地山・墳丘の崩壊土が流入したと考えられる。

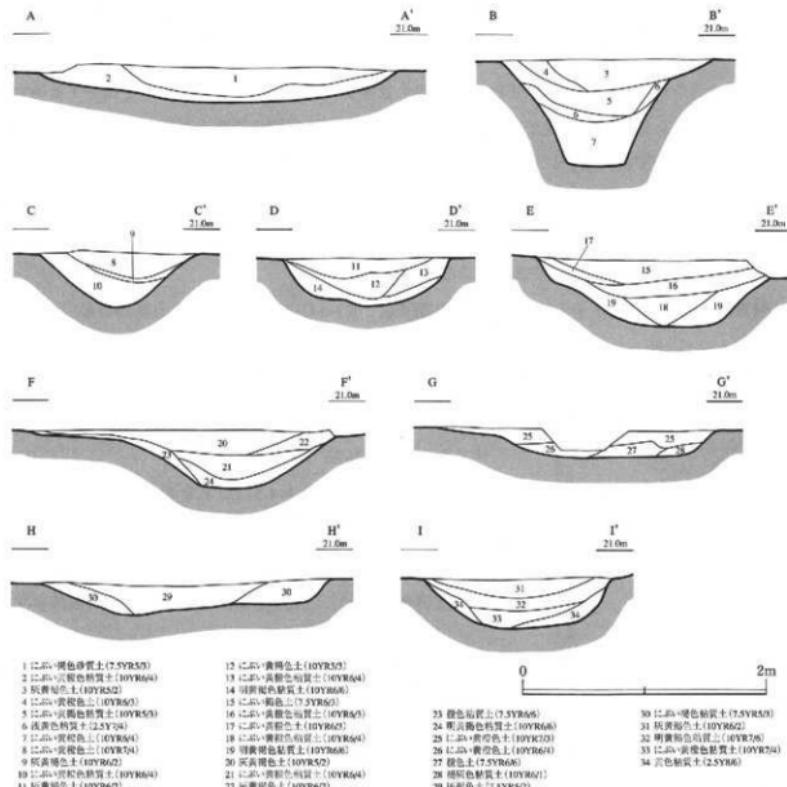


図28 1-12-13-14号方形周溝墓断面図

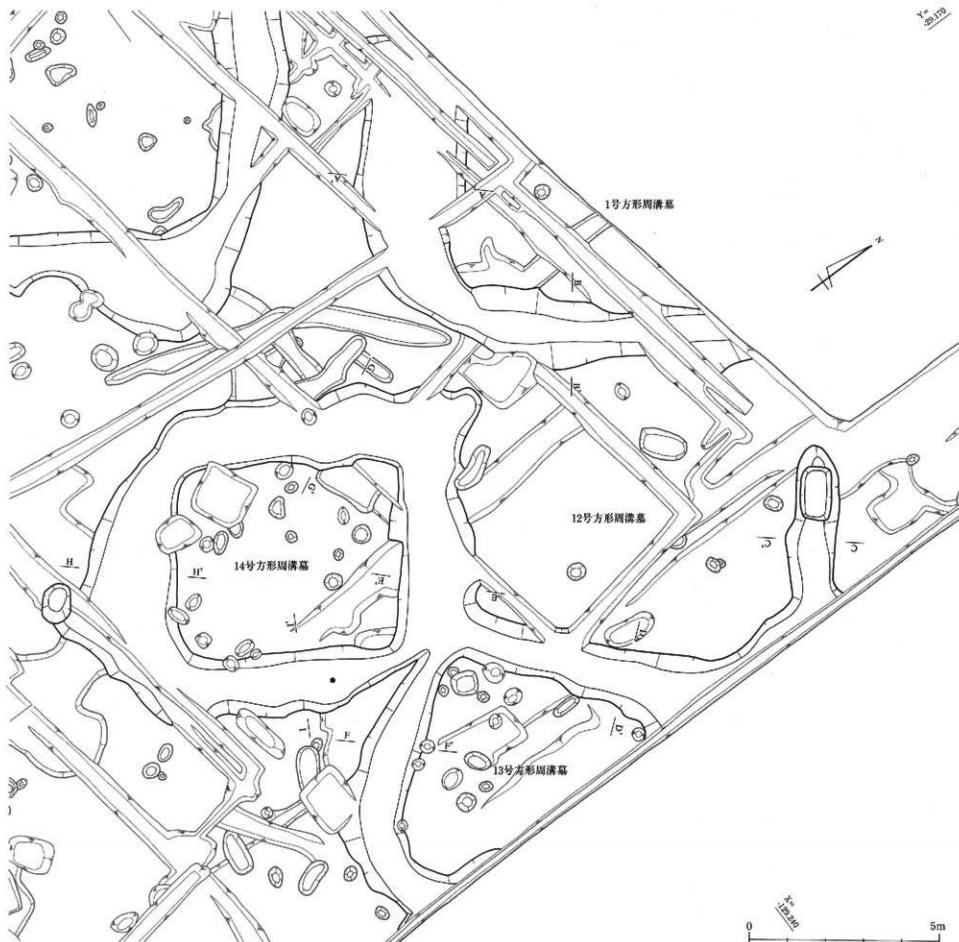


図29 1・12・13・14号方形周溝墓平面図

出土遺物（図35-113） 1号方形周溝墓の周溝は、上下2層に大別し、遺物を取り上げた。上層からは平安時代の瓦・須恵器・土師器等が出土し、下層からは弥生時代中期の土器片とともに打製石劍113が出土した。刃部は折損し、柄部のみの残存である。柄中央部には左右対称に抉りが付けられている。基部には自然面を残す。幅4.42cm、厚さ1.42cmを測る。

12号方形周溝墓（図28~30・P L10） 98-3調査区、K7-6-C12-d7で検出した長方形の方形周溝墓である。検出面の標高は20.8mを測る。コ字形にめぐらす周溝と1号方形周溝墓の南東周溝を利用して方形に区画する。1号方形周溝墓との間に2ヶ所の陸橋部を掘り残す。南東周溝は13号方形周溝墓と、南西周溝は14号方形周溝墓と周溝を共有する。主軸はN-34°-Eである。

墳丘規模は9.0×7.5mを測る。周溝は南西周溝が広く、幅約2.0m、深さ約0.5m、北東・南東周溝は幅約1.5m、深さ約0.4mを測る。

北東周溝先端部付近で長方形に落ち込む土坑を検出した。1.3×0.8m、深さ約0.25mを測る。埋土は周溝最下層と同じ土層で、周溝内埋葬の可能性がある。遺物は出土しなかった。

13号方形周溝墓（図28~30・P L10） 98-3調査区、K7-6-C12-d8で検出した正方形の方形周溝墓である。東コーナー部を含む約3分の1が調査区外に拡がる。検出面の標高は20.8mを測る。北東周溝は12号方形周溝墓と共有する。主軸はN-54°-Eである。

墳丘規模は5.5×5.5mを測る。周溝は西コーナー部を狭く掘る。南西周溝の幅0.7~1.5m、深さ0.5mを測る。

出土遺物（図31-103~107） 12・13号方形周溝墓間の周溝から106・107の遺物が出土した。地山、墳丘の崩壊土が堆積した後に投棄された状況で埋没していたものである（図30）。壺103

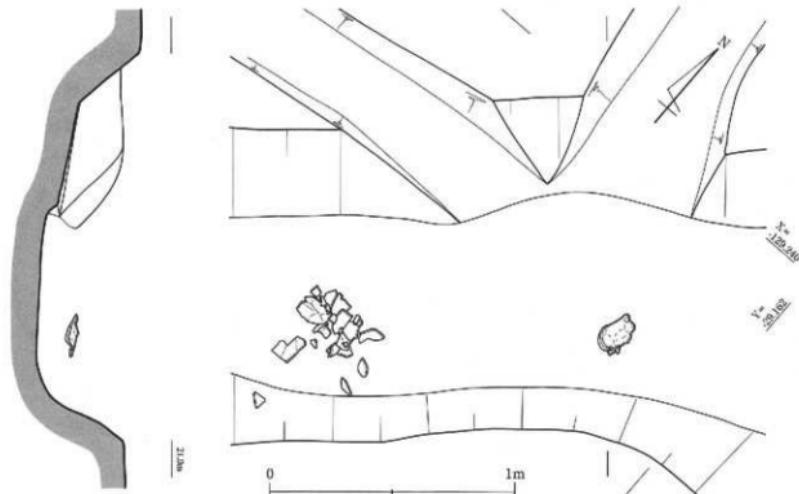


図30 12・13号方形周溝墓遺物出土状況・立面図

は南西周溝から出土した広口長頸壺の口頸部である。口縁端部は面を持つが肥厚させない。表面剥離が著しく紋様・調整は不明。104・105は南西周溝から出土した底部である。105の外外面にハケ調整が見られる。106は北西周溝から出土した底部である。壺107は北西周溝から出土した体部である。外面には斜め方向のハケ調整が見られる。底部は薄く作り、胴部は丸みを持って口径と同程度に膨らむ。

14号方形周溝墓（図28・29・P L10） 98-3調査区、K7-6-C12-d8で検出した長方形の方形周溝墓である。検出面の標高は20.8mである。北東周溝は12号方形周溝墓と共有する。主軸はN-34°-Eである。

墳丘規模は6×5m。周溝は東コーナー部が狭く幅0.6m、南西周溝が広く2.5m、平均的には約1.7mを測る。深さは、東側が深く0.4~0.6m、西側が浅く0.2mを測り、完周する。

出土遺物（図31-102・図35-116） 周溝全体からは極少量の弥生土器の出土をみた。壺102は、口頸部が短く外反する広口壺で、底部を欠損する。紋様・調整とも不明。北東周溝下層出土。116は北東周溝上層から出土した凸基式石鏃である。長さ2.75cm、幅1.52cm、厚さ0.45cm。

また、図29の14号方形周溝墓南東周溝に印したドットの位置からベンガラが出土した。ベンガラは、周溝底に径10cm、深さ10cm程度の円形のピットを掘り、納められていた。14号方形周溝墓築造と同時に埋納されたと考えられる。

2号方形周溝墓（図32・34・P L11） 98-2調査区、K7-6-C12-e9で検出した長方形の方形周溝墓である。検出面の標高は20.7mである。南西周溝を3号方形周溝墓と共有する。主軸はN-35°-Eである。周溝の共有関係から見れば、2号・3号方形周溝墓の2基の方形周溝墓で1群を形成する。

墳丘規模は8.0×7.5m。周溝は、東南周溝南側を陸橋部とするかのように浅く掘るが、途切れることなく完周する。南西周溝の一部を除いて1.5~2.5mの幅でめぐらせ、南コーナー部が最も浅くて0.05m、順次左まわりに深くなり西コーナー部で0.4mを測る。南西周溝は3号方形周溝墓と共有し、一部南西に向かって大きく幅を広げる。幅5.0m、深さ0.6mを測る。基本的な周溝

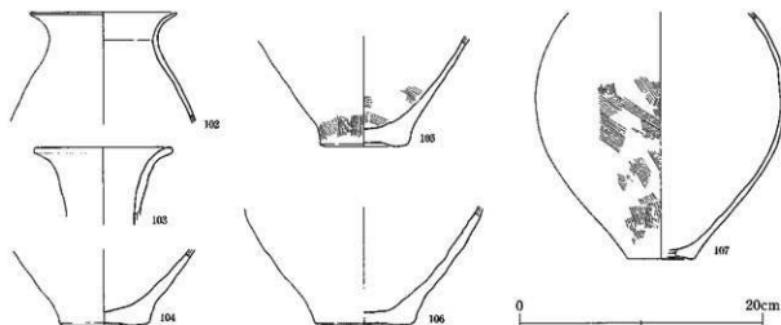


図31 12・13・14号方形周溝墓出土遺物

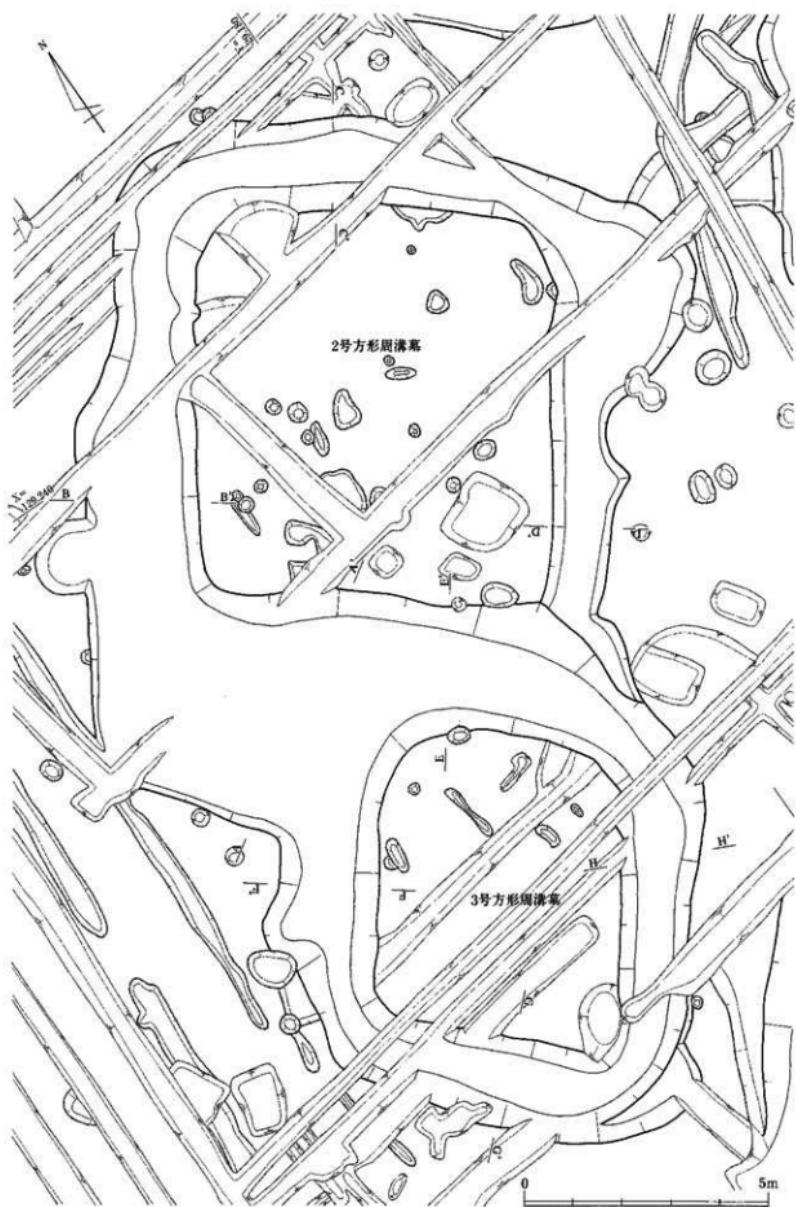


図32 2-3号方形周溝墓平面図

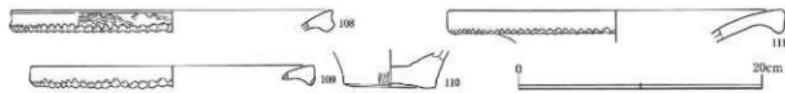


図33 2・3号方形周溝墓出土遺物

埋土はB断面で表わされ、7にぶい褐色砂質土が上層、8灰黄色土が中層、9にぶい黄橙色土が下層に堆積し、上層からは平安時代の瓦・土師器等、中層からは土師器等、下層からは少量の弥生土器、石器等が出土した。

出土遺物（図33-108～110・図35-112） 壺108は口頸部が漏斗状に開く広口壺の口縁部である。口縁下端を指で摘んで刻目紋とし、端面に樹で波状紋を施す。南西周溝下層出土。壺109は口頸部が漏斗状に開く広口壺の口縁部で、口縁下端を指で摘んで刻目紋を施す。北西周溝下層出土。110は外面ハケ調整、内面ナデ調整を施した底部である。北西周溝下層出土。112は北西周溝下層から出土した大型蛤刃石斧である。頭部側を折損しており、折損後台石として2次利用されたことがうかがえる使用痕が認められる。刃部は正面右側が片減りしている。厚さ5.6cmを測る。

瑠璃石。

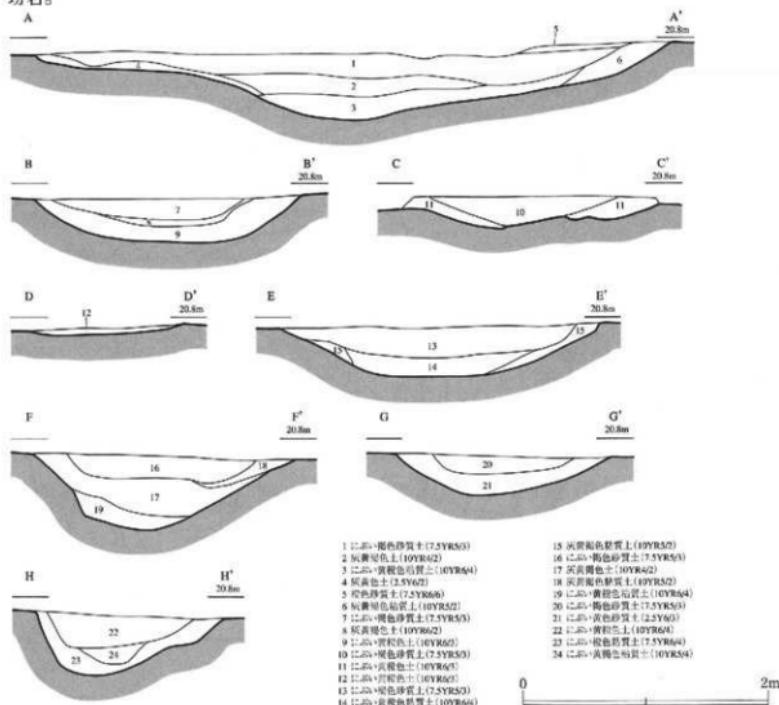


図34 2・3号方形周溝墓断面図

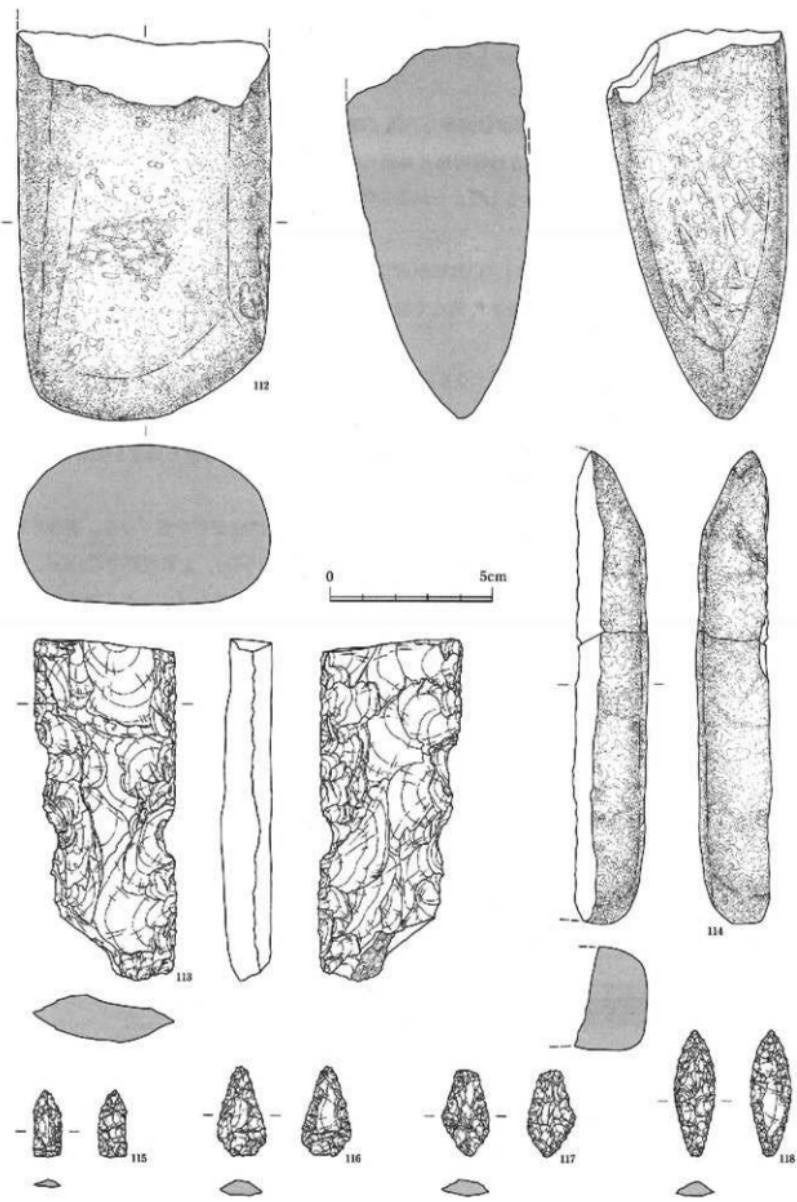


図35 1・2・4・8・10・14・21号方形周溝墓出土遺物

3号方形周溝墓（図32・34・P L11） 98-2調査区、K7-6-C12-f9で検出した長方形の方形周溝墓である。検出面の標高は20.65mである。北東周溝を3号方形周溝墓と共有する。主軸はN-35°Eである。

墳丘規模は6.0×5.0mを測る。周溝は完周し、浅く掘り残す部分を作らない。幅1.5~2.5m、深さ0.3~0.6mを測る。埋土は2号方形周溝墓と共通し北東・北西周溝では上中下の3層、南東・南西周溝では上下2層で、いずれも上層からは平安時代の遺物が出土し、下層は弥生時代の単純包含層である。

出土遺物（図33-111） 壺111は、口頸部が漏斗状に開く広口壺の口縁部で、口縁端部を垂下させる方向に肥厚させ、端部下端を指で摘んで細かく刻目紋を施す。剥離により調整不明。北西周溝下層出土。

4号方形周溝墓（図36・37・P L11） 98-2・3調査区、K7-6-C12-g8で検出した長方形の方形周溝墓である。検出面の標高は20.7mである。周辺の18基の方形周溝墓が周溝を共有して、2~4基のグループを形成するのに対して、4号方形周溝墓は他の方形周溝墓と周溝を共有せず、単独で造られている。主軸の方向はN-40°Eである。

墳丘規模は11.0×8.0mを測る。周溝は完周し、A断面付近で周溝底がやや浅くなる。周溝の規模は、南西周溝が幅約2.0m、深さ0.2m、北西周溝が約2.5m、深さ0.5m、北東周溝が約3.0m、深さ0.3m、南東周溝が約3.5m、深さ0.5mを測る。断面形状は浅いU字状を呈するが、墳丘側に急斜面をなし、外側は緩やかである。

周溝埋土は、基本的に上下2層に分かれ、上層からは平安時代以前の遺物が出土し、下層からは櫛描紋の見られる弥生土器の小片や石錐・サヌカイト片、玢岩等が出土する。上下層ともに

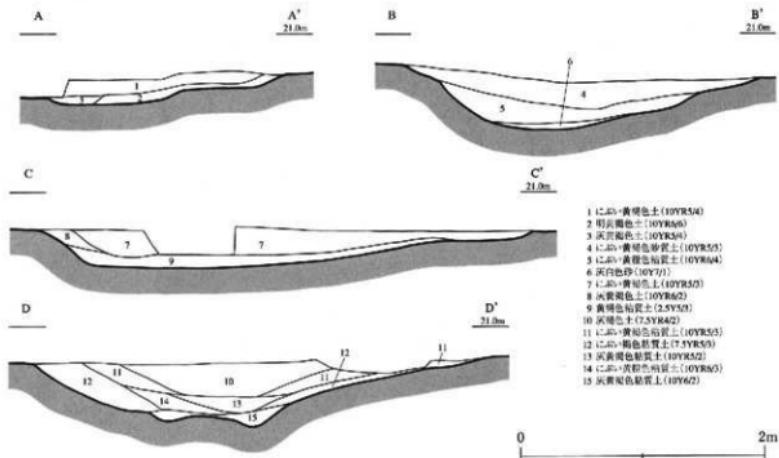


図36 4号方形周溝墓断面図

弥生中期の土器が少量出土したが、圓化しえる大きさの土器は出土しなかった。

出土遺物（図35-118） 118は北東周溝上層から出土した柳葉形の石鏡である。長さ3.85cm、幅1.25cm、厚さ0.42cmを測る。

5号方形周溝墓（図38・39・P L12） 98-2・99-5調査区、K7-6-C12-g10で検出した長方形の方形周溝墓である。検出面の標高は20.55mである。南西周溝を7号方形周溝墓と共有す

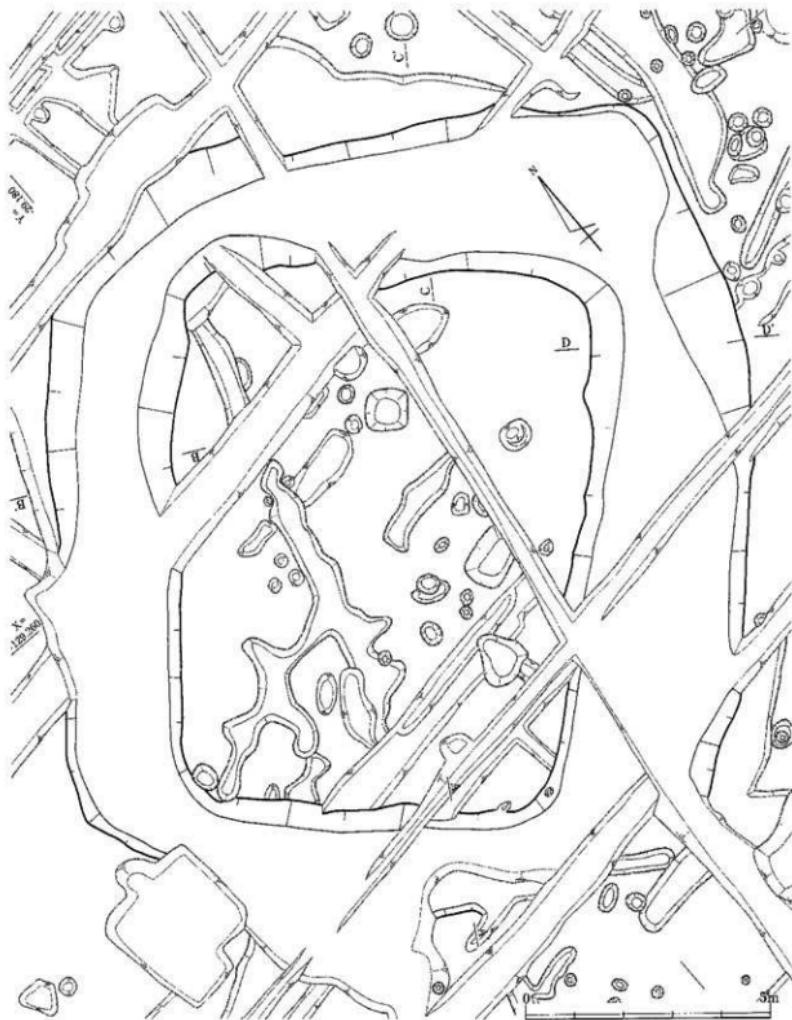


図37 4号方形周溝墓平面図

る。主軸の方向はN-47°-Eである。周溝の共有から見れば5・7～10・21・27・29号方形周溝墓の8基の方形周溝墓で1群を形成する。

墳丘規模は7.0×6.0mを測る。周溝は完周せず、南東コーナー部を掘り残して陸橋部としている。周溝の幅はほぼ一定で2m前後、深さ0.2~0.5mを測る。A断面で観察されるように、南東周溝では平安時代の掘り直しが認められ、B断面においても上下2層に分けられる。上層からは平安時代以前の遺物が、下層からは数片の弥生土器が出土した。

出土遺物（図40-119） 119は南東周溝下層から出土した弥生土器の底部である。底部下面は上げ底気味に作り、外面はハラケグリ調整を施す。

7号方形周溝墓（図38・39・P L12） 98-1調査区、K7-6-C13-g1で検出した正方形の方形周溝墓である。検出面の標高は20.6mである。北東周溝を7号方形周溝墓と、南東周溝を29号方形周溝墓と共有する。主軸の方向はN-66°-Eである。

墳丘規模は5.5×5.5mを測る。東コーナー部が搅乱で削平を受けているが、周溝は完周するものと考えられる。周溝の幅は、西コーナー部が最も広く2.5mを測り、離れるにつれて幅を減じて1.5mになる。深さは約0.3m。7号方形周溝墓と9号方形周溝墓の間にD断面を設定した。弥生時代の周溝堆積層の上位を平安時代包含層が被る。周溝および周溝間が浅く窪んでいたと考えられる。下層からは中期の弥生土器の破片が少量出土したが固化しえるものはなかった。

29号方形周溝墓（図38・39・P L12） 98-1・99-5調査区、K7-6-C13-h1で検出した長方形の方形周溝墓である。検出面の標高は20.55mである。北東周溝を7号方形周溝墓と、南西周溝を8号方形周溝墓と共有する。主軸の方向はN-52°-Eである。

墳丘規模は、搅乱でほとんどが削平されているため不明確であるが、約4.0×3.5mを測る。周溝は完周せず、西コーナー部を掘り残して1ヶ所の陸橋部を作る。周溝の幅約1.5~2.5m、深さ約0.3mを測る。周溝埋土は、基本的に上下2層に分かれ、上層から平安時代以前の遺物、下層

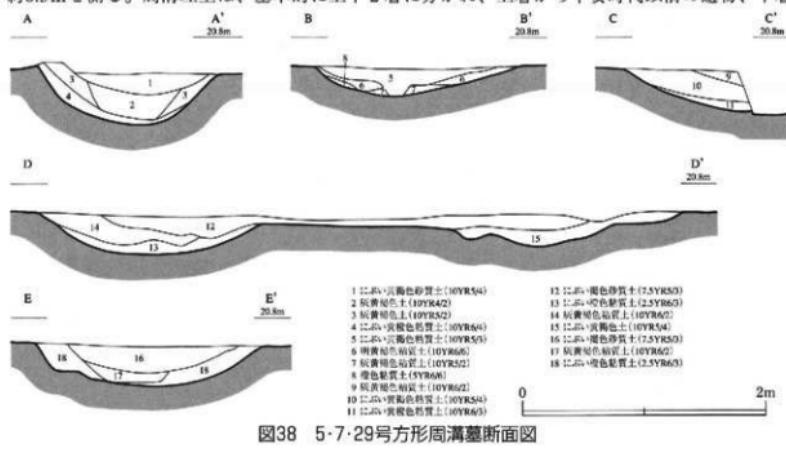


図38 5-7-29号方形周溝墓断面図

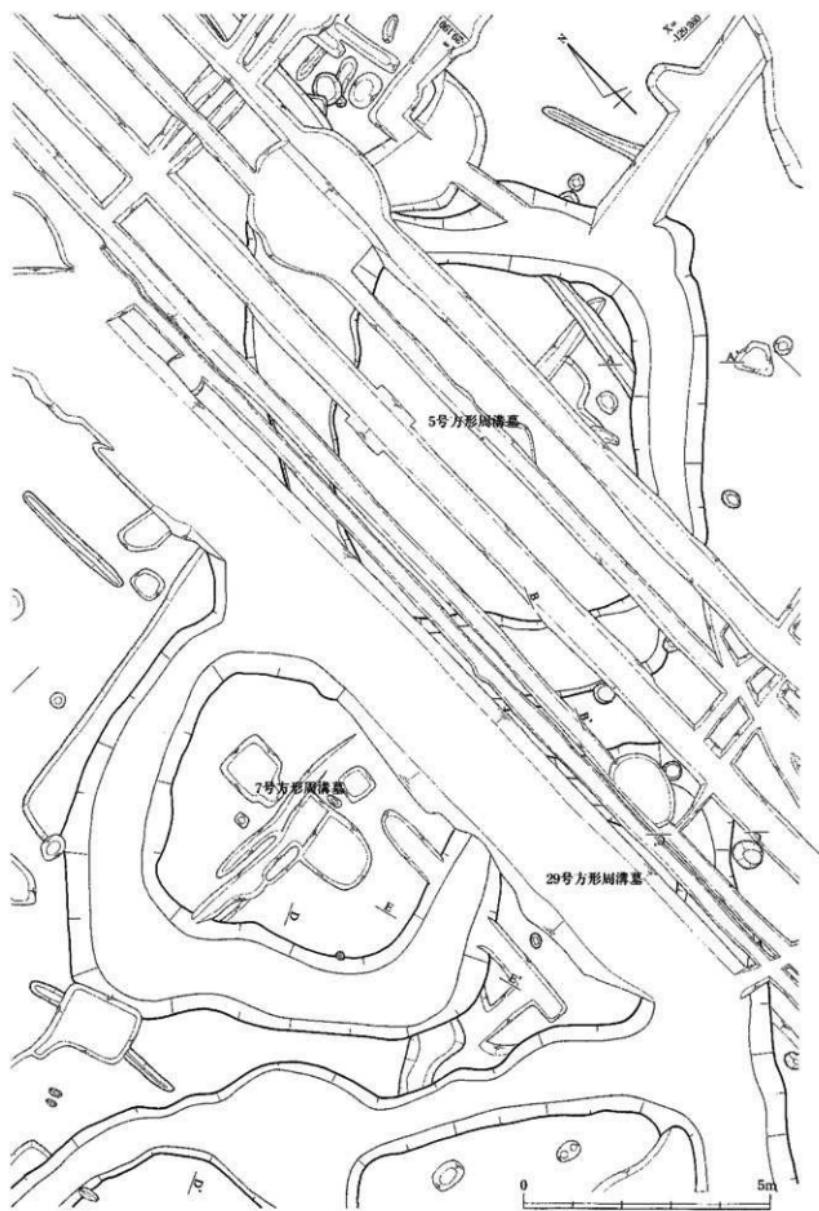


図39 5・7・29号方形周溝墓平面図

からは少量の弥生土器片が出土した。弥生土器に図化しえるものはなかった。

15号方形周溝墓 (図41・P L 13) 98-3調査区、K7-6-C12-g7で検出した長方形の方形周溝墓である。検出面の標高は20.75mである。西周溝を16号方形周溝墓と共有する。主軸の方向はN-60°-Eである。周溝の共有関係から見れば15~17・6号方形周溝墓の4基の方形周溝墓で群を形成する。

墳丘規模は6.5×5.0mを測る。周溝は完周せず、北西と南東の対角の位置を掘り残して、2ヶ所の陸橋部を作る。北周溝の幅0.8m、東周溝の幅1.0m、深さ0.4mを測り、南周溝の幅0.6m、深さ0.2m、西周溝の幅1.0m、深さ0.4mを測る。周溝埋土は分層が可能であるが、弥生時代の遺物だけが少量出土し、上下層の時期差はなかった。

出土遺物 (図40-120) 壺120は北周溝から出土した壺の底部である。上げ底の底部と体部外面にはユビオサエが見られる。

16号方形周溝墓 (図41・P L 13) 98-3調査区、K7-6-C12-g7-8で検出した正方形の方形周溝墓である。検出面の標高は20.8mである。北東周溝を15号方形周溝墓と共有する。主軸の方向はN-56°-Eである。

墳丘規模は6.0×6.0mを測る。周溝は完周しないことが確実であるが、後世の造構で17号方形周溝墓の周溝との取りつき部分が不明確であること、南東コーナー部が攪乱により破壊されているため明らかにしない部分が残るが、西と東の対角の位置を掘り残した2ヶ所の陸橋部を作られていたものと考えられる。北西・北東周溝の幅1.5m、深さ0.3~0.5m、南東周溝の幅1.0m、深さ0.3mを測る。周溝埋土は分層が可能であるが、弥生時代以外の遺物は出土していない。

出土遺物 (図40-121・122) 壺121は南東周溝から出土した、底部から体部にかけての破片である。球形の体部上半は欠損している。内外面とも剥離のため調整不明。壺122は漏斗状に広がる広口壺の口縁部である。口縁端部は厚みを持たせ細く仕上げる。外面にわずかにハケ調整が見られる。

17号方形周溝墓 (図42・43・P L 13) 98-2-3調査区、K7-6-C12-h8-9で検出した長方形の方形周溝墓である。検出面の標高は20.8mである。東周溝を16号方形周溝墓と、西周溝を6号方形周溝墓と共有する。主軸の方向はN-69°-Eである。

墳丘規模は主軸方向10.0m、南北方向は北周溝が掘削されていないため8.0m程度と推測され

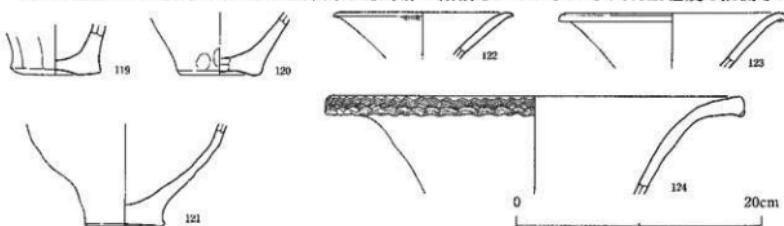


図40 5・15・16・17号方形周溝墓他出土遺物

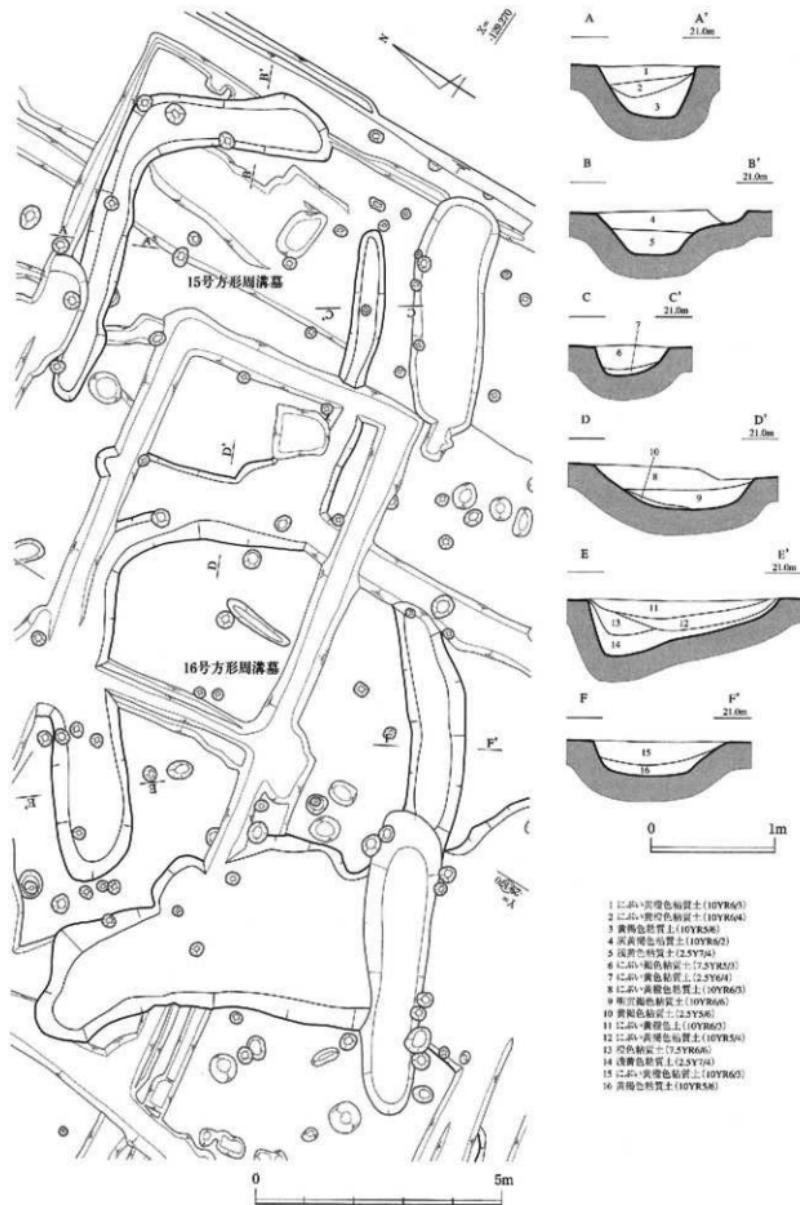


図41 15・16号方形周溝墓平面図・断面図

る。周溝は前述のように完周せず、北周溝を掘削していない。また南西コーナー部を極端に狭く掘削し、区画を目的として掘削したのではなく、繋ぐことに目的があったかのようである。東周溝の幅2.0~3.5m、深さ0.5mを測り、16号方形周溝墓と共有している。

東周溝の埋土はC断面で観察できたが、切り合ひ関係は認められず、同時併存あるいは16号方形周溝墓の周溝を完全に取り込んで17号方形周溝墓の周溝が新たに掘削されたかの何れかである。東周溝はL字形に折れて南周溝となり、幅2.5m、深さ0.4mを測る。D断面で埋没状況を観察できたが、平安時代のSD1539が17号方形周溝墓の周溝の窪みを利用して、東西方向に掘削したものと考えられる。上位堆積層の13橙色粘質土はSD1539の埋土である。

南西コーナー部の周溝は、幅0.4mと細くなり、6号方形周溝墓の東周溝に取り付けるためだけに掘削されたかに看取される。

出土遺物（図40-123・124） 壺123は東周溝下層から出土した広口壺の口縁部である。漏斗状に外反する口頭部に、口縁端部は肥厚させずに面を持つ。装飾は施さない。壺124は南周溝下層から出土した広口壺である。口縁部は粘土を足して肥厚させ、口縁下端を指で摘んで刻目紋とし、端面に櫛描の波状紋を施す。

6号方形周溝墓（図42・43・P L13） 98-2・3調査区、99-5調査区、K7-6-C12-i9で検出した長方形の方形周溝墓である。検出面の標高は20.8mである。東周溝を16号方形周溝墓と共有する。主軸の方向はN-69°-Eである。

墳丘規模は6.5×7.0mを測る。周溝は、陸橋部を意識するように北東コーナー部を浅く掘り残すが、途切れることなく完周する。周溝の幅1.0~2.5m、深さ0.4mを測る。周溝埋土は基本的に上下2層に分かれ、上層からは平安時代以前の遺物が出土し、下層からは櫛描直線紋が施された弥生土器の小片が出土した。下層の遺物量は少量である。

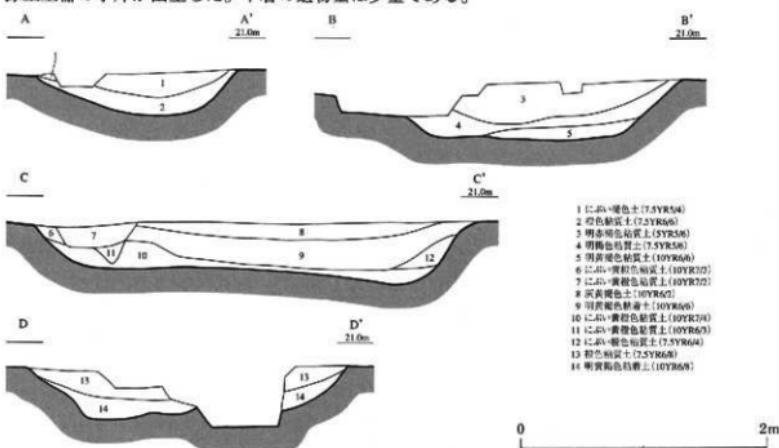


図42 6-17号方形周溝墓断面図

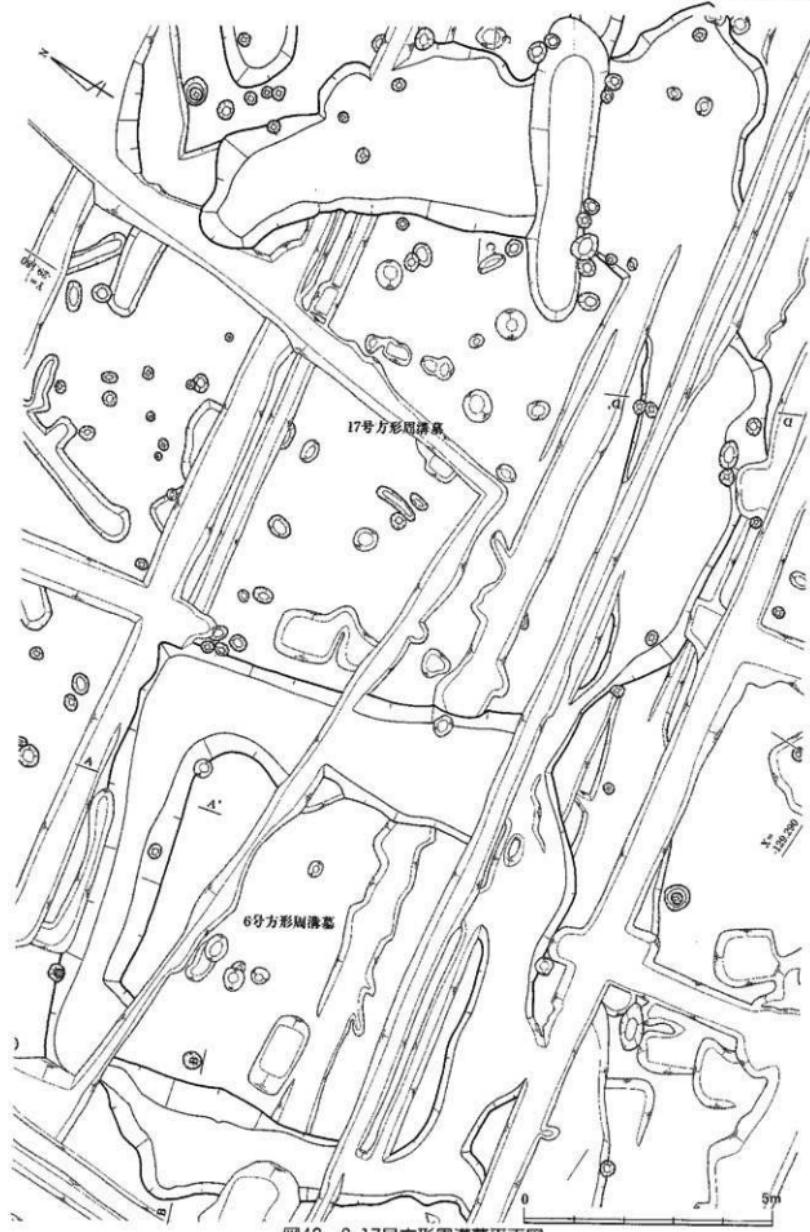


図43 6・17号方形周溝墓平面図

8号方形周溝墓（図45・46・P L14） 98-1・99-4調査区、K7-6-C13-h1で検出した長方形の方形周溝墓である。検出面の標高は20.5mである。北東周溝を29号方形周溝墓と、北西周溝を9号方形周溝墓と共有する。主軸の方向はN-34°-Eである。

墳丘規模は、8.0×7.0mを測る。周溝は、浅く掘り残すことなく完周する。周溝の幅1.0~2.5m、深さ0.3~0.4mを測る。北東・北西周溝が狭く、南東・南西周溝が広く掘削されている。周溝埋土は上下2層に分かれ、上層からは平安時代以前の遺物が出土し、下層から中期の弥生土器が出土した。

9号方形周溝墓（図45・46・P L14） 98-1調査区、K7-6-C13-h2で検出した不整形方形の方形周溝墓である。検出面の標高は20.4mである。南東周溝を8号方形周溝墓と共有する。主軸の方向はN-91°-Eである。

墳丘規模は、5.5×4.5mを測る。南周溝の東側は、8号方形周溝墓の周溝を利用する形で共有するため、墳丘の主軸と方向を違えている。また南西コーナー部で10号方形周溝墓と繋がる。周溝は完周せず、南側中央部に幅1.5mの陸橋部を掘り残す。周溝の幅1.0m、深さ0.3mを測る。東と南西で幅3.0mに拡がる。周溝埋土は上下2層に分かれ、上層からは庄内期の土器が出土し、下層からは中期の弥生土器が出土した。

出土遺物（図44-126） 126は北周溝下層から出土した壺の底部である。外面には縦方向のハケ調整、内面底にはユビオサエが見られる。

10号方形周溝墓（図45・46・P L14） 98-1・99-4調査区、K7-6-C13-h2・3で検出した平行四辺形の方形周溝墓である。検出面の標高は20.45mである。北東周溝が9号方形周溝墓と、南東周溝が21号方形周溝墓と繋がる。主軸の方向はN-61°-Eである。

墳丘規模は6.5×6.0mを測る。周溝は北西周溝の一部を幅1.0m掘り残し、陸橋部を作る。周溝の幅1.5~2.5m、深さ0.3~0.5mを測る。北コーナー部の周溝は狭く、1.0m以下の幅である。北西および南西周溝では庄内期に溝の再掘削が行なわれたようで、図46G断面20~22の土層から同時期の遺物が出土した。また北東・南東周溝の上層から平安時代以前の遺物が、下層から中期の弥生土器が少量出土したが、図化しえるものはなかった。

21号方形周溝墓（図45・46・P L14） 99-4調査区、K7-6-C13-i2で検出した長方形の方形周溝墓である。検出面の標高は20.55mである。北西周溝が10号方形周溝墓と繋がり、南東周溝が27号方形周溝墓と共有する。主軸の方向はN-57°-Eである。

墳丘の規模は7.0×6.0mを測る。周溝は完周せず、南コーナー部を掘り残して陸橋部を作る。また北西周溝中央部、北東周溝南側も浅く狭い。

周溝の幅0.7~2.5m、深さ0.2~0.7mを測る。周溝埋土の最上層から平安時代の瓦等が出土し、下層からは中期の弥生土器が少量出土した。

出土遺物（図44-125） 壺125は北東周溝下層

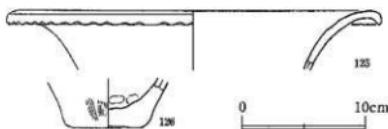


図44 9-21号方形周溝墓出土遺物

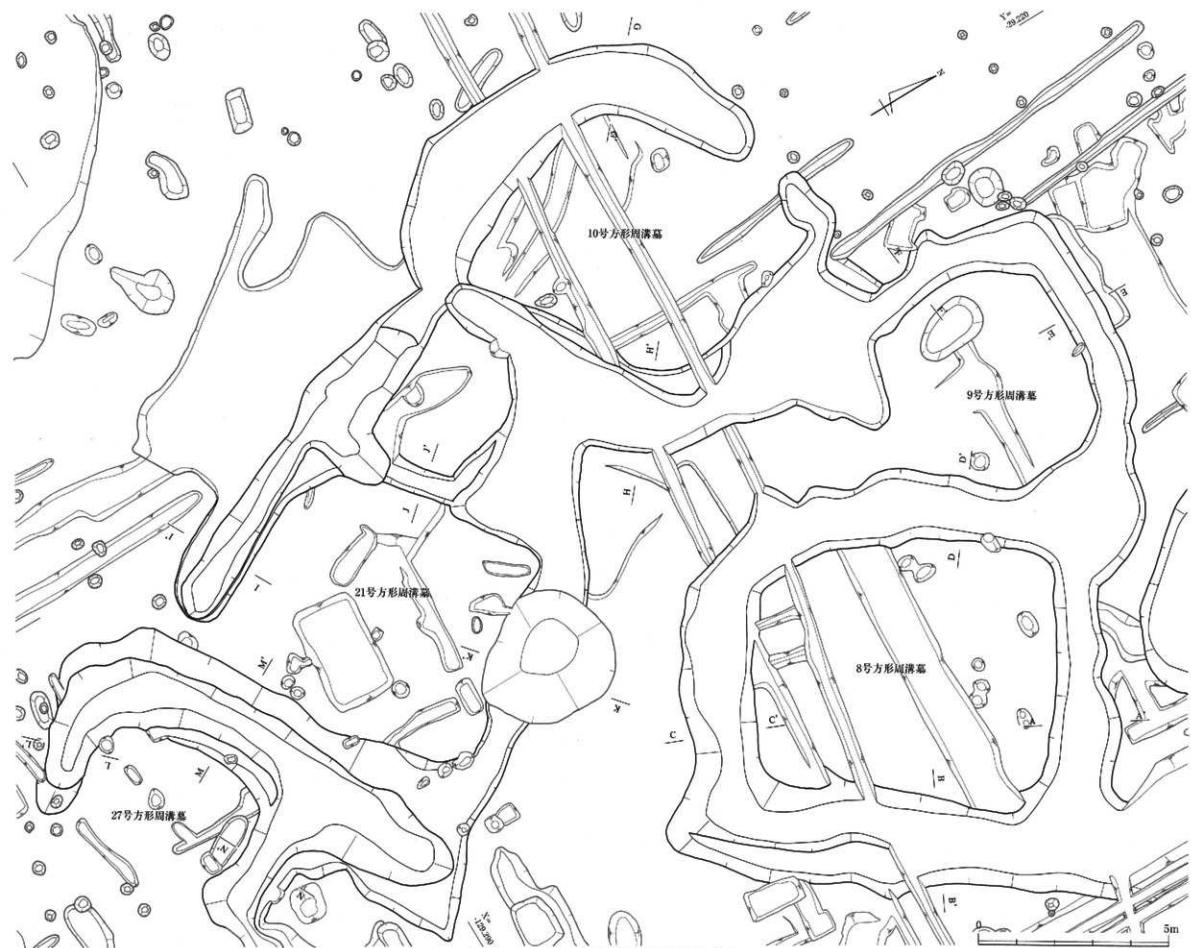
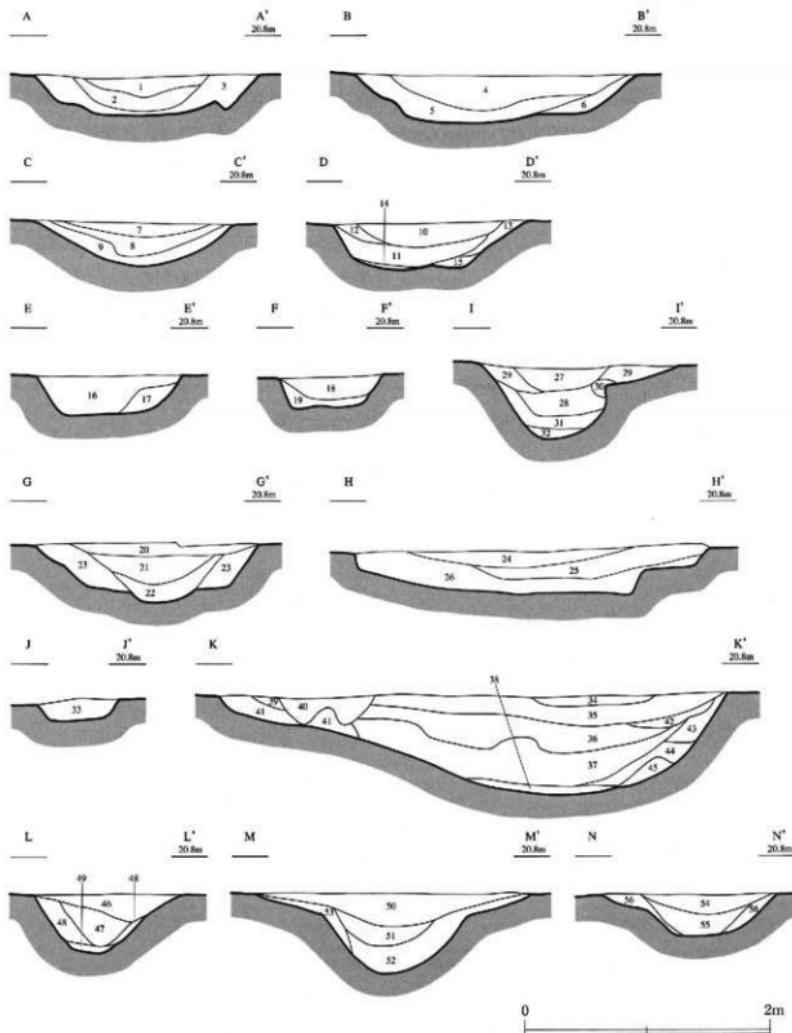


图45 8·9·10·21·27号方形周清墓平面图



1. 1-2. 黄褐色砂質土上 (10YR6/2)
 2. 明黄色土 (10YR6/6)
 3. 明黄色土 (10YR7/6)
 4. 1-2. 黄褐色粘土 (2.5YR5/3)
 5. 黄褐色砂質土上 (10YR8/2)
 6. 明黄色土 (2.5YR6/6)
 7. 明黄色粘土 (10YR6/2)
 8. 黄褐色土 (10YR6/6)
 9. 1-2. 黄褐色粘土上 (2.5YR6/2)
 10. 1-2. 黄褐色砂質土 (10YR5/3)
 11. 1-2. 黄褐色土 (10YR5/4)
 12. 1-2. 黄褐色粘土 (10YR6/2)
 13. 黄褐色土 (10YR5/6)
14. 黄褐色砂質土 (10YR5/2)
 15. 黄褐色粘土 (10YR6/2)
 16. 1-2. 黄褐色土 (10YR6/3)
 17. 黄褐色土上 (10YR7/6)
 18. 黄褐色砂質土上 (10YR8/2)
 19. 二重・黄褐色土 (10YR5/4)
 20. 黄褐色土 (10YR6/4)
 21. 二重・黄褐色土 (10YR6/6)
 22. 1-2. 黄褐色粘土 (2.5YR5/3)
 23. 深黄色粘土 (2.5YR4)
 24. 黄褐色土 (2.5YR5/0)
 25. 黄褐色土 (10YR5/2)
 26. 0リード・黄褐色土 (5Y6/3)
27. 1-2. 黄褐色砂質土 (10YR6/4)
 28. 1-2. 黄褐色粘土 (10YR6/6)
 29. 明黄色砂質土 (10YR6/3)
 30. 明黄色粘土 (10YR7/6)
 31. 黄褐色砂質土 (2.5YR6/5)
 32. 俗褐色 (7.5YR6/6)
 33. 1-2. 黄褐色砂質土 (10YR6/6)
 34. 1-2. 黄褐色粘土 (10YR6/4)
 35. 1-2. 黄褐色粘土 (10YR6/4)
 36. 1-2. 黄褐色砂質土 (10YR6/5)
 37. 黄褐色砂質土 (2.5YR7/0)
 38. 黄褐色砂質土 (2.5YR7/2)
 39. 明黄色砂質土 (10YR7/6)
40. 1-2. 黄褐色粘土 (10YR6/3)
 41. 深黄色粘土 (2.5Y7/4)
 42. 明黄色砂質土 (10YR6/8)
 43. 明黄色粘土 (2.5Y7/6)
 44. 黄褐色砂質土 (2.5Y7/6)
 45. 黄褐色粘土 (2.5Y7/6)
 46. 元始粘土 (2.5Y8/7)
 47. 1-2. 黄褐色粘土 (10YR6/2)
 48. 黄褐色砂質土 (10YR6/4)
 49. 黄褐色粘土 (10YR6/2)
 50. 1-2. 黄褐色粘土 (10YR2/4)
 51. 黄褐色砂質土 (10YR5/2)
 52. 1-2. 黄褐色粘土 (10YR6/2)

図46 8·9·10·21·27号方形周溝断面図

から出土した漏斗状に拡がる広口壺の口縁部である。口縁端部は粘土を足して肥厚させ、口縁下端部を指で摘んで刻目紋を施す。調整不明。

27号方形周溝墓（図45・46・P L14） 99-4調査区、K7-6-C13-j2で検出した方形周溝墓である。検出面の標高は20.5mである。北西周溝が21号方形周溝墓と共有する。南東側には周溝が存在せず、コ字形に巡る周溝である。他の周溝の掘削深度からみて、南東周溝は当初から掘削されていなかったと考えられる。主軸の方向はN-61°-Eである。

墳丘の規模は、4.5×3.0m以上を測る。周溝の幅1.5~2.5m、深さ0.3~0.7mを測る。周溝埋土は上下2層に分かれ、上層から平安時代以前の遺物が出土し、下層からは中期の弥生土器が少量出土した。それも小片であるため図化しえなかつた。

22号方形周溝墓（図47・48・P L15） 99-4調査区、K7-6-C13-j4で検出した長方形の方形周溝墓である。検出面の標高は20.45mである。西側で24号方形周溝墓と繋がるが、周溝は共有せず、単独で築造された方形周溝墓と考えられる。また他の方形周溝墓と比べて周溝幅が広く、南西側に方形の突出部を設ける。周溝は完周せず、突出部に陸橋部を掘り残す。主軸の方向はN-41°-Eである。

墳丘の規模は9.5×8.0m、突出部の規模は2.5×4.0mを測る。周溝の幅3.0~5.0m、深さは北コ一

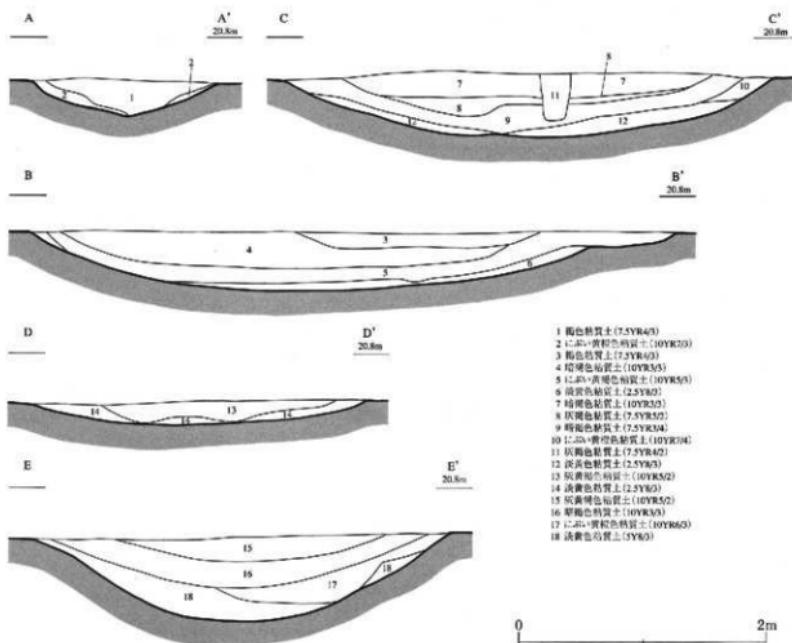


図47 22号方形周溝墓断面図

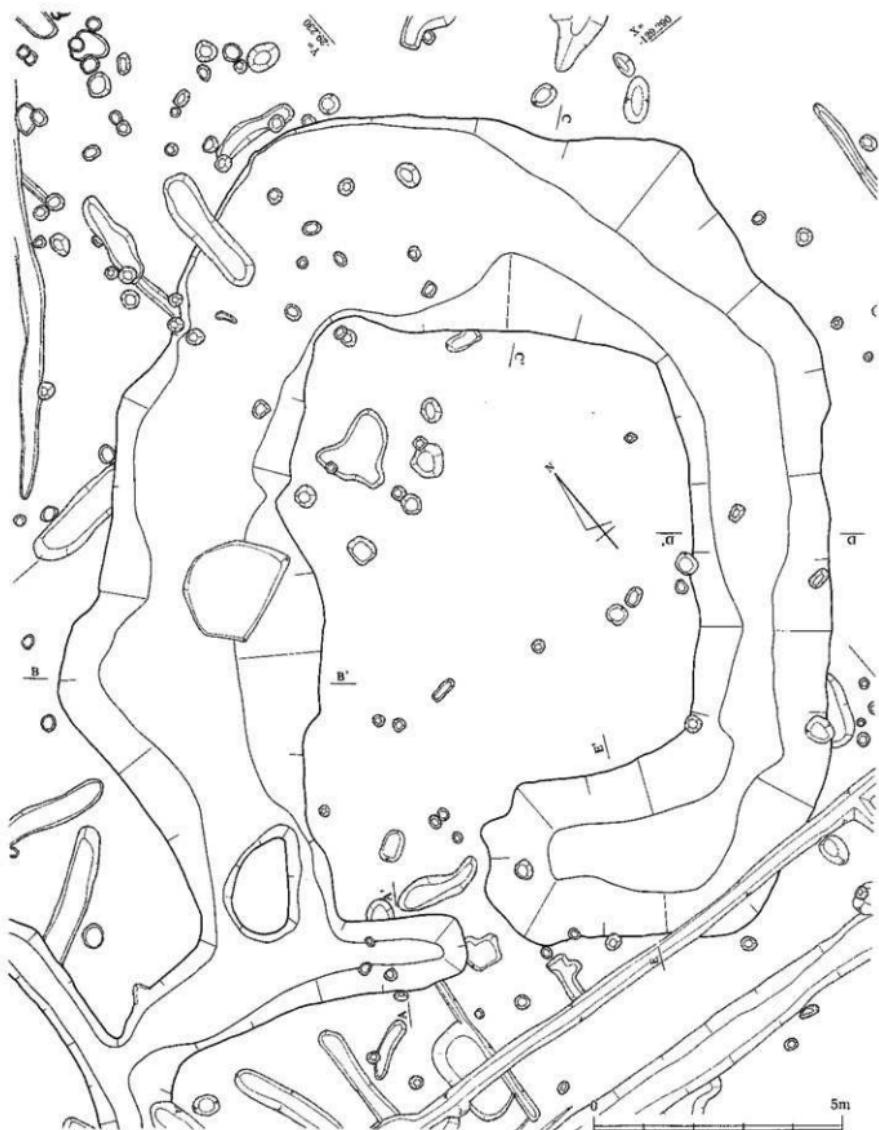


図48 22号方形周溝墓平面図

ナ一部およびD断面付近が浅く0.2m、E断面付近が最も深く0.7mを測る。突出部をL字に区画する溝は幅1.5m、深さ0.3mを測り、周溝と比べ規模が小さい。周溝埋土は大別して上下2層に分かれる。図47B断面-4、C断面-9、E断面-16の暗褐色粘質土を鍵層としてその上層から平安時代の遺物が出土した。北西周溝からは瓦の出土が多く、南西周溝からは瓦、土器に混じって弥生土器も出土した。この弥生土器には接合資料も多い。平安期の堆積層は約0.3mを測り、後述する同時期の掘立柱建物に伴う再掘削、あるいは整地で最終的に埋没している。下層からは中期の弥生土器が出土した。

出土遺物（図49-127～129・図50） 壺127は南西周溝上層から出土した広口壺である。平安期の瓦に混じって出土した。底部・体部・口縁部の破片で、各々直接は繋がらないが、推定復元して図示した。口頭部は漏斗状に大きく開き、口縁部は肥厚させ面を持たせる。端面に櫛描波状を施す。胴の張った体部上位から口頭部にかけて8条の櫛描直線紋を施す。調整は口縁部ヨコナ

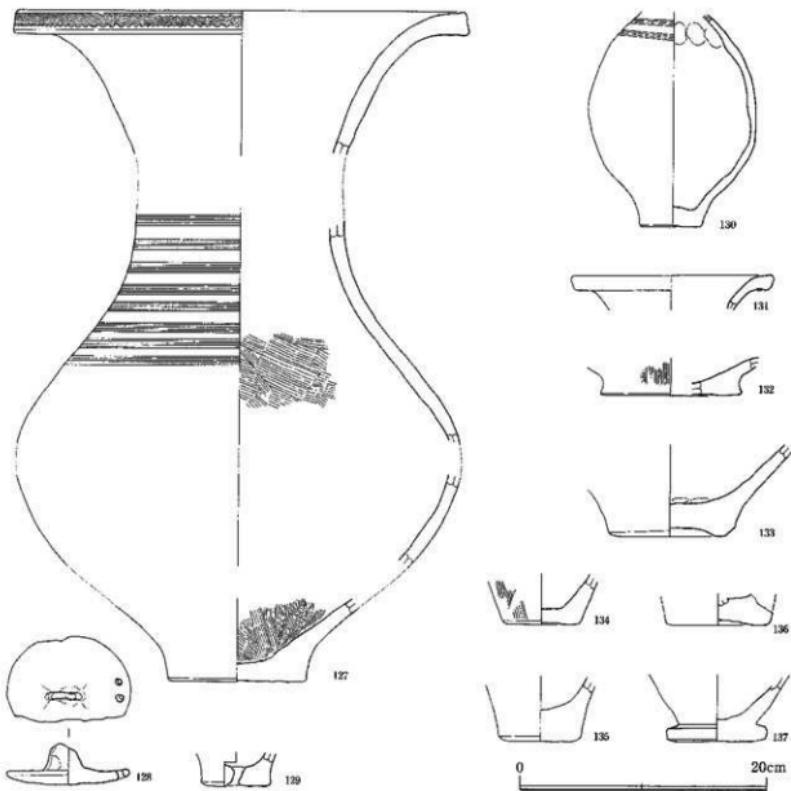


図49 22-23号方形周溝基出土遺物

ア、口頭部以下は不明、内面はハケ調整が見られる。

壺蓋128は北東周溝下層から出土した。円盤形で中央に把手を付け、一对の穿孔を施す。全面ナデ調整。径10.0cm。壺129は南西周溝下層から出土し、底部に穿孔を施す。

138は南西周溝上層から出土した砥石である。自然石を利用し、図示した側が使用され平滑である。139は北西周溝上層から出土した砥石である。断面は台形を呈するように加工されていいると考えられる。図示した側が使用され平滑である。

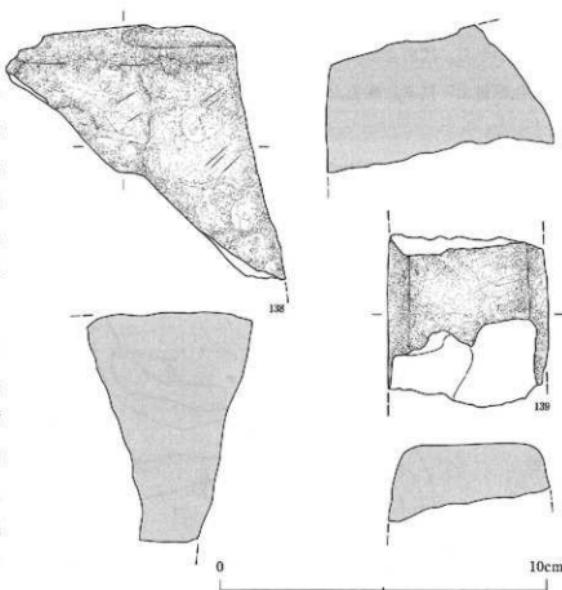


図50 22号方形周溝墓出土遺物

23号方形周溝墓 (図51~53・PL16) 99-4調査区、K7-6-D13-c3・4/d3・4で検出した長方形の方形周溝墓である。検出面の標高は20.4mである。周溝は北東方向に派生する溝が1条あるが、まわりに広い空闊地を有する単独墓である。周溝は完周せず西コーナー部を掘り残して陸橋部とする。主軸の方向はN-31°-Eである。

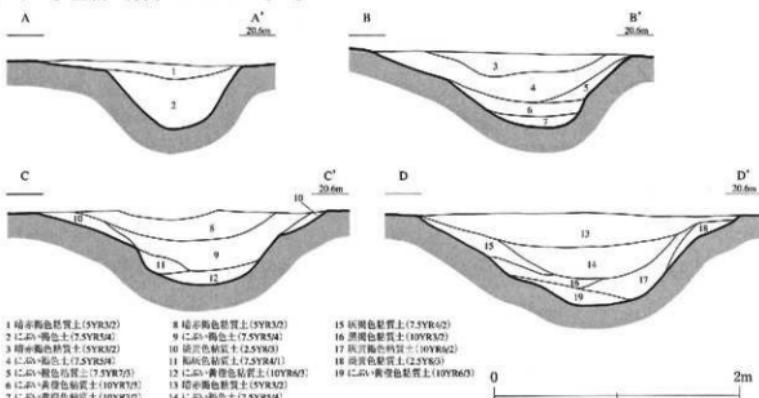


図51 23号方形周溝墓断面図

墳丘規模は9.0×7.0mを測る。周溝の幅2.0~2.5m、深さ0.5~0.8mを測る。周溝埋土は上下2層に分かれる。図51A断面1暗赤褐色粘質土、B断面3・4、C断面8・9、D断面13・14の暗赤褐色粘質土・にぶい褐色土の上層から庄内期の遺物、以下の層から中期の弥生土器、石器等が出土した。

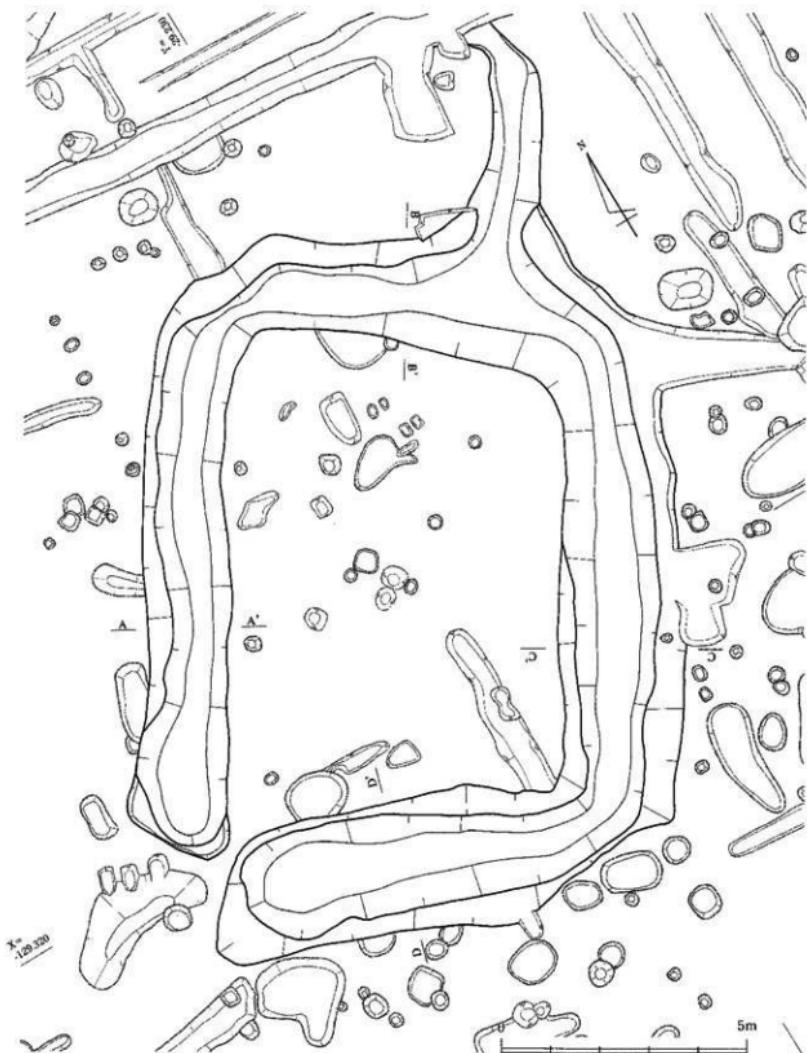


図52 23号方形周溝墓平面図

出土遺物（図49-130～137・図54） 壺130は北東周溝から北東方向に分岐する溝の最下層で出土した（図53）。縦長球体の体部を持つ小型の広口壺と考えられ、口頸部に2条の櫛描直線紋が施される。以下は剥離のため施紋・調整とも不明。口頸部内面にユビオサエの跡が見られる。壺131は南東周溝下層から出土した広口壺の口縁部である。端部は肥厚させ面を有する。調整不明。132は南東周溝下層から出土した壺の底部である。外面に縦方向のハケ調整を施す。133は北東周溝下層から出土した壺の底部である。134～136は南西周溝上層から出土した壺の底部である。134の外面にハケ調整が残存する。137は北東周溝下層から出土した鉢の底部で、円盤状の台を貼り付ける。

140は南西周溝上層から出土した大型蛤刃石斧の未製品である。表面を敲打し、断面楕円形まで整形しているが、斧頭側には原縫面を残している。厚さ6.7cmを測る。整形途上で折損し、廃棄されたものと考えられる。二次的に使用された痕跡を残さない。玢岩。141は南東周溝下層から出土した石庖丁である。直線刃半月型で全体の5分の2程度が残存するが、裏面は剥離している。紐通し孔が1ヶ所認められる。幅約3.0cm。泥質ホルンフェルス。142は南西周溝上層から出

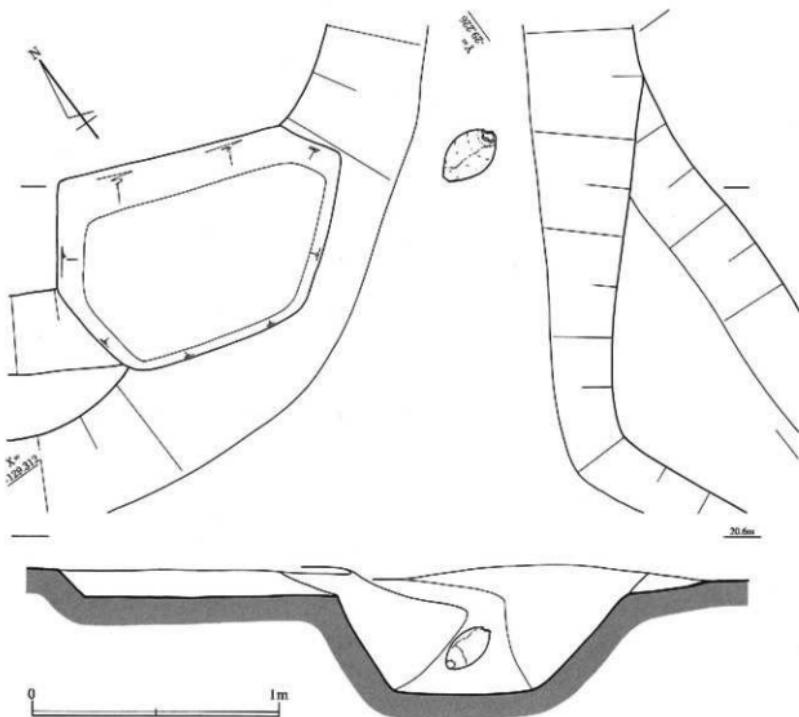


図53 23号方形周溝墓遺物出土状況・立面図

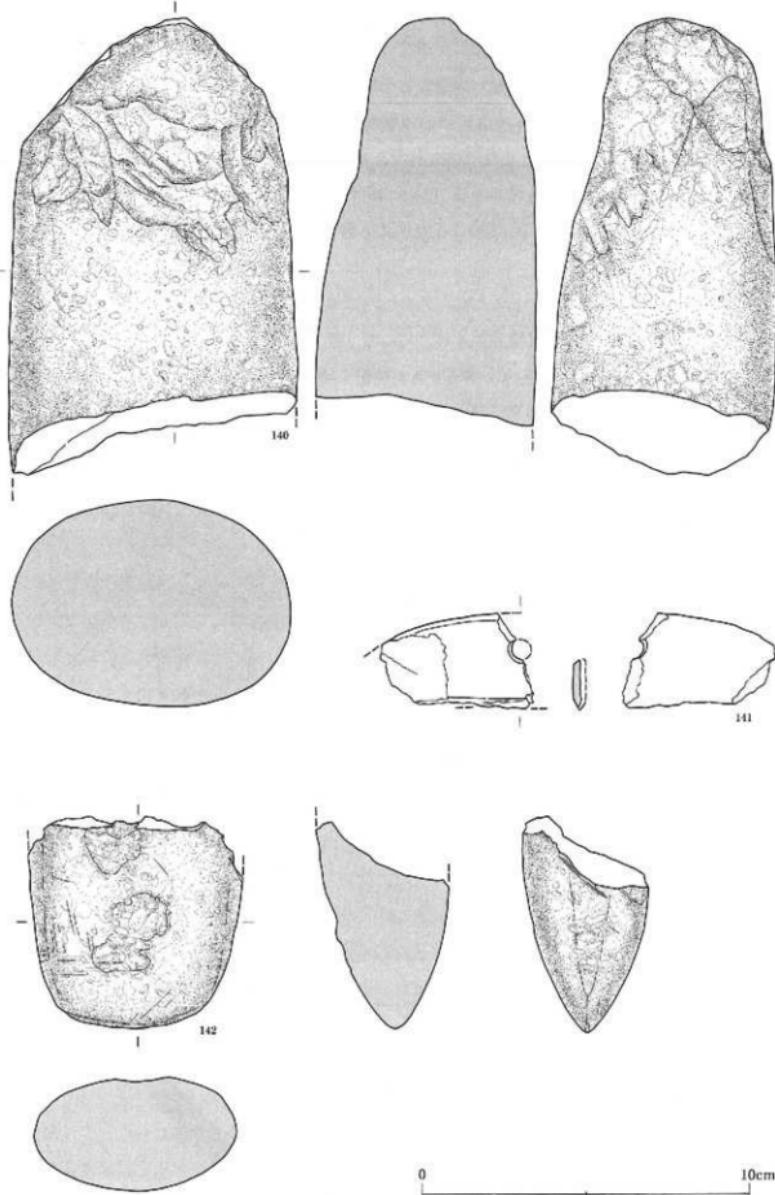


図54 23号方形周溝墓出土遺物

土した太型蛤貝石斧である。刃部のみの残存で、折損後台石として転用された使用痕が残る。厚さ4.1cm。玢岩。

24号方形周溝墓（図55・P L17） 99-4調査区、K7-6-C13-j5-6で検出した長方形の方形周溝墓である。検出面の標高は20.6mである。西周溝を25号方形周溝墓と共有し、22号方形周溝墓と溝で繋がる。周溝は完周せず、北東コーナー部を掘り残して陸橋部としている。主軸の方向はN-92°-Eである。

墳丘規模は、7.5×6.0mを測る。周溝の幅0.8~2.0m、深さ約0.3mを測る。周溝埋土は基本的に単層である。東南コーナー部では周溝底から浮いた状況で、143・144の壺が出土した。周溝内からは少量の弥生土器が出土した。

出土遺物（図55-143・144） 壺143は周溝南東コーナー部から出土した。球形の体部から伸張した口頭部を持つ広口壺と推定される。体部上位と口頭部に多条化したヘラ描沈線紋を2帯施す。体部外面ハケ調整、内面はナデ調整。144は壺143と同じ位置から出土した壺の底部である。外面はハケ調整、内面はナデ調整。使用されたハケの原体および胎土、色調からみて、両者は同一個体と考えられる。

25号方形周溝墓（図55・P L17） 99-4調査区、K7-6-C13-j6で検出した長方形の方形周溝墓である。検出面の標高は20.7mである。東周溝を24号方形周溝墓と共有する。北周溝が調査区外に延びて行くため、西周溝は調査区外に存在すると考えられる。これに対して南周溝は調査区の端に接する部分で端部が検出され、西周溝と直接接続しないことが判明した。南西コーナー部に掘り残しの陸橋部が1ヶ所存在する。主軸の方向は24号方形周溝墓と同じく、N-92°-Eである。

墳丘の規模は、6.0m以上×5.0mを測るが、陸橋部の検出状況からみて主軸方向は6.5m前後と考えられる。周溝の幅約1.0m、深さ0.3mを測り、埋土は単層である。周溝内からは、少量の前期・中期の弥生土器が出土したが、小片のため図化しえるものはなかった。

26号方形周溝墓（図56・P L18） 99-1調査区、K7-6-D13-b7で検出した正方形の方形周溝墓である。検出面の標高は北から南に向かって低く傾斜する地形で、北側で20.45m、南側で20.2mを測る。方形周溝墓の西側は、現代の用水路および旧水田の段差で削平を受けており、西周溝はほとんど検出できなかったため、陸橋部の存在は明らかにしえない。西周溝と推定される位置から、28号方形周溝墓に向かって延びる同時期の溝がある。26・28号方形周溝墓間に方形周溝墓が存在した可能性がある。主軸の方向はN-92°-Eである。

墳丘規模は、西側辺が不明確であるが、約5.0m×5.0mと考えられる。周溝の幅は北周溝が約0.5m、東周溝から南周溝にかけて漸次広くなり1.5mを測る。深さも同様0.1~0.3mを測り、埋土は単層である。北周溝C断面付近から、周溝底に口縁を西に向けて倒れた状況で広口壺1点が出土した。後世の削平により上位半分が失われている。周溝内からは他にも中期前半の弥生土器が少量出土した。

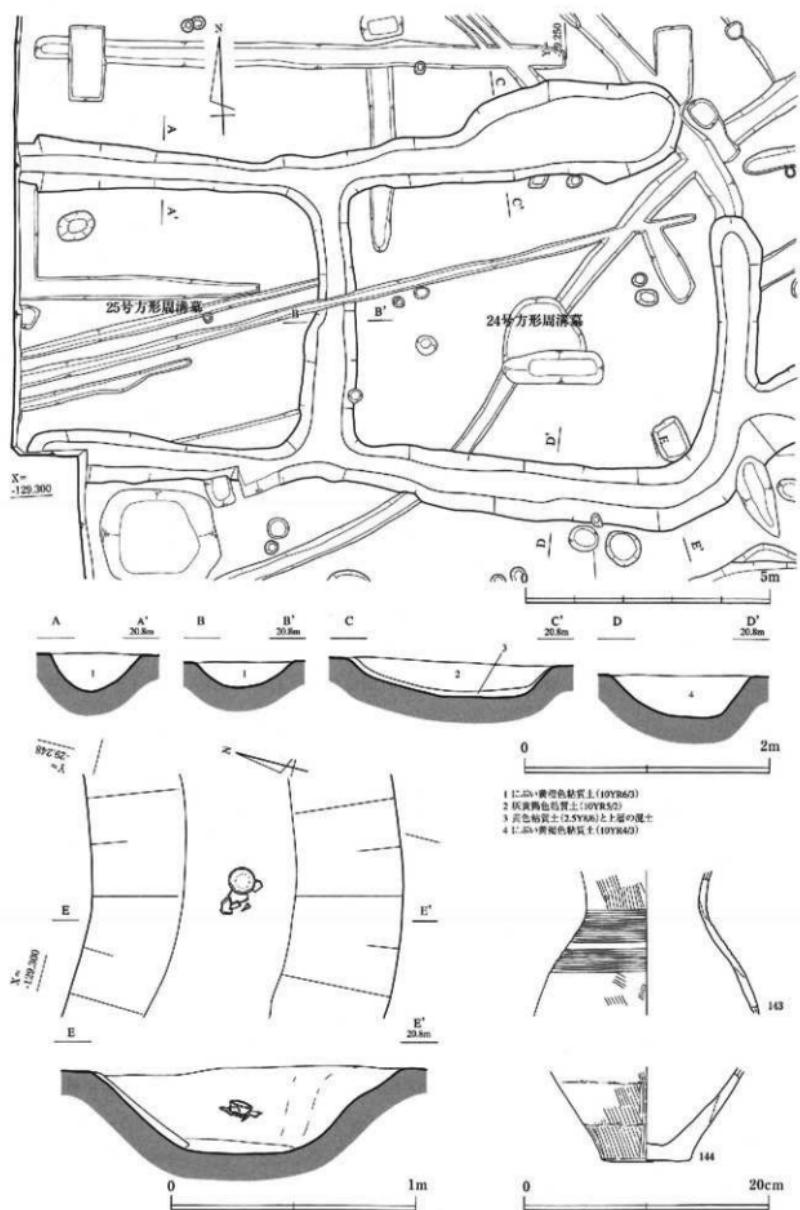


図55 24・25号方形周溝墓平面図・断面図・遺物出土状況・出土遺物

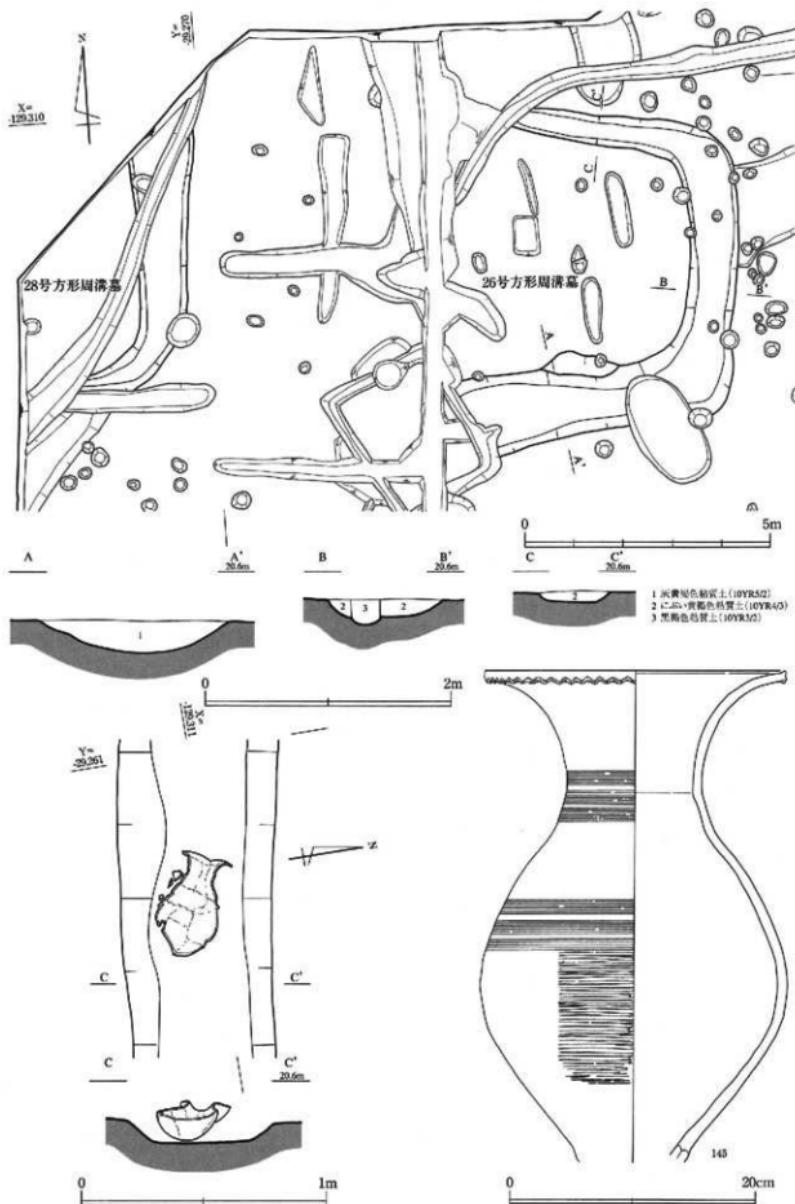


図56 26・28号方形周溝墓平面図・断面図・遺物出土状況・出土遺物

出土遺物（図56-145） 壺145は北周溝中央部から出土した広口壺で、底部を欠損する。縦長球形の体部から漏斗状に口頸部が開き、口縁端部を僅かに肥厚させ、下端を指で摘んで刻目紋を施す。体部上位から口頸部にかけて櫛描直線紋を連続的に施す。紋様間の空白部は表面剥離のため紋様が残存しない。体部外面下位は横方向のヘラミガキ調整。それ以外は不明。

28号方形周溝墓（図56・P L18） 99-1調査区、K7-6-D13-b8で検出した方形周溝墓である。検出面の標高は20.4mを測る。南東コーナー部と東周溝・南周溝の一部を検出したのみで、大半は調査区外に延びる。主軸の方向はN-92°-Eと推定される。

墳丘規模は、2.0m以上×4.0m以上、周溝の幅0.7~1.5m、深さ0.3mを測る。埋土は灰褐色土単層である。中期前半の弥生土器が出土した。

上記4基の方形周溝墓（24~26・28号）は、他の方形周溝墓群が東北-南東方向を主軸方向とするのに対して、東西方向を主軸とする一群として捉えることができる。

18号方形周溝墓（図57・59・P L19） 99-1・4調査区、K7-6-D13-d-e6-7で検出した正方形の方形周溝墓である。検出面の標高は、墳丘中央部で20.4m、周溝外側で20.3mを測る。他の方形周溝墓と周溝を共有しない単独墓である。併行に走る2条の溝が検出され、大きく掘り残した陸橋部分が存在する。主軸の方向は、N-43°-Eである。

併行する2条の溝は、内側をSD3424、外側をSD2925・3430として検出し、掘削した。内側の溝SD3424を18号方形周溝墓の周溝として考えると、南東が開くコ字形に周溝がめぐり、墳丘規模は10.0×9.5mを測る。周溝幅はほぼ一定で、1.5m、深さ0.2~0.4mを測る。埋土は大別して上下2層に分かれ、上層から庄内期以前の遺物、下層から前期末及び中期前半の弥生土器および石器、石材が出土した。

外側の溝SD2925とSD3430を周溝と考えると、南コーナー部が大きく掘り残された

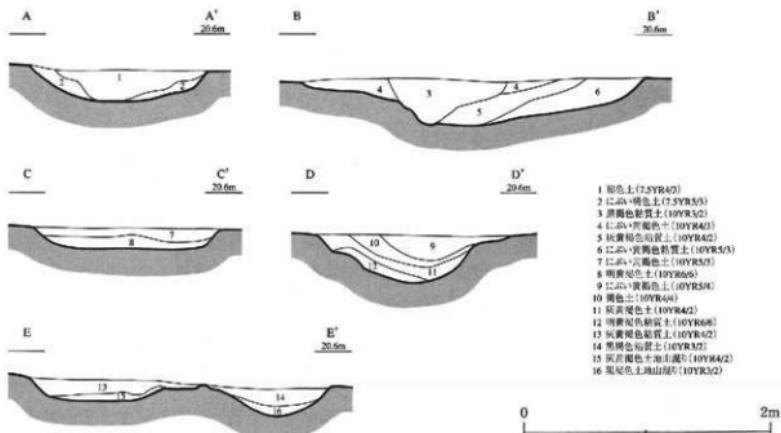


図57 18号方形周溝墓断面図

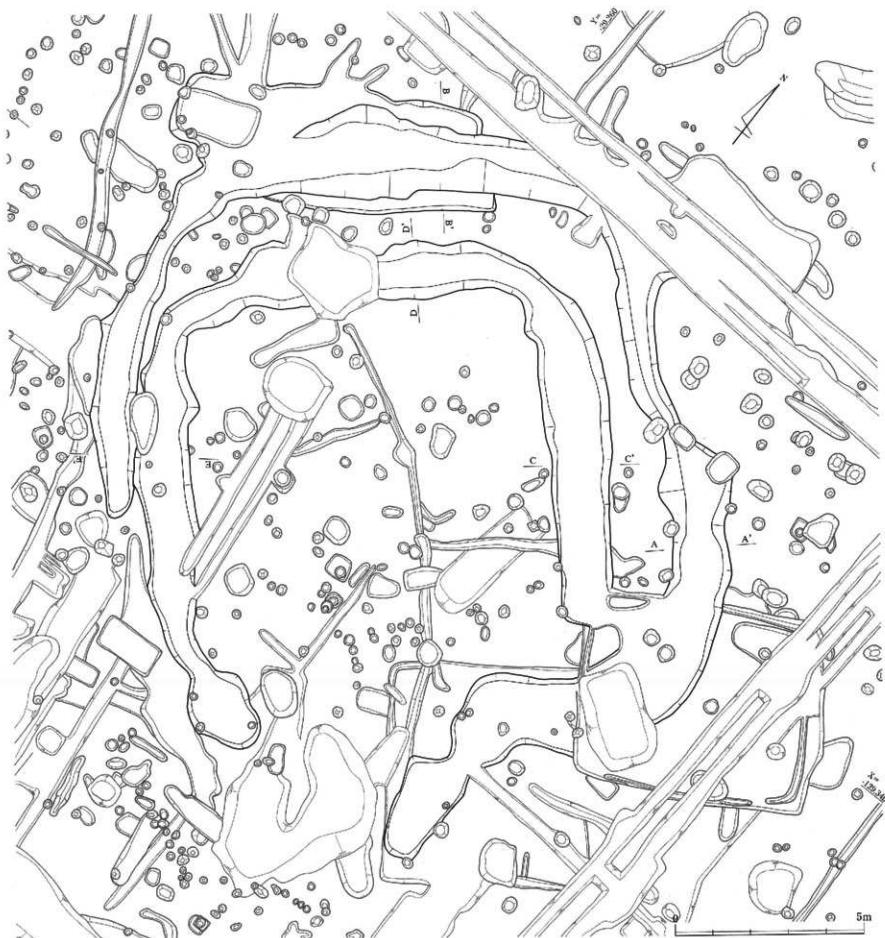


图58 18号方形周溝臺平面图

陸橋部と考え、墳丘規模は13.0×12.5mを測る。周溝幅0.8~2.0m、深さ0.1~0.4mを測る。埋土は、上下2層に分かれ、上層から庄内期以前の遺物、下層から前期末・中期前半の弥生土器、石器、石材が出土した。

SD 3424（内側）・SD 2925（外側）の溝は、南西側で接するが、重複することなく掘削され、堆積層及びそれに包含される遺物の時期・種類等に差がなく、掘削時期は同時ではないものの、周溝として聞いていた時期は同じ頃と考えられる。

周溝の機能を失い埋没していった状況についても、内外で差はなかったと考えられる。二重周溝を持つ方形周溝墓の類例はなく、内側のSD 3424と外側のSD 3430南東側の一部で墳丘部を区画していたものが、何らかの理由で築造後の近い時期にSD 2925を追加して掘削したと考えておく。

出土土器（図58-146~155）壺146は、SD 3424（内側）南コーナー部から出土した小型の広口壺の口縁部である。漏斗状に開いた口縁下端を指で引き出し、摘んで刻目紋とする。内外面ともヨコナデ調整。壺147はSD 2925（外側）北西周溝下層から出土した広口壺の口縁部である。漏斗状に広がる口縁部端を指で強く摘んで刻目紋を施す。内外面ナデ調整。壺148はSD 2925南西周溝から出土した広口壺の口縁部で、端部はやや肥厚させるが施紋を見ない。内外面ナデ調整。

壺148はSD 2925南西周溝下層から出土した。口縁部はやや外反して短く屈曲する。調整不明。壺150はSD 2925南西周溝下層から出土した。口縁部は短く屈曲する。調整不明。壺151はSD 3424南西周溝上層から出土した。口縁部は外反して短く屈曲する。端部に工具による刻目紋を施す。調整不明。壺152はSD 2925北西周溝下層から出土した。胴部の張りが強く、口縁部は外反し、端部に刻目紋を施す。口縁部内面は、横方向のハケ調整、外面ナデ調整。体部内面はナデ調整、外面は縦方向のハケ調整を施す。壺153はSD 2925北西周溝下層から

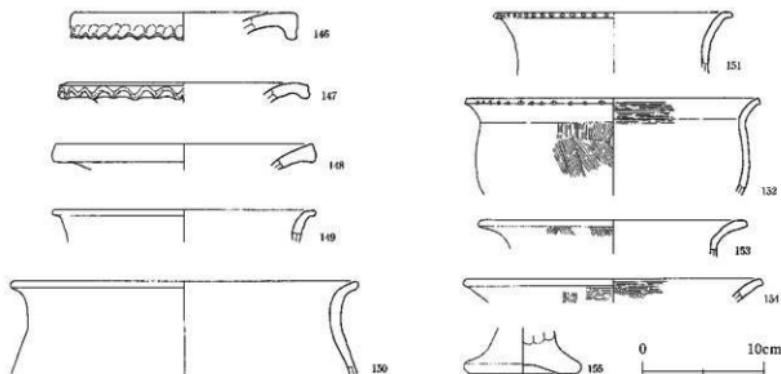


図59 18号方形周溝墓出土遺物1

出土した。口縁端部を大きく屈曲させる。外面は縱方向のハケ調整、内面はナテ調整を施す。甕154はS D 3 4 3 0（外側）北東周溝から出土した口縁端部の破片である。内面は横方向のハケ調整、外面はハケ調整。鉢155はS D 3 4 3 0 北東周溝から出土した台付鉢の脚台部である。調整不明。

出土石器（図60・61）図60-156～159・図61-164は内側周溝（S D 3 4 2 4）から出土した石器である。156は北東周溝から出土した太型蛤刃石斧の刃部の破片である。折損後刃部を叩石として再利用している。厚さ4.6cm。玢岩。157は北東周溝から出土した石庖丁の破片である。刃部と紐通し孔の一部が残存する。厚さ4mm。ホルンフェルス。158は北西周溝下層から出土した平基式石鎌である。長さ1.97cm。159は北西周溝下層から出土した石鎌である。長さ2.53cm。164は北東周溝上層から出土した叩石である。長さ9.58cmを測る。

図61-160～163・165・166は外側周溝（S D 2 9 2 5・3 4 3 0）から出土した石器である。160は南西周溝から出土した石庖丁の破片である。刃部の一部と2ヶ所の穿孔が残存する。幅4.1cm。頁岩。161は北西周溝上層から出土した石庖丁の破片である。2ヶ所の穿孔が認められる。玄武岩質凝灰岩。162は北西周溝下層から出土した扁平片刃石斧である。3分の1が欠損する。長さ7.0cm、厚さ1.6cmを測る。石英安山岩質溶結凝灰岩。163は北西周溝上層から出土した異形勾玉である。頭部は略方形を呈し、片側からの穿孔が1ヶ所認められる。石材は緑色半透明で、メノウあるいは天河石と推定される。厚さ0.55cmを測る。165は南西周溝下層から出土した石皿である。平坦な上面に叩かれた痕跡が残る。厚さ2.3cmを測る。166は北西周溝上層から出土した砥石である。図示した面が使用されている。

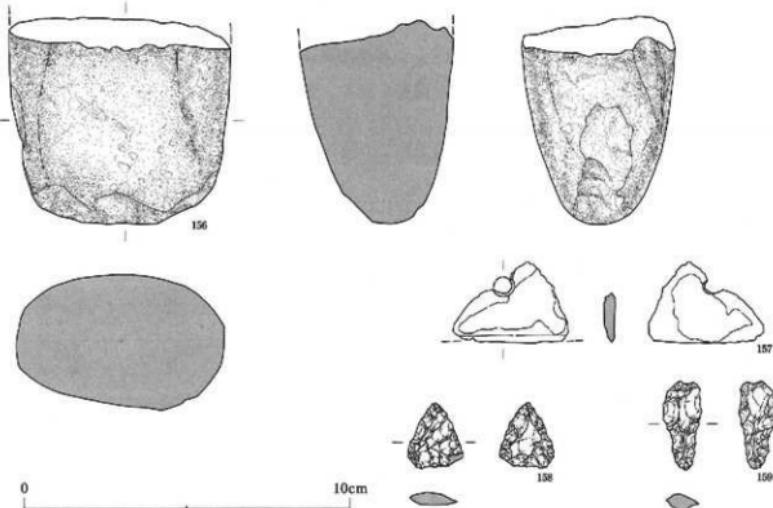


図60 18号方形周溝墓出土遺物2

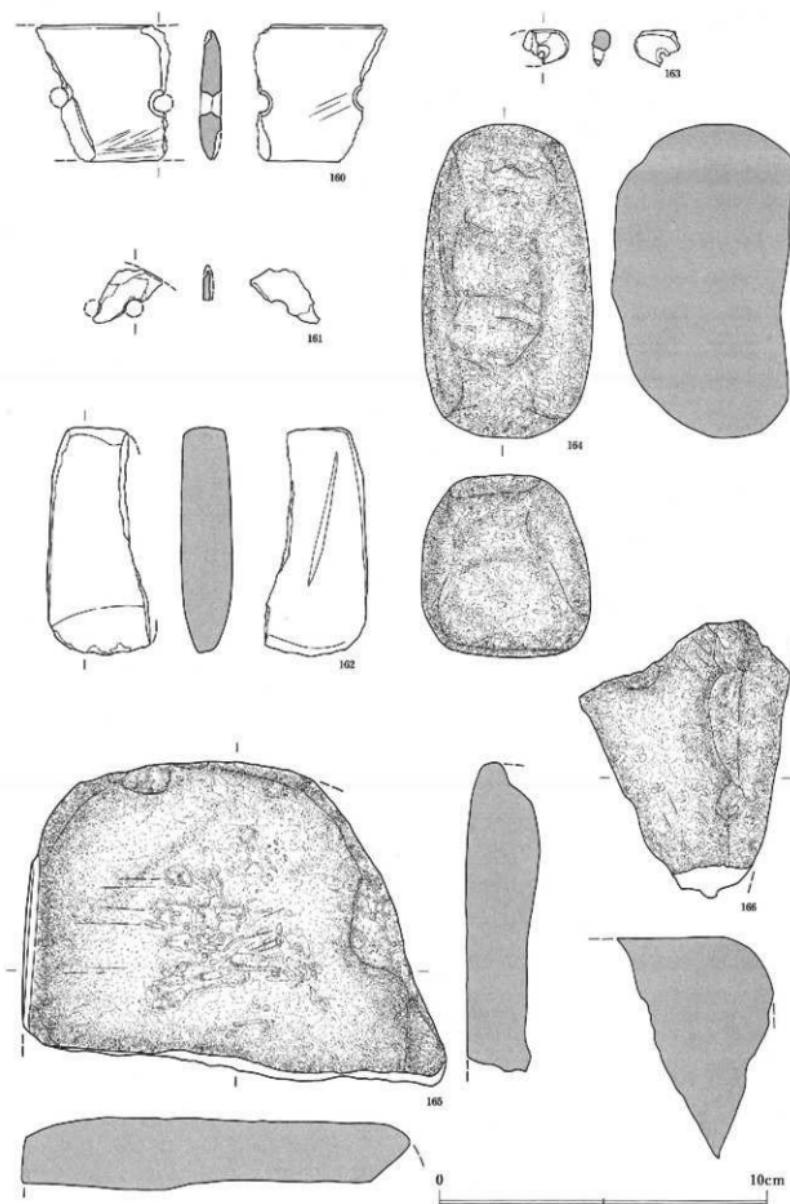


図61 18号方形周溝墓出土遺物3

19号方形周溝墓（図62・P L20） 99-1調査区、K7-6-D13-e・f8で検出した長方形の方形周溝墓である。検出面の標高は20.4mである。地山面の削平が著しく、北周溝と南周溝の一部が検出されただけで、東・西の周溝は検出できなかった。方形周溝墓の方向及び配置から見て、単独墓である可能性が高い。主軸の方向はN-98°-Eである。

墳丘規模は、7.5m以上×6.0mを測る。周溝の幅は、北周溝で0.7~1.4m、深さ約0.3mを測り、南周溝は痕跡程度に残存し、幅0.6m、深さ0.1mを測る。周溝埋土は単層である。北周溝からは前期末から中期前半の弥生土器と石砲丁の未製品、サスカイト片が出土した。出土状況図に示すように、周溝底に倒れた状況で4点の弥



図62 19号方形周溝墓平面図・断面図・遺物出土状況

生土器が出土した。本来存在した墳丘から転落した状況でなく、周溝底のこの位置に置かれ、転倒したものと看取され、本方形周溝墓群中唯一供獻の可能性を示す出土状況である。土器が置かれた周溝底は、他の部分に比べて、深く掘りこまれている。また、南周溝からは少量の前期末の土器とともに石庖丁が出土した。

出土土器（図63-167～170） 167～170の土器はいずれも北周溝の下層から出土した。壺167は漏斗状に開く広口壺の口頸部である。口縁端部は平らに面を作るが、装飾は施さない。頸部下

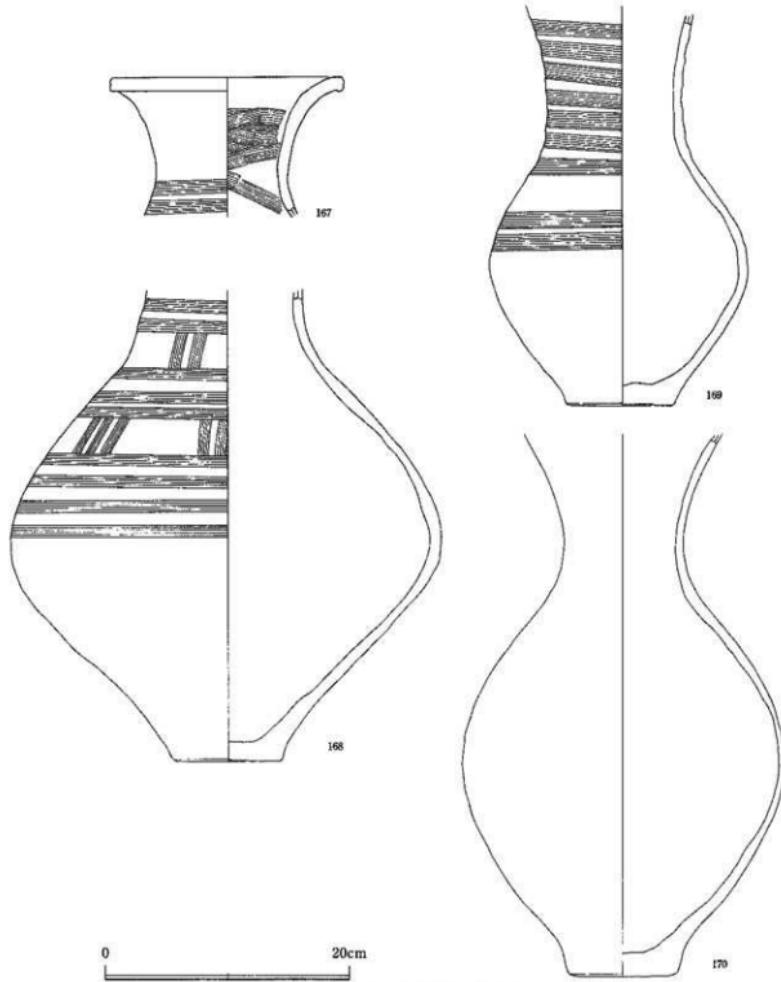


図63 19号方形周溝墓出土遺物1

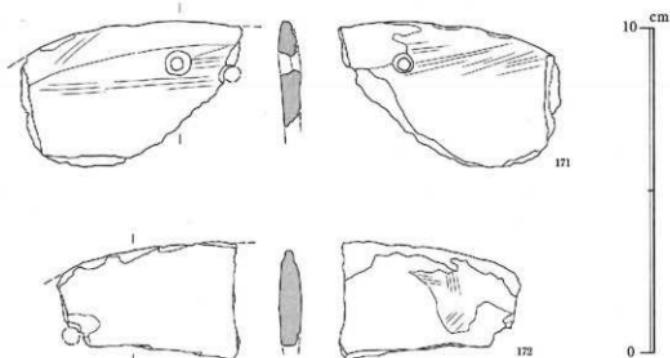


図64 19号方形周溝墓出土遺物2

側に2条の櫛描直線紋が施紋されている。外面はナデ調整、内面は横方向のハケ調整を施す。壺168は口頸部を欠く広口壺である。球形の体部は前期末の形態を残す。口頸部には2条の櫛描直線紋、体部には上3条、下4条の櫛描直線紋帯を施紋する。各施紋帯の間には縦方向の櫛描直線紋を施す。この縦方向の櫛描直線紋は、口頸部に2条1セッテで5単位、体部に3条1セッテで5単位が施紋されている。剥離のため調整不明。壺169は口縁部を欠く長頸の広口壺である。球形に近い胴部から筒状に長く伸びる頸部を持つ。体部に2条の櫛描直線紋、頸部に7条の櫛描直線紋を施す。調整不明。生駒西麓産の胎土である。壺170は無紋の広口壺である。口縁部は欠損する。縦長球体の体部からしまった頸部につながる。調整不明。

出土石器（図64-171・172） 171は北周溝から出土した石庖丁である。隅丸長方形の直線刃で約2分の1の残存し、穿孔が2ヶ所見られる。厚さ0.7cm。ホルンフェルス。172は南周溝から出土した石庖丁の未製品である。半月型に形を整えているが、表面は研磨せず、刃をつけていない。穿孔の痕跡が1ヶ所認められる。厚さ0.7cm。ホルンフェルス。

20号方形周溝墓（図65・P L 21・22） 99-1・99-3調査区、K7-6-D13-g・f3・4で検出した長方形の方形周溝墓である。検出面の標高は20.3mである。他の方形周溝墓とは周溝を共有しない単独墓と考えられ、検出した方形周溝墓の中では最大規模を測る。周溝はコ字形に掘られた北西・南西・南東周溝と北東周溝との間に2ヶ所の掘り残した陸橋部が存在する。主軸の方向はN-63°-Eである。

墳丘規模は、15.5×11.0mを測る。周溝は完周せず、2ヶ所の陸橋部を設ける。単独で掘られた北東周溝の幅4.5m、深さ0.2mを測る。コ字形に巡る周溝は北西周溝が狭く、南西周溝南側が最も広く深い。北西周溝の幅1.5m、深さ0.15m、南西周溝の幅2.0~3.0m、深さ0.5m、南東周溝の幅1.5~2.5m、深さ0.25mを測る。

周溝埋土は上下2層に分かれ、下層は墳丘の崩壊土と考えられる褐色土で前期末、中期前半の弥生土器を包含する。上層は周溝がある程度埋没した後に堆積したと考えられる黒褐色土である。

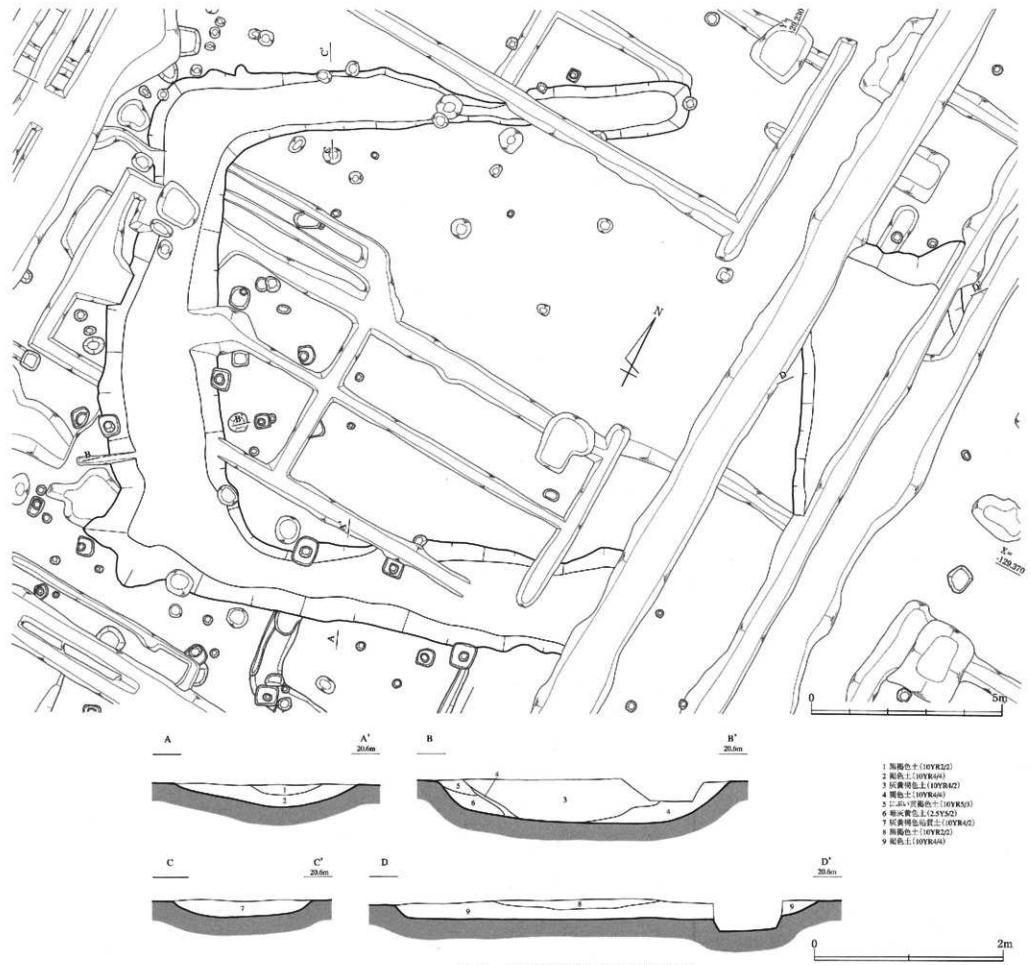


图65 20号方形周清墓平面图·断面图

この堆積層には、中期前半の弥生土器、石器、サスカイトや玢岩等の石材が含まれる。特に南西周溝南側では、周溝底から検出面までの0.5mの間に出土遺物実測図に掲載したほとんどの土器・石器・石製品が出土した。その出土状況は、出土時に原形をとどめるものではなく、多数の土器が細かな破片に碎かれ、次々投棄された様子を示す。接合資料は非常に少ない。その個体数500個体以上に上る。

出土土器（図66～73） 図示する出土土器は179・313の2点を除きすべて南西周溝上層の黒褐色土から出土したものである。壺173・174は、短く外反する口縁部を持つ広口壺である。壺175は口頸部が漏斗状に開く太頸壺である。肥厚させた口縁端部には等間隔に指頭圧痕を並べ、端部上端に工具による刻み目を施す。頸部以下には7本のヘラ描沈線紋を施す。内外面ともナデ調整を施すが、内面の一部に横方向のハケ調整が残存する。

壺176は頸部に櫛描直線紋を施す太頸壺である。壺177は長く伸びた頸部から緩やかに外反する口縁を持つ。頸部に2条の櫛描直線紋を施す。壺178は漏斗状に開く口縁部を持つ広口壺で口縁端部は肥厚させない。長く伸びた頸部に4条の櫛描直線紋を施す。壺179は南西周溝下層（墳丘崩壊土）から出土した広口壺である。調整不明。

壺180～185は口縁端部下端に工具による刻目紋を施す広口壺である。182は口頸部に4条の櫛描直線紋を施す。185は口縁部内面に竹管紋を並べる。壺186は口縁端部外面に櫛描直線紋を施す広口壺である。外面縦方向のハケ調整の後、櫛描直線紋を3条以上施す。壺187・188は口縁部を僅かに肥厚させるが、端部外面に施紋しない広口壺である。口頸部には櫛描直線紋を施す。188は、内面及び口縁部内外面ともナデ調整、外面に縦方向のハケ調整を施す。壺189・190・192・193は無紋の広口壺である。壺191は口縁部を大きく外反させ粘土を外面に貼り付け、口縁部を厚く仕上げる。頸部には3条の櫛描直線紋を施す。内面及び口縁部はナデ調整、頸部外面は縦方向のハケ調整を施す。

壺194～201は口縁端部に粘土を貼り足し肥厚させて垂直に大きな面を作り出す広口壺である。194は無紋。195は口縁部下端に刻目紋を施し、その上位に櫛描直線紋を施す。196は口縁部下端に刻目紋を施し、その上位に波状紋を施す。197は大型の広口壺で、口径41.8cmを測る。口縁端部は肥厚させて垂下し、下端部を指で摘んで刻目紋を施す。198は肥厚させた口縁部上下端に刻目紋を施す。199は口縁部下端に刻目紋を施す。口縁部内面は横方向のハケ調整、外面は縦方向のヘラミガキ。200は口縁部下端を浅く指で摘んで刻目紋を施し、その上位に波状紋を施す。口縁部内面は横方向のハケ調整。201は口縁部下端に刻目紋、その上位に直線紋を施す。

壺202～204は簾状紋を施す広口壺である。202は口縁端部の断面が三角形を呈し、端部に簾状紋、口頸部に櫛描直線紋を施す。203は大型の広口壺の口縁端部で、肥厚させた口縁端部に簾状紋を施す。204は漏斗状に開く口頸部を持つ広口壺で、口縁端部外面に櫛描直線紋、口縁部内面に、簾状紋を施す。この簾状紋の施紋技術は稚拙で、部分的に波状紋となっている。

壺205～207は細頸の広口壺である。205は頸部にヘラ描沈線紋が2本、206・207は櫛描直線紋

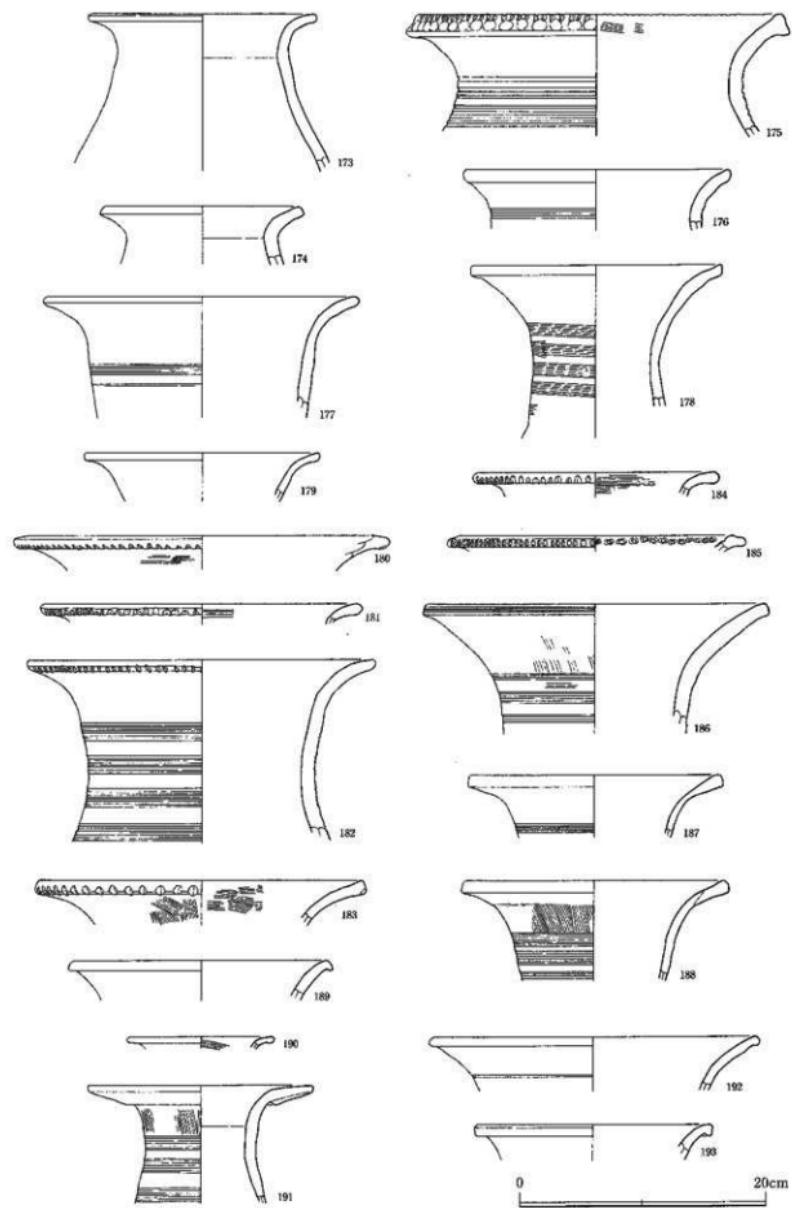


图66 20号方形周溝墓出土遗物1

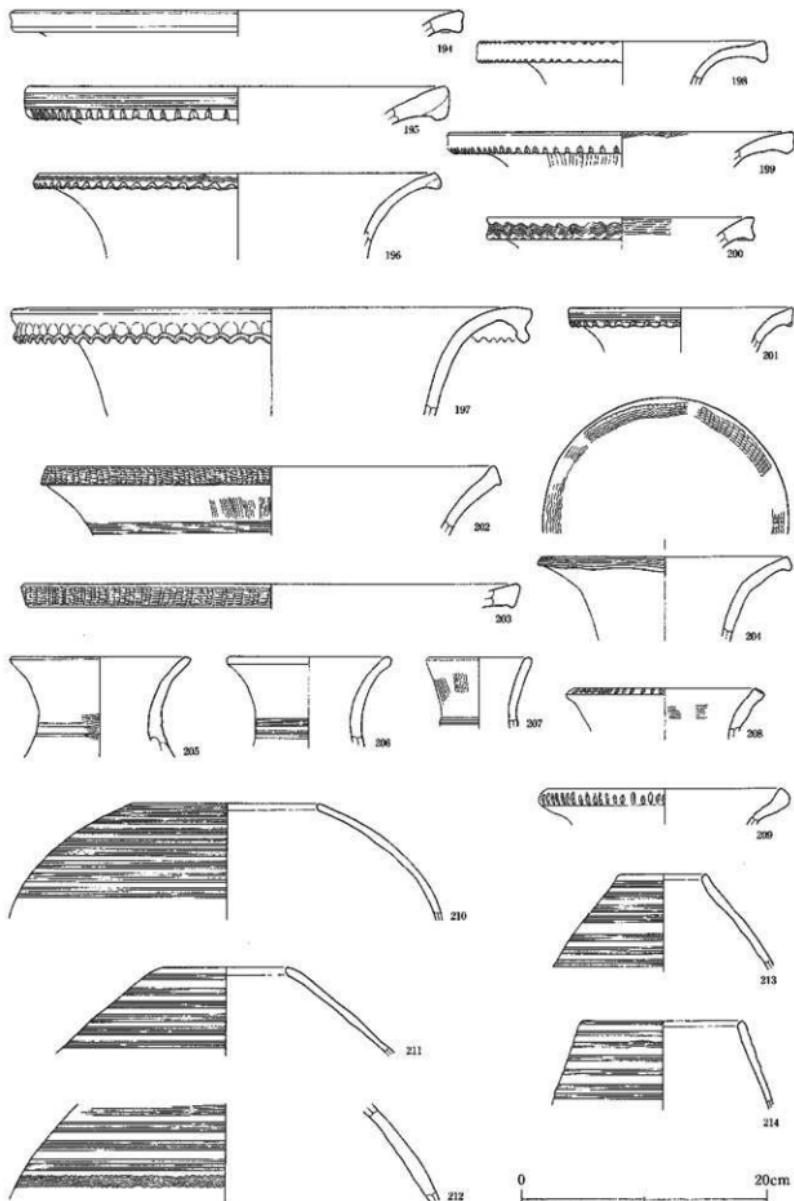


図67 20号方形周溝墓出土遺物2

が施される。壺208・209は口縁端部に工具による刻目紋を施す小型の広口壺である。

壺210～214は有紋の無頭壺である。口縁部が内弯する210・211、口縁部が直立する213・214がある。口縁部直下から櫛描直線紋が数条以上施される。212は西コーナー部から出土し、施紋帶の最下段は波状紋である。

壺215～221は長頸の広口壺の体部から口頸部にかけての破片である。215は長く伸びた頸部の上半部には施紋されず中位以下に櫛描直線紋と2条の波状紋を施す。218は2条の櫛描直線紋の間に鋸歯紋を入れる。216は体部最大径のやや上位から8条以上の櫛描直線紋を並べる。

壺221は無紋の広口壺である。体部外面は縦方向のハケ調整、内面は底部にユビオサエが見られる。壺222はヘラ描沈線紋と列点紋を多用した体部片である。縦長球体の体部から口頸部は細く締まるが、口縁部の形状は不明である。口頸部には多条化したヘラ描沈線紋を2条入れ、その

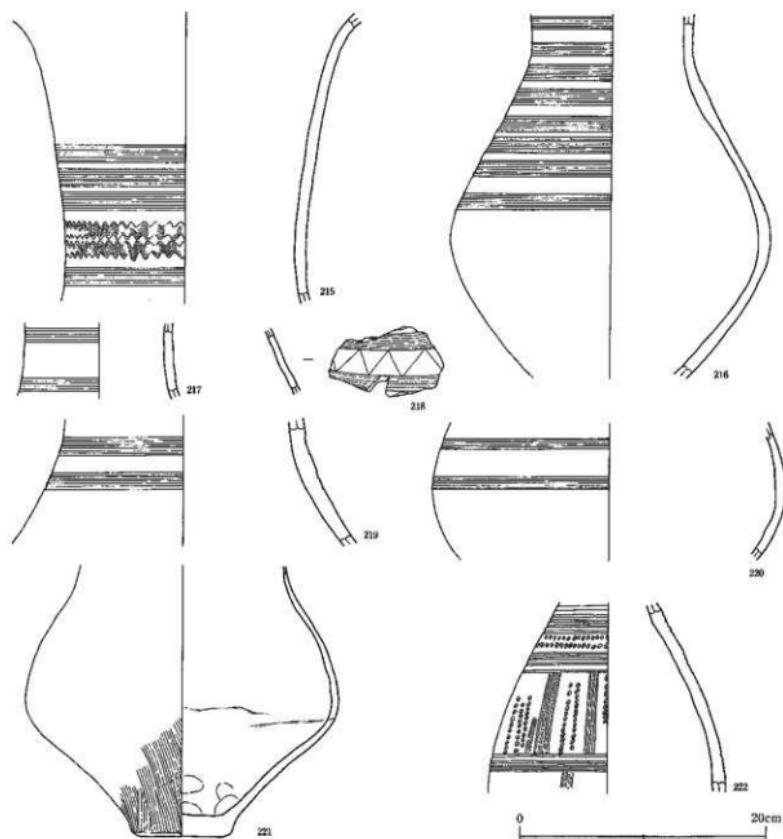


図68 20号方形周溝墓出土遺物3

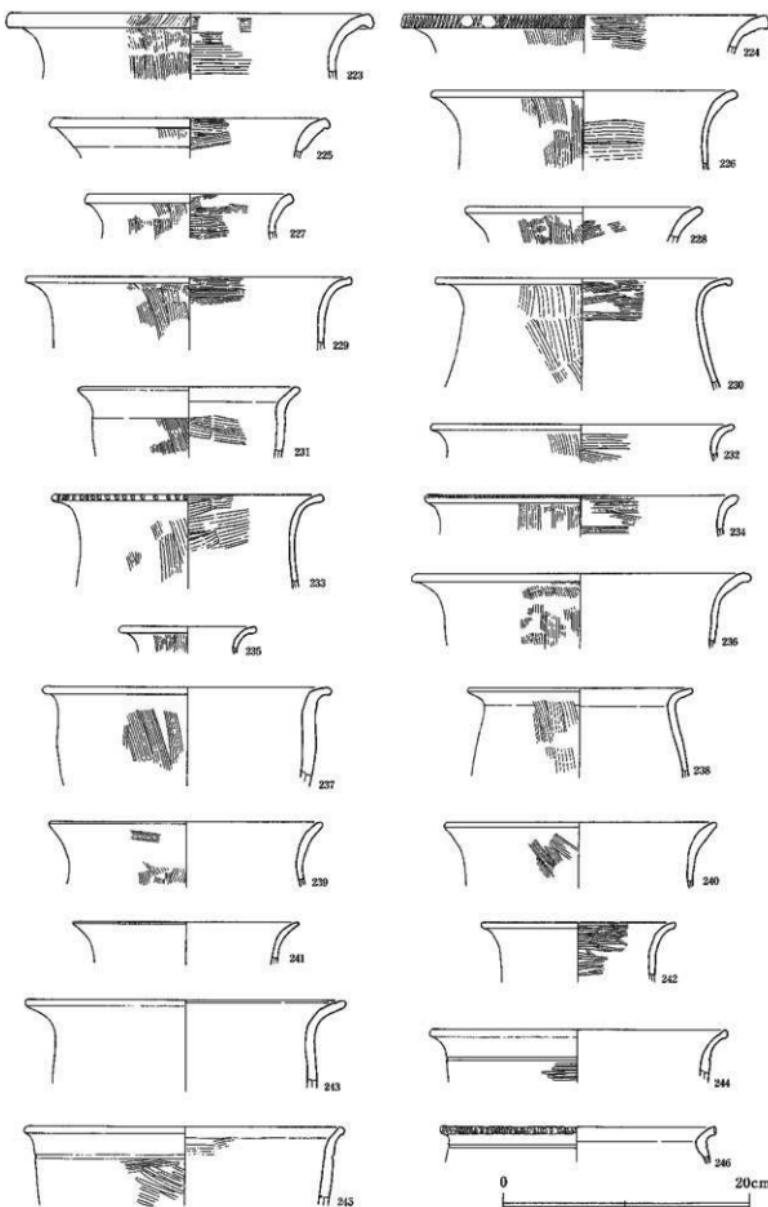


図69 20号方形周溝墓出土遺物4

間に列点紋を上下2列横方向に並べる。体部中位に横方向に4条で1単位のヘラ描沈線紋を入れ、頸部の沈線紋との間にできた空間に縦方向の3あるいは4条で1単位のヘラ描沈線紋を入れ、沈線紋間に2～3列の縦方向の列点紋を施紋する。体部下位にも縦方向のヘラ描沈線紋が見られ、紋様帯が続くものと考えられる。

図69-223～246・図70-247～250は甕の口縁部の破片である。甕223～234は口縁部内面に横方向のハケ調整、体部外面に縦方向のハケ調整を施す。223・224は口縁端部を肥厚させ、面を持たせる。その端部に右傾する刻目を細かく密に加える。224は刻目を加えた後に、一对の指頭圧痕を紋様として数ヶ所に押捺する。225・226は外反する口縁部に粘土を付加して厚くする。233・

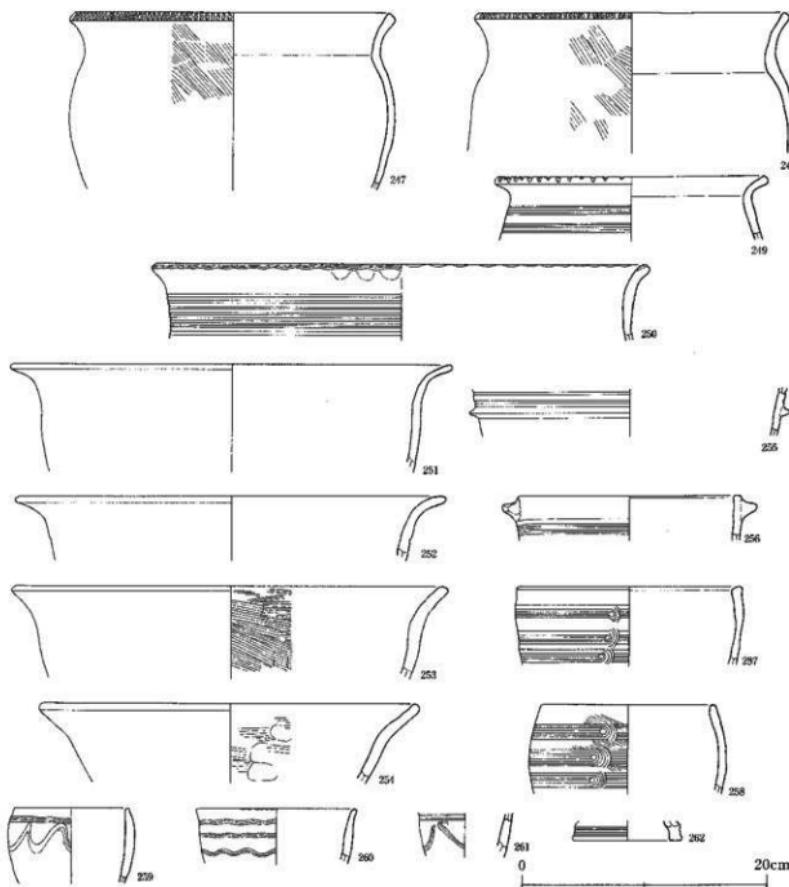


図70 20号方形周溝甕出土遺物5

234は口縁端部に工具による刻目紋を施す。

235～240は体部外面に縦方向のハケ調整を施す。内面は剥離により不明なものが多い。235は小型の甕である。236は225・226と同様の技法で口縁部を作る。237は厚い体部から口縁部逆L字状に折り曲げる。238は体部が口径と同じ位に膨らみ、口縁部は外反する。239～241は緩やかに外反する口縁部を持つ。

甕242～246は体部の内面或いは外面にヘラミガキを施す。242は体部内面と口縁部内面に横方向のヘラミガキを施す。体部外面にもヘラミガキの痕跡が残る。244～246は体部と口縁部の境にヘラ抹沈線を1条入れる。245・245は沈線以下の体部にはヘラミガキ、口縁部外面はヨコナデ調整、内面にハケ調整が見られる。246は短く外反する口縁の端部に刻目紋を施す。

甕247・248は球形の体部から外反する口縁部を持つ。口縁端部は斜め外側に面を持たせ、刻目紋を施す。口縁部外面から体部は斜め方向のハケ調整、内面はナデ調整である。甕249は短く外反する口縁の端部には工具による刻目紋を施す。体部には2条の描直線紋を施す。体部外面と

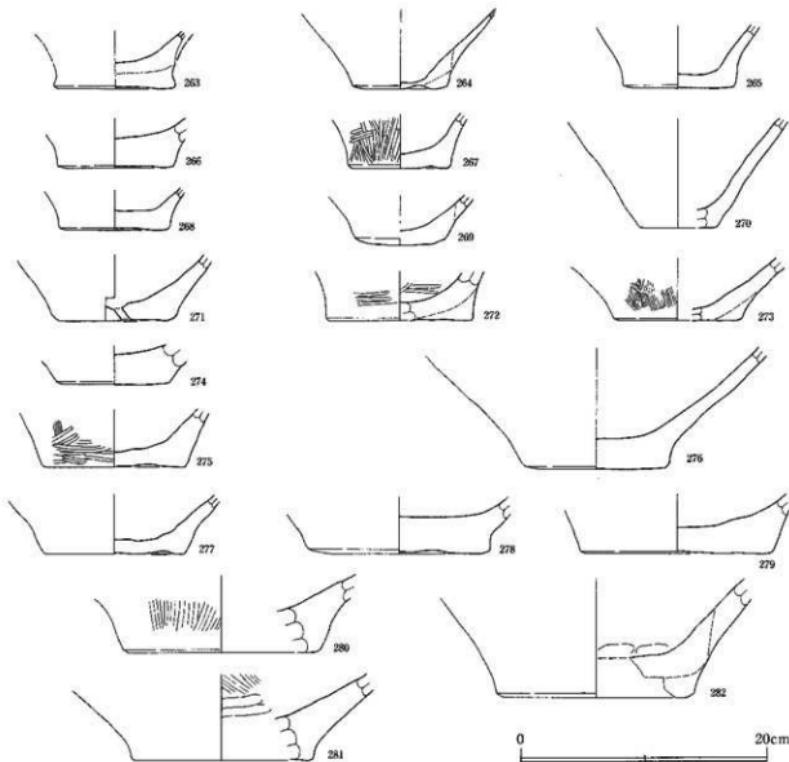


図71 20号方形周溝墓出土遺物6

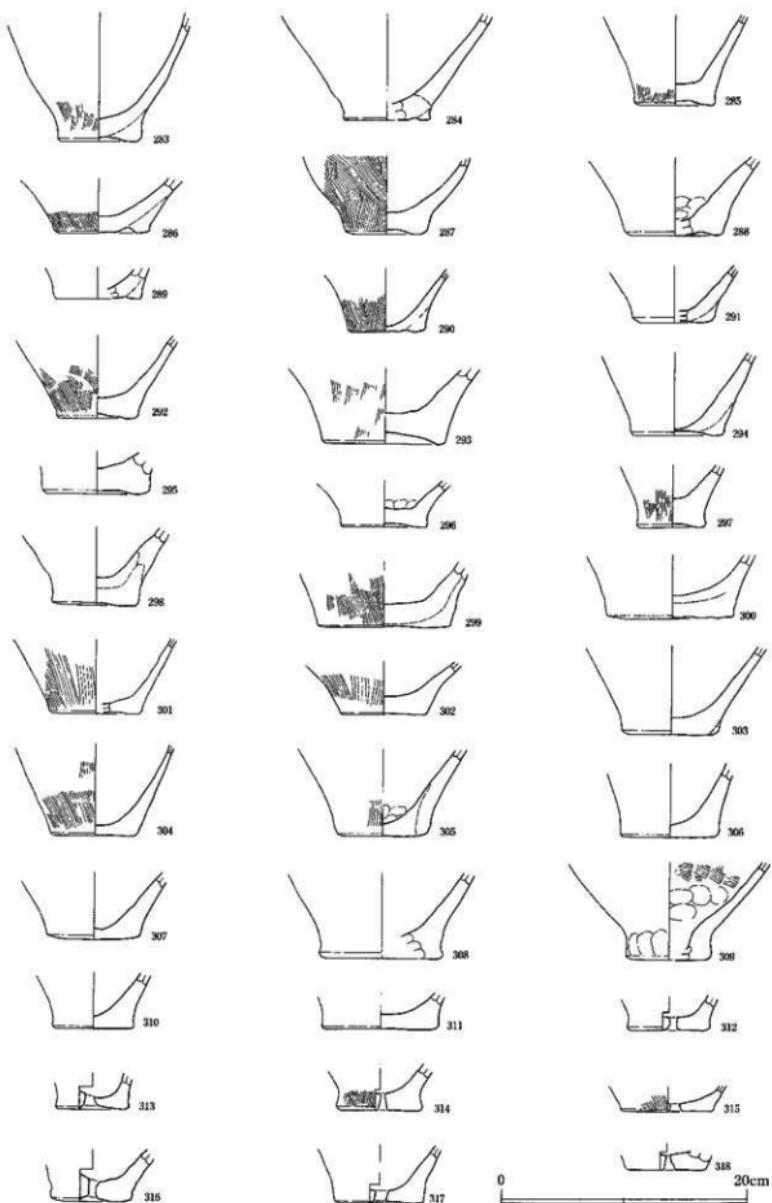


図72 20号方形周溝墓出土遺物7

口縁部はナデ調整。甕250は口縁部の上端を押圧によって波打たせたものである。体部外面には多角化したヘラ描沈線紋を施す。

図70-251~262は鉢である。鉢251~254は口縁が外反する形式である。253・254の内面に横向向のハケ調整が見られる。

鉢255~261は直口の口縁形式と考えられる。255は2本のヘラ描沈線紋の下位に突帯を貼り付ける。内外面ともナデ調整。256は直口の口縁の上端部に面を持たせる。瘤状把手を口縁直下に貼り付け、その下に櫛描直線紋を施す。257・258の体部には3条の櫛描直線紋が施紋され、縦に扇形紋を並べて擬似流水紋としている。259~260は小型の鉢である。259の体部には口縁下に櫛描直線紋を1条、その下に振幅の大きい波状紋を施す。260は体部に3条の櫛描直線紋と波状紋を施紋する。261は口縁端部を欠損するが259と同様の紋様構成である。

262は小型の鉢の脚部と考えられる。端部は矩形に仕上げ、側面に櫛描直線紋を施す。内外面ともナデ調整で、破面は剥離面である。

図71-263~282は壺の底部と考えられる。267・272・275はヘラミガキ、273・280はハケ調整が見られる。271は焼成後に外から中へ、斜めに穿孔されている。

底部の形状には、265の様に全くの平底のもの、268の様に中央部が窪む上底状のもの、264の様にドーナツ状に窪むものの3者がある。

また断面観察から底部の製作技法にも種類があり、263では体部から一体として形成した底に厚く粘土の円盤を貼り付け、底部としている。272・273では丸く作った体部の延長である底に断面三角形の粘土の輪を付加して底部を形成する。264・282の様に小皿状に作った底部の下に、円盤或いはドーナツ状に伸ばした粘土を貼り付けて底部の厚さを確保する。体部は小皿状のものから立ち上げる。

図72-283~318は壺の底部と考えられる。表面が剥離せず調整技法が観察できる個体のはほとんどは、外面では下から上へのハケ調整、内面では底にユビオサエとらせん状に下から斜め上に向かってハケ調整が観察できる。313~318は底部の中心に穿孔されている。313は南西周溝中央部下層から出土した。

底部の形態は、平坦なもの・中央が窪むもの・ドーナツ状に窪むものの3者がある。製作技法も先述したものと同様であるが、数量的には、断面三角形の粘土の輪を丸底に貼り付けて、平底に作ったものが多く見られる。

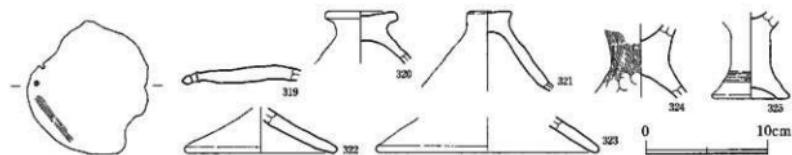


図73 20号方形周溝墓出土遺物8

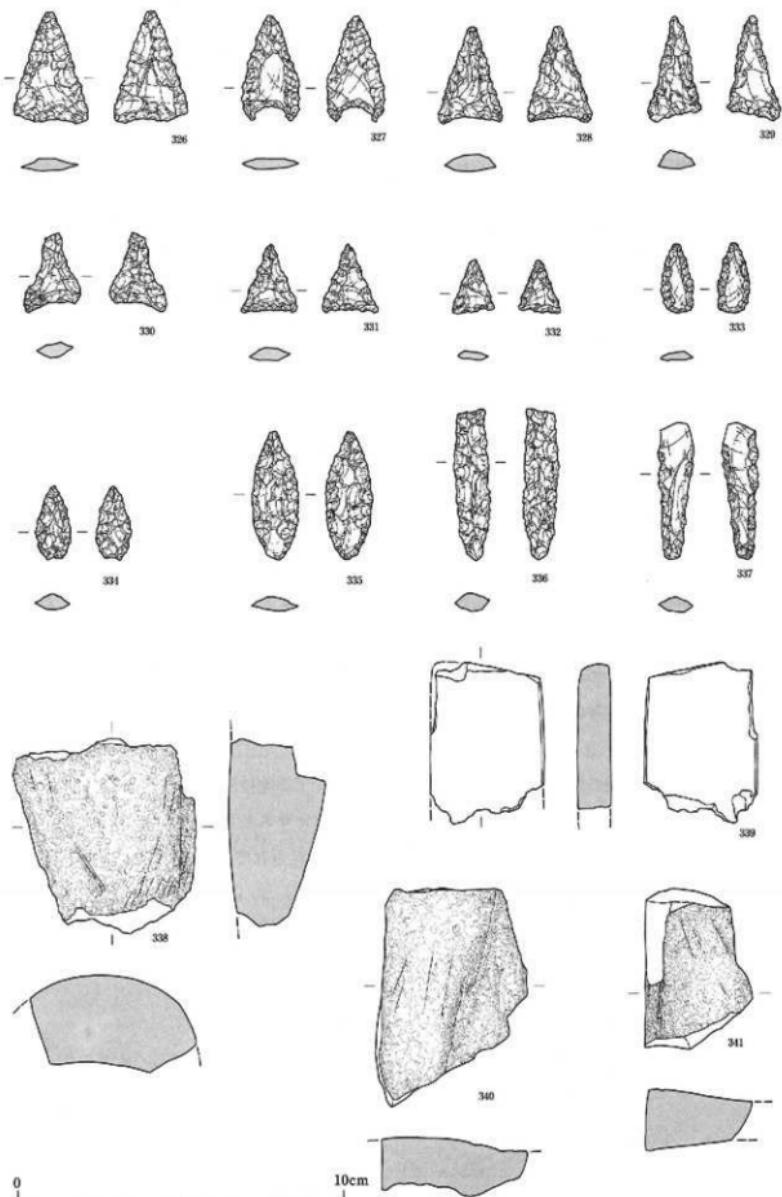


图74 20号方形周清墓出土遗物9

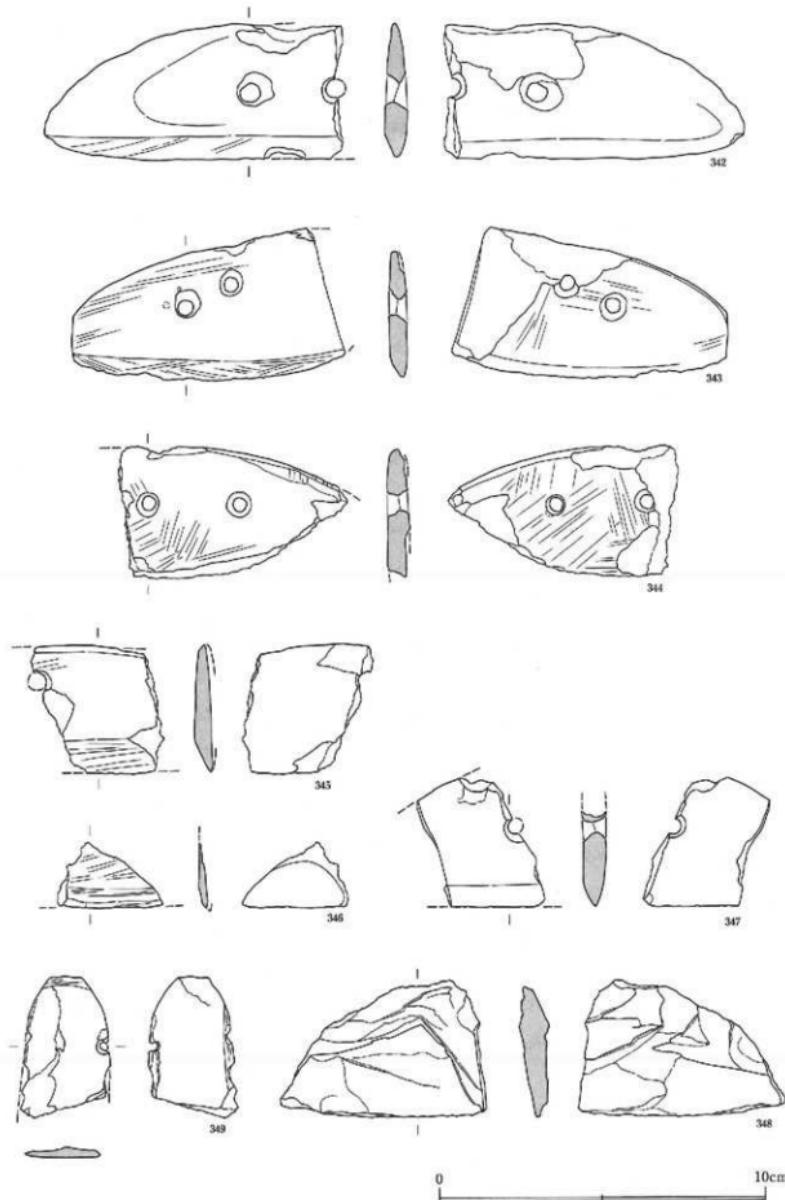


图75 20号方形周溝墓出土遗物10

図73-319～323は蓋である。壺蓋319は円盤状を呈し、2個一対の穿孔が見られる。上面に板ナデ調整、ハケ調整が残る。穿孔は下から上方向である。壺蓋320・321は深い笠形を呈する。壺蓋322・323は浅い笠形を呈する。何れの蓋にも施紋は見られない。

高杯324は太い中実の脚柱部で、外面はハケ調整の後、脚部側にユビオサエを行なう。杯部内面はナデ調整を施す。高杯325は中実の脚柱部を持ち、裾部との境目に櫛描直線紋を1条施紋する。脚裾部は僅かに広がり、内面を窪ませる。外面ナデ調整。

出土石器（図74・75） 図示した石器は、石庖丁344が北西周溝上層から出土した以外はすべて南西周溝上層の黒褐色土から出土したものである。

326～330は凹基式石鎌である。326の長さ3.40cm。327は抉りが深く、長さ3.25cm。328は僅かに基部を抉る。長さ2.93cm。329は3.20cm、330は2.39cmである。

331～332は平基式石鎌で、正三角形を呈し、331の長さ2.08cm、332は1.62cmを測る。

333～335は円基式石鎌である。333の長さ2.13cm、334は2.26cm、335は3.92cmを測る。

336・337は石錐である。両者とも刃部に使用痕が認められる。336の長さ4.62cm、337は4.14cmを測る。

338は太型蛤刃石斧の破片である。二次使用の痕跡を認めない。ホルンフェルス。339は扁平片刃石斧で、刃部側を欠損する。流紋岩。340・341は砥石である。図示した面が使用されている。340は片麻状黒雲母花崗岩、341は砂岩。

342～347は石庖丁である。部分的に欠損し、完形を保つものはない。342は直線刃半月形で、厚さ0.7cmを測る。玄武岩質凝灰岩質片岩。343は外湾刀椿円形で2孔の紐通し孔の間隔は狭い。厚さ0.6cm。泥質ホルンフェルス。344は外湾刀杏仁様形で、厚さ0.7cmを測る。ホルンフェルス。345は直線刃で裏面側は剥離している。ホルンフェルス。346は直線刃の一部の破片で、裏面も剥離している。ホルンフェルス。347は直線刃半月形で、紐通し孔が1ヶ所残る。厚さ0.7cm。輝石安山岩。

348は石庖丁未製品である。直線刃半月形に平面形態を整え、研磨・穿孔の直前の段階まで作成したものである。厚さ0.9cmを測る。ホルンフェルス。

349は不明石製品である。正面図上位と、左側に片刃の刃を研ぎだす。下半を欠損する。右側に径0.3cmの穿孔を施す。厚さ0.3cm。ホルンフェルス。

30号方形周溝墓（図76・P L23） 99-3調査区、K7-6-D13-i4で検出した方形周溝墓である。検出面の標高は20.3mである。東周溝と西周溝を検出したが、南北の各周溝は検出できなかった。主軸の方向はN-83°-Eである。

墳丘規模は、7.0m×5.0m以上を測る。周溝の幅1.5～2.0m、深さ約0.3mを測る。周溝埋土は上下2層に分かれるが、何れの層からも弥生時代中期の遺物が出土した。今回の調査範囲では最も南側で検出した方形周溝墓である。

出土遺物（図77-350～360） 350～356は東周溝から出土した土器である。壺350は、漏斗状

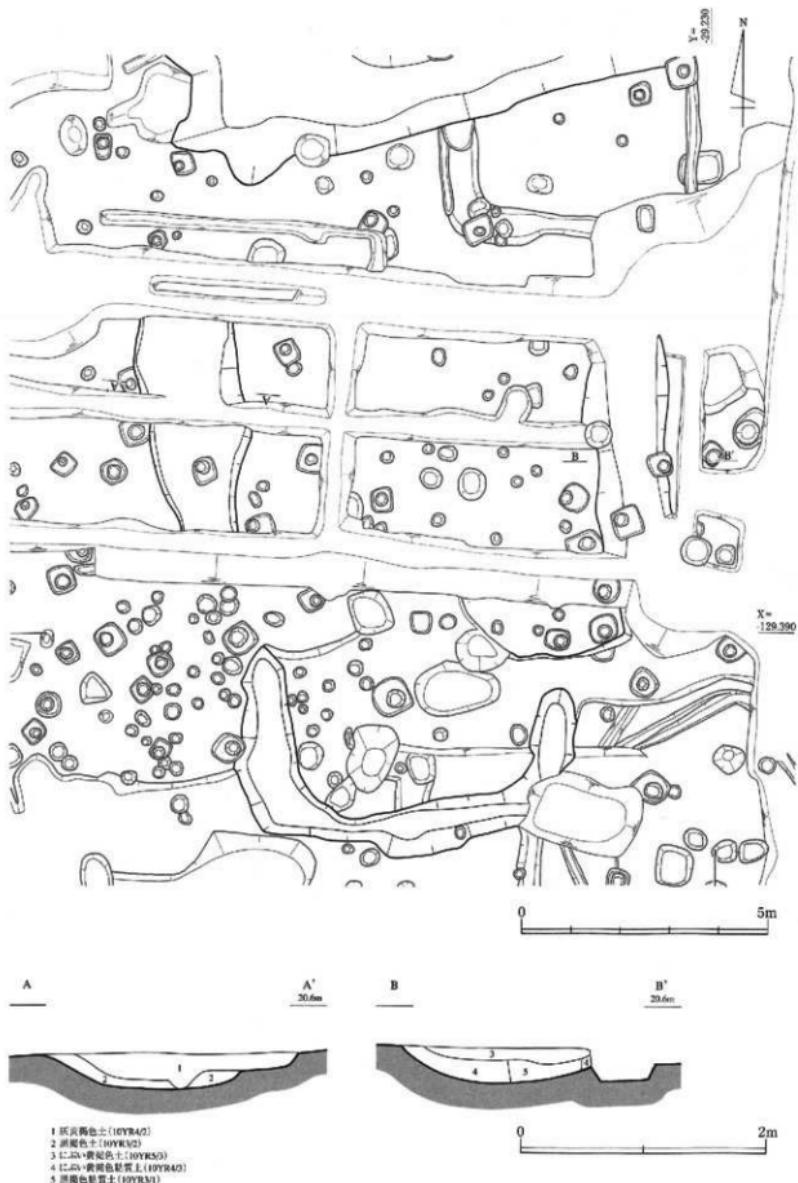


図76 30号方形周溝墓平面図・断面図

に開いた口縁端部は肥厚させ、外側に垂直な面を広く持たせる広口壺である。口縁端面に櫛指直線紋を施紋した後、口縁部上端には刺突紋を横に並べ、下端には工具による刻目紋を施す。口頭部には1条の櫛指直線紋が施されている。壺351は、口縁部を短く屈曲させる無紋の広口壺である。壺352は口縁を短く屈曲させ、外面は縱方向のハケ調整、内面は横方向のハケ調整を施す。壺353は太い頸部から短く外反させる口縁部を持つ。壺354・355は底部片で、外面にハケ調整が見られる。356は台付鉢の脚部と考えられる。

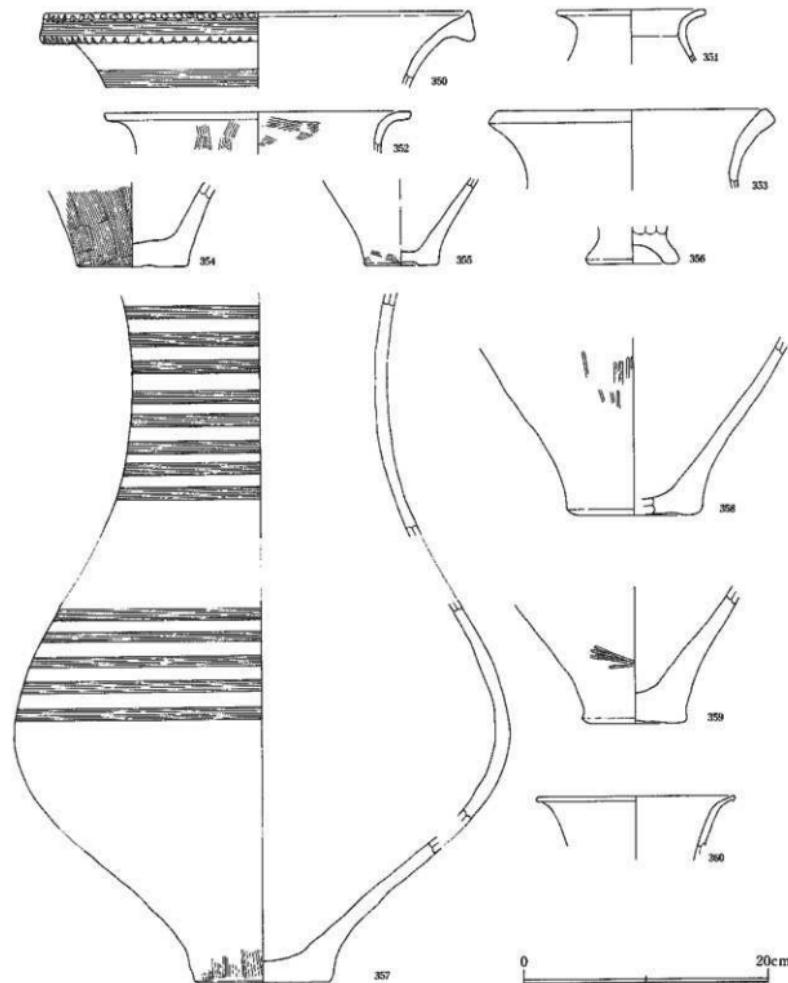


図77 30号方形周溝墓出土遺物

357～360は西周溝から出土した土器である。壺357は底部・体部・頸部の破片で直接は接合できないが、胎土等から同一個体と考えられる。頸部は長頸化しているが、太い。8条の櫛搔直線紋の下には紋様の空白部が作られる。体部にも5条以上の櫛搔直線紋が施紋される。底部に僅かにハケ調整が残る。壺358・359の底部片にはヘラミガキが観察できる。壺360は口縁部が短く外反する広口壺の口縁である。

土器棺墓・土坑墓 30基の方形周溝墓は墳丘部をすべて削平されていたため、埋葬施設は一切検出できなかった。また周溝内においても、いくつかの埋葬施設の可能性がある土坑状の掘り込みがあったが、断定するに至っていない。弥生時代中期の墓は、方形周溝墓以外の場所から2種類2基の埋葬施設を検出した。14号方形周溝墓に接するように土器棺墓が検出され、20号方形周溝墓の西40mの地点で土坑墓が単独で検出された。

SK1550（図25・78・P L24） 98-3調査区、K7-6-C12-F8で検出した土器棺墓である。14号方形周溝墓の南西周溝南隅外側に接して検出された。搅乱が著しく、14号方形周溝墓の周溝との前後関係は不明確であるが、土器棺墓が周溝の肩を破壊していると看取される。

土器棺を納めた土坑の形状は楕円形を呈し、1.1×0.7m、深さ0.5mを測る。検出面の標高は20.7mである。棺として使用された土器は土坑の南東隅に寄せて60度の角度で立てられている。土器棺の上部は搅乱を受け、蓋等の閉塞施設は検出できなかった。

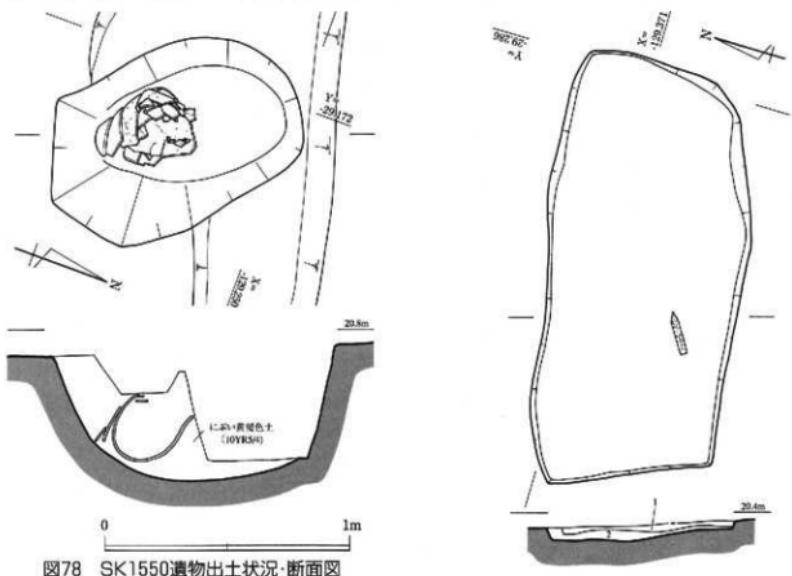


図78 SK1550遺物出土状況・断面図

図79 SK2015遺物出土状況・断面図



土器棺を埋めている掘形の土は均質な一層で、棺内への流入土も掘形と同じである。土器棺の縁には他の土器片が囲むように置かれていた。

出土遺物（図80-361～364）

壺361は掘形埋土から出土した。口縁は外反した後、内傾して立ち上がる有段口縁の広口壺で、受け口部は波状紋で飾る。下段には2条の柳描直線紋が見られる。壺362は土器棺に使われていた大型の広口壺である。頸部以上の口縁部を欠損し、体部の下部に焼成後の穿孔が1ヶ所認められる。頸部と体部の境に柳描直線紋、それ以下には複帯構成の波状紋が施されている。外面の調整については、底部は縦方向のヘラミガキ、体部下半は横方向のヘラミガキ、体部上半は横方向のナデ調整の後施紋している。内面はユビオサエとナデ調整が観察できる。壺363・364は土器棺の底部を囲むように置かれていた土器である。363は広口壺の口縁で、上下に拡張した端部の上下に工具による刻目紋を施す。外面縦方向のハケ調整、内面横方向のハケ調整。364は363の口縁部と同一個体と考えられる体部上半部の破片で

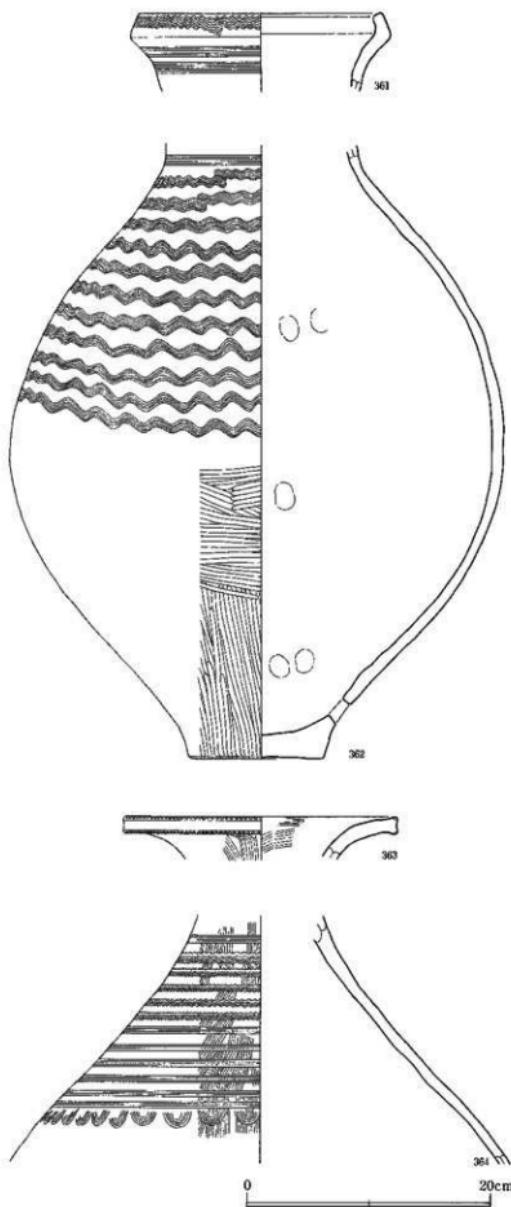


図80 SK1550出土遺物

ある。胴部最大径から直線的に細く絞られた頭部に至る外形は特徴的である。外面は縦方向のハケ調整の後、施紋。内面はナデ調整。紋様は上位から櫛描直線紋1条・粗い波状紋1条・細かい波状紋4条・櫛描直線紋6条とその下にU字形の櫛描紋を横方向に並べる。

SK2015(図25・79・PL24) 99-1調査区、K7-6-D13-h9で検出した土坑墓である。この土坑墓は、調査区南東側の方形周溝墓群から離れた、周囲に他の埋葬施設等弥生時代中期の遺構がほとんど検出されない位置に、単独で検出された。

土坑の平面形は、略長方形を呈し、 $1.7 \times 0.8\text{m}$ 、深さ 0.06m を測り、検出面の標高は 20.4m である。遺構はかなりの削平を受けており、検出時の遺構の深さは $4 \sim 6\text{cm}$ の残存であったため、平面精査と断面観察では木棺痕跡を検出できなかった。ここでは土坑墓と考えておく。

土坑内から打製石剣、石鎌が各1点及び少量の中前期前半の土器が出土した。遺物の出土状況で原位置が確認できたのは石剣である。石剣は、土坑の中軸からやや南に偏った位置で、土坑底から 4cm 浮いた状態で、尖頭部を東に向かって、土坑の長軸に石剣長軸を合わせるように、水平に置かれていた。副葬品である可能性が高いと考える。

出土遺物(図81-365・366) 365は長さ 18.1cm 、幅 3.0cm 、厚さ 1.15cm を測る打製石剣である。A面尖頭部右側は細かな押圧剥離を施し、刃部を鋸歯状に作る。基部に近い両側面は刃潰し加工を施す。366は土坑埋土から出土した凸基有茎式石鎌である。尖頭部は折損している。長さ 4.5cm 、幅 1.9cm 、厚さ 0.5cm を測る。

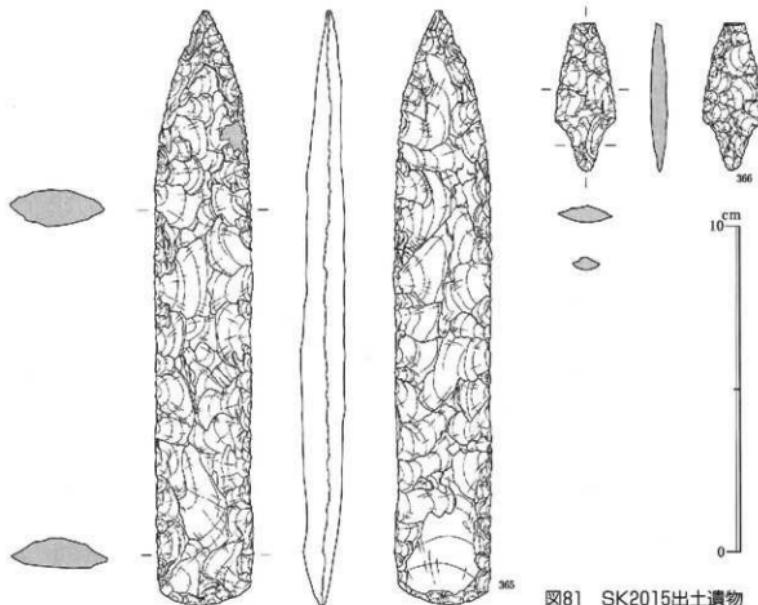


図81 SK2015出土遺物

豎穴住居跡等（図84） 方形周溝墓群が検出された墓域とともに住居域の一角を検出することができた。豎穴住居跡と柱穴群は、18号方形周溝墓の西側で集中して検出され、この位置から西側に広がり、住居域の中心が調査区外（現府営住宅）に存在するものと考えられる。豎穴住居跡の番号は遺構の時期と関係なく検出順に与えたため、弥生時代の豎穴住居跡は2基検出したにとどまるが、番号は9・10号を付して報告する。

9号豎穴住居跡（図83・P L25） 99-1調査区、K7-6-D13-d9で検出した円形の豎穴住居跡である。検出面の標高は北側で20.2m、南側で20.3mを測る。

豎穴住居跡の壁面は、後世の削平により失われていて、壁溝の痕跡が残る程度である。壁溝は、南半分の円周が残存し、北側は失われている。壁溝は円形を呈し、幅0.1m、深さ0.05mを測る。残された壁溝から、径約4.6mの豎穴住居跡が復元できる。円周の中心近くに0.5×0.45m、深さ0.3mの楕円形を呈する土坑があり、埋土には多くの炭が含まれていたことから、この豎穴住居跡の炉跡と考えることができる。上屋構造を支えていた主柱穴は、重複する弥生時代のピットが多いため、豎穴住居跡に帰属するピットを峻別することができなかった。

出土遺物（図82-367） 売367は豎穴住居跡の炉跡と考えられるP3168から出土した。口縁は如意形に屈曲し、体部径は口径を上回らない。口縁部は横方向のナデ調整、体部内外面ともナデ調整を施す。

10号豎穴住居跡（図83・P L25） 99-1調査区、K7-6-D13-e9で検出した円形の豎穴住居跡である。検出面の標高は北側で20.2m、南側で20.3mを測る。

豎穴住居跡の壁面は、9号豎穴住居跡と同様、後世の削平を受け、壁溝が残るだけである。検出できた壁溝から直径約5.5mの円形豎穴住居跡を復元することができるが、3分の1が調査区外に伸びる。壁溝の幅0.1m、深さ0.01mを測る。円周のはば中央部に1.0×0.75m、深さ0.3mの楕円形を呈する土坑があり、埋土は炭混じりの黒褐色粘質土であることからこの豎穴住居跡の炉跡と考えられる。炉跡からは、櫛描直線紋の見える土器片、太型蛤刃石斧の破片等が出土した。主柱穴は、重複する同時期のピットが多いため、峻別することができなかつた。また、9号豎穴住居跡、10号豎穴住居跡は、壁溝に重複関係があり、

10号豎穴住居跡が9号豎穴住居跡より後に作られたものである。

出土遺物（図82-368） 368は炉跡と考えられるSK3207から出土した太型蛤刃石斧の身部の破片である。頁岩。

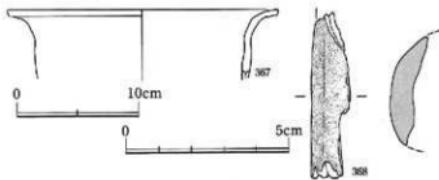


図82 9・10号豎穴住居跡出土遺物

その他の遺構（図84・P L25） 弥生時代の集落に関わる遺構は、18号方形周溝墓の東側、99-1調査区北西端を中心とした場所で、豎穴住居跡とともに、多数のピット、土坑等が集中して検出された。中期前半の遺物が出土した遺構を図84に示した。それ以外の遺構群についても、図化しえない遺物の小片が出土しているが、そのほとんどが弥生土器と考えられる。図示した区域

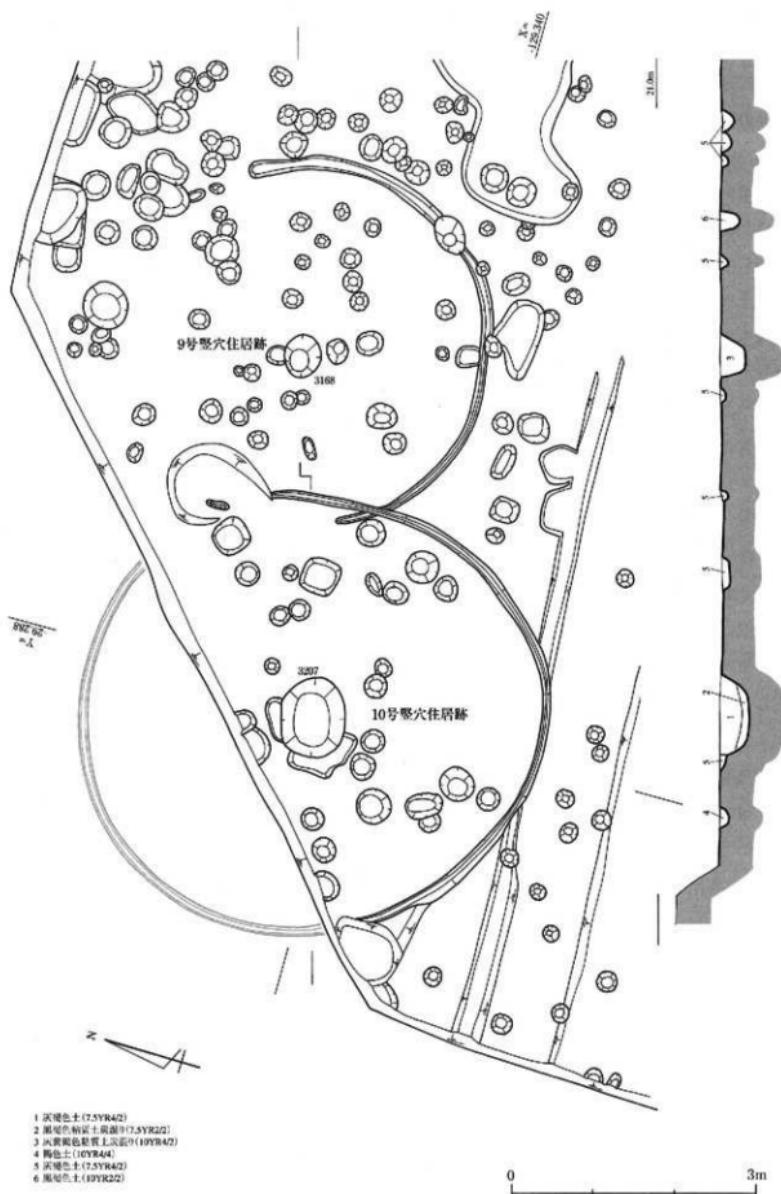


図83 9・10号竪穴住居跡平面図・断面図

の遺構は、前期末から中期前半にかけてのものがほとんど占めると考えられる。また、それ以外の地域では、遺構を検出する頻度が少くなり、散在する程度となる。

この区域では、円形の竪穴住居跡が2基検出されたが、周辺の遺構を詳しく見れば、炭・灰混じりの埋土が検出される土坑（SK3174・3055・2947・3692・2326）が散在し、この土坑を竪穴住居跡の炉跡と考えると、壁溝まで削平された竪穴住居跡が数基以上あったと考えることができる。

また、千以上を数えるピットは、土坑・溝等とともに掘立柱建物跡等の痕跡と考えられ、前期末から中期前半にかけての集落域が、この地区を東端として調査区外に広がっていたと考えることができる。

出土土器（図85） 壺369～372はSK3055から出土した。炭混じりの埋土を検出した方形の土坑で、炉跡と考えられる。0.6×0.6m、深さ0.3m。372はSK3692から出土した底部穿孔土器である。炭混じりの埋土を検出した長方形の土坑で炉跡と考えられる。0.6×0.7m、深さ0.3m。何れも竪穴住居跡の痕跡と考えられる。

壺373はSK2325から出土した。0.4×1.0mの土坑。外反する口縁部と体部外面にはユビオサエとハケ調整が見られる。壺374はSK2745から出土した。0.5×1.0mの土坑。漏斗状に開く口縁端部は肥厚させ、面を作る。壺375はP3109から、壺376はP2497から出土した底部片である。両ピットの径0.25m、深さ0.3mを測る。壺377はSK2820から出土した底部から体部にかけての破片である。調整不明。0.8×1.5mの土坑。壺378はSK3017から出土した、体部上半以上を欠く縦長球形の壺である。壺379はSD5478から出土した。口頸部以上を欠くが、体部上半には、3本1組の櫛描直線紋を3条、その間に刺突紋を横方向に3段・2段並べる。底部から体部にかけて板ナデ調整の後ヘラミガキを施す。380・381は底部穿孔の壺である。380はP2809、381はSD5017から出土した。382～384はSK5165から出土した。384は広口壺の口縁部である。

385・386はSD3743から出土した。この遺構は99-2調査区で検出され、遺構面の標高は19.2mを測る。弥生時代の遺構が多く検出される99-1・3調査区と比べて1m以上上がった段丘崖下のこの地区にも、同時期の遺構が広がることが判明した。この遺構から図87-397の石錐未製品も出土した。長さ5.0cm、幅1.4cm、厚さ0.5cm。

出土石器（図86・87） 387はSK3552から出土した太型蛤刃石斧の未製品である。表面は敲打整形されており、研磨作業に入る以前に折損し廃棄されたと考えられる。幅9.8cm、厚さ6.7cmを測り、二次的に火を受けている。玢岩。0.6×0.8m、深さ0.4mの土坑。388はP1597から出土した太型蛤刃石斧の斧頭側の破片である。厚さ5.8cm。玢岩。389はSK3237から出土した砥石である。表・裏の両面を使用している。玢岩。

390～396は石庖丁である。390はSK2531から出土した。刃部はすべて欠損する。背部側は、擦切り技法を用いて直線的に切断されている。厚さ0.7cm。ホルンフェルス。391はSK3



図84 弥生時代中期遺構平面図

124から出土した。背部側は僅かに弧を描く。厚さ0.6cm。玄武岩質凝灰岩質片岩。392は99-2区のP3734から出土した。直線刃半月形で約2分の1が残存する。厚さ0.7cm。泥質片岩。394はSK5411から出土した。394は直線刃半月形で中心から偏在して縦通し孔を2ヶ所開ける。表裏面ともに斜め方向の擦痕が見られる。幅4.8cm。流紋岩。最大幅2.0m、深さ0.1mを測る不定形土坑。同じ土坑から399の平基式石鏡も出土した。395はP2475から出土した。端部は、背面側の一部が残存するだけである。厚さ0.5cm。ホルンフェルス。396はSK4018から出土した。直線刃半月形の刃部端と考えられる。ホルンフェルス。

398はSK3583から出土した平基式石鏡の未製品である。長さ1.87cm、幅1.41cm、厚さ0.42cmを測る。0.7×2m、深さ0.2mの長方形土坑。

包含層出土遺物（図88～96） 99-1調査区北側から99-4調査区では、弥生時代から古墳時代にかけての包含層が堆積する。弥生時代の単純包含層は検出できなかったが、この包含層から弥生時代中期の遺物が多数出土し、また、弥生時代以外の遺構埋土からも弥生時代中期の遺物が多数出土した。この時期の遺物をまとめてここで報告する。

400～413は石庖丁である。400は99-1調査区包含層から出土した。外湾刃梢円形を呈し、表裏面に擦痕が見られる。幅5.1cm、厚さ0.6cm。ホルンフェルス。401は99-1調査区包含層から出土した。直線刃半月形を呈し、側端部を欠く。擦痕が僅かに観察される。長さ10.4cm、幅3.8cm、厚さ0.7cmを測る。ホルンフェルス。402は99-4調査区包含層から出土した。直線刃

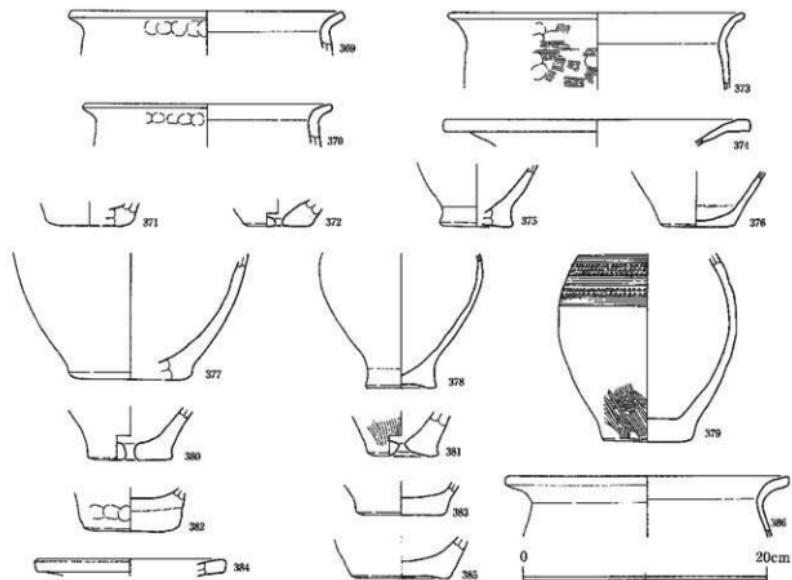


図85 弥生時代中期遺構出土遺物1